機関誌
観光文化
Tourism Culture

公益財団法人 日本交通公社

222
July 2014

特集 観光資源評価研究「美しき日本　旅の風光」

巻頭言
後世に残したい美しき日本　根本 敏則……1

特集
1 観光資源、観光地の魅力評価の系譜
——誰が評価してきたのか　溝尾 良隆……3
2 「観光資源」の評価と観光計画
——我々は「観光資源評価」をどう活用してきたか　梅川 智也……10
3 観光資源の今日的価値基準の研究　中野 文彦／五木田 玲子……20
4 温泉の評価を考える　石川 理夫……29
5 地域の食の評価　安田 亘宏……33
6 座談会 旅の風光を語る
楓 千里／林 清／日比野 健／志賀 典人／寺崎 竜雄……38

特集テーマからの視座　観光資源評価研究を振り返って　寺崎 竜雄……48

自主研究報告
1 里山エリアの活性化に果たす観光の役割に関する研究　堀木 美告……52
2 欧州の先行事例に学ぶ「持続可能な観光のための指標」の導入過程
——イギリス・アイルランド視察報告　清水 雄一……56

連載
Ⅰ あの町この町　第58回
スローシティのすすめ——福岡県・香春町　池内 紀……61
Ⅱ ホスピタリティーの手触り 79
「泊食分離」と「ターンダウン・サービス」　山口 由美……66

旅の図書館　掲示板
出版物のご案内・当財団からのおしらせ

瀬戸内・石積み練り塀の祝島（いわいしま）

波高い周防灘。その東端に位置する祝島は山口県上関町（かみのせきちょう）の孤島である。周囲約十三キロの島に四百五十人程が住み、漁業と農業で生活を支えている。この島は古代から海上を行き交う船の安全を守る神の島として崇（あが）められてきたと島民は語る。島の南側は黒潮に洗われ、巨岩や奇岩が雄大なスケールの光景を見せて美しい。海岸は岩礁がなく、タイ、サヨリ、ヒラメ、タコなどの魚類の宝庫でもある。

港から数十メートルも歩けば、石積みの練り塀が眼に飛び込み、漁家の家並みを一層引き立ててくれる。私は日本列島の街並みを取材し続けているが、石と漆喰（しっくい）が練り合わされた造形美に目を奪われてしまった。冬季の強い季節風を防ぐためばかりか、防火、防潮の役割を果たすのだという。未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選に入っているが、さらに伝統的建造物群保存地区に指定されるよう、上関町教育委員長の橋部好明さんは「これから文化財としても貴重ですから申請を出したい」と語る。

（写真・文　樋口健二）

巻頭言

後世に残したい美しき日本

一橋大学大学院商学研究科教授　**根本　敏則**

「にっぽん百名山」というテレビ番組（ＮＨＫ）がある。地元のガイドが一泊二日程度の行程で山の見どころを案内してくれる。時々、趣味の延長線上で山小屋の管理を引き受けている山好きも登場する。彼らは日本の山の美しさを自分のこととして喜んでいる。本格的な山歩きが難しくなった私も、番組を見て自然が豊かな日本を誇りに思うことができる。「にっぽん百名山」という番組自体は、どの程度の観光客が見込めるか、といったビジネスには無関心である。

観光学で、「観光資源」とは開発され観光業の商品となることが期待されるものとの解釈がある。同定義に従えば、観光客に評価されなければ観光資源として価値はないことになる。この捉え方は、入込客数の減ってきた観光地で観光業に携わる方の思いに近いかもしれない。余裕のある観光地なら、持続可能な観光を唱え将来の観光客にも評価してもらえるように、観光資源の保全に配慮するかもしれない。しかし、この場合も観光ビジネスモデルの変化は想定されておらず、観光地は将来にわたって同じやり方で観光業を営めることに関心がある。

人は地球に少なくともあと数千年は存在し続けるはずだが、将来の世代も観光のような行動はとるであろうし、現在の観光業のような観光支援サービス業も存在するはずである。ただ、余暇の過ごし方、利用可能な交通・情報通信手段などが違うので、観光ビジネスモデルは今とは違うはずである。直近でもインターネット普及の前と後では観光ビジネスモデルは変わってきた。さらに、百年で上場企業のほとんどが入れ替わると言われている。ということは、観光ビジネスモデルも変化していく中で、現在の観光業の都合で観光資源の価値を決めてしまうことには問題がありそうである。

観光資源を捉え直す上で、環境経済学で提唱されている「間接利用価値」「遺贈価値」が参考になる。間接利用価値とは他者の直接利用をテレビ番組、写真集などで間接的に追体験する楽しみを指し、遺贈価値とは将来の世代が直接利用して得られるであろう満足感を指す。環境経済学は現代世代の直接利用価値だけで環境を評価することが過小評価になると警告する。

遺贈価値の高い観光資源としては、現在は交通が不便で近づけない資源、将来解明されたら興味深いであろう自然のメカニズムや文化の由来を持つ資源が含まれるであろう。例えば、交通が不便な南米ギアナ高地には新種の生物が多数生息しているという。また、オホーツク海沿岸の流氷の下で繰り広げられる生物食物連鎖の不思議、弘前城で見栄えを犠牲にして桜の古木を残そうとする樹木医の美意識を知ることにより、それら観光資源はさらなる価値が付加されてより輝きを増す。

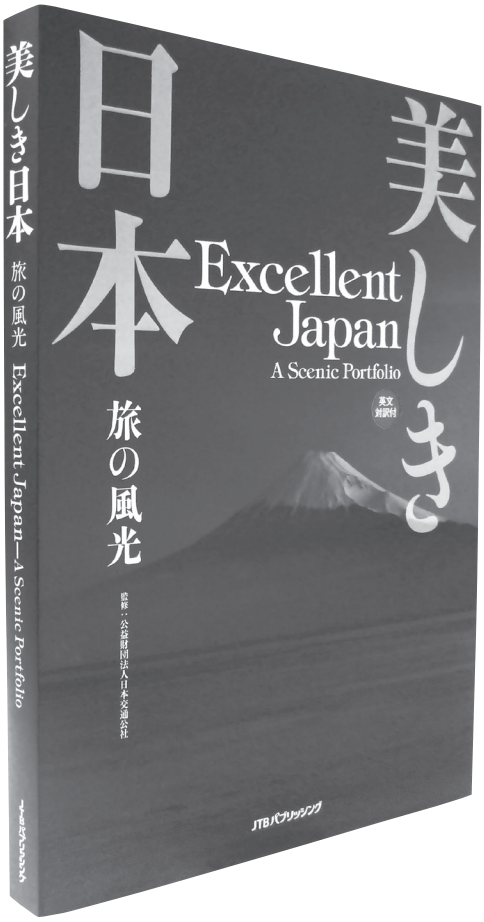
〝美しき日本〟にも遺贈価値の高い観光資源がたくさん存在している。

（ねもと　としのり）

特集

観光資源評価研究「美しき日本 旅の風光」

「日本における観光資源の評価に関する研究」成果の一部を、写真集「美しき日本 旅の風光」としてとりまとめ、五月に出版しました。今回の特集では、写真集の発刊を機にあらためて観光資源評価の枠組みや日本の美しさの根源などについて、それぞれの分野の研究者および当財団研究員の論考から考察します。



調査研究専門機関50周年記念事業
「美しき日本—旅の風光」発刊にあたって

本書は、公益財団法人日本交通公社が長年取り組んでまいりました「日本における観光資源の評価に関する研究」の成果を、調査研究専門機関として50周年を迎えたのにあたり、写真集「美しき日本 旅の風光」としてとりまとめたものです。1999年に当財団から「美しき日本—いちどは訪れたい日本の観光資源」を発刊いたしましたが、この趣旨を継承しつつも、本書では、この間の観光動向及び観光行動の変化に合わせ、評価のあり方を再検証し、抜本的に改訂いたしました。

現在、日本は観光立国を目指し、また2020年の東京オリンピックに向け、多くの外国人観光客を迎え入れようとしております。こうした時期にあって、本書では「美しき日本とは」「日本の魅力の原点とは」といった、観光を考える上での根源的な問いかけに今一度立ち返り、全国の数多くの観光資源を丹念に再評価し、再選定いたしました。

読者の皆様が、本書を通じ、日本の魅力を語り合い、時には外国の方にご紹介いただき、さらには新たな魅力を再発見・再発掘することによって、より豊かな「観光文化」を醸成いただく契機となれば幸いです。（後略）

2014年5月　公益財団法人日本交通公社　会長　**志賀典人**

観光資源、観光地の魅力評価の系譜

――誰が評価してきたのか

帝京大学経済学部教授　溝尾　良隆

1

写真1　美しいと捉える価値観から切り取られた美瑛町の農業景観（筆者撮影）

風景は人間がつくる

自然は何も言わない。人が自然に接し感動して、素晴らしい風景だという。その風景に多くの人が共感すると、自然の一部が観光対象資源になり、その風景を見るために、人はわざわざ出かけていくのである。

当初、自然は何に利用されるか分からない資源であって、湖であれば私なら全て観光資源と考えるが、他の人には湖は飲料水としての上水資源、あるいは人によっては魚介類を取る漁業資源になったりする。日本でコメの増産が必要だった時代、日本第二位の大きさの湖だった秋田県八郎潟が干拓されて農地に変貌（へんぼう）してしまった。当時、八郎潟は、農業資源が観光資源よりも価値があったからである。

東京電力にとって尾瀬ヶ原は水力発電に絶好の地で、ここにダムをつくる計画が戦前から存在していた。しかし、地元の人々や植物学者などこの風景を貴重とする多くの人たちの反対で、計画は実現されず、近年ようやく、その計画は破棄されたのである。

風景の見方

自然の一部が人間によって切り取られ、それが素晴らしい風景と言われるには、湖とか山のように、資源の範囲が明確なものは、その対象への感動の度合いを評価しやすいが、農村風景とか河川のように広範囲のものは、普通の人にはどこが優れているか捉えにくい。北海道美瑛（びえい）町の農村・農業景観（**写真1**）に今では多くの人々が魅入っているが、それは写真家前田真三の眼で美瑛の風景を切り取って、風景写真として世に紹介してから注目を浴び、彼の価値

観に人々が共感したからである。それまで観光客がほとんどいなかった美瑛は、今ではペンションや民宿が約四十五軒も集まる観光地となった（筆者は一九六九年七月、バスでここを通過するとき「ジャガイモ畑、麦畑が丘の斜面にみごとなスロープを描く」と記録している）。

同じく高知県四万十川は昔から存在したにもかかわらず、カヌーイストの野田知佑が「日本一の清流の川」というレッテルを貼り、一九八三年にNHKが四万十川を取り上げ、「日本最後の清流」と放送してから、観光対象となっていった。日本交通公社の『交通公社の新日本ガイド』を見ると、初版の一九七四年には、四万十川の文字はどこにも見当たらないが、一九九〇年になると、横書きのガイドブックに特別に別枠の縦書きにし、十二字×二十七行で紹介している（筆者は単なる川好きで、一九六二年に土佐中村から江川崎までバスで四万十川をさかのぼっていった）。専門的な立場から、前田・野田の両者が、風景の見方を一般人に教えたのである。

国木田独歩や徳冨蘆花は武蔵野に住み、武蔵野の自然の時間的季節的変化を観察した著書が評価されたが、彼らとて、ロシア文学からの影響を受け、何の変哲もないような自然に対し、その見方を学んだのである。

普遍的な評価の難しさ

自然資源、人文資源を問わず、全てが観光対象となるが、そこにはそれぞれに優劣の度合いがある。観光対象資源の嗜好には個人差があり、特に人文資源にその差は大きくなる。

建造物、庭園などの人文資源は、人間が精魂を込めて芸術作品に仕上げたものであるから、人の心を打つようにできている。しかし、優れているとレッテルを貼られても、芸術家の作品を一般の人が理解するのには時間がかかる。当然、作品には巧拙があるため、人に与える感動の度合いに強弱が生じる。

しかも、庭園に見るように、フランス、中国、日本と国によってその作り方が違うし、その国の人々の嗜好が異なる。山岳に対しても、ヨーロッパでも、日本でも、中国でも、見方が異なっていたし、それが時代により変化してきている。

雪のように、積雪地域では身近な雪が場合によっては害と見るのに対し、普段雪に接する機会がない九州や沖縄の人々、あるいは東南アジアの人たちにとっては、雪を見るのが憧れの観光資源である、といったように、同じ雪を見ても両者の見方は異なる。

事ほどさように、観光資源を評価し、その評価を万人が納得するのは難しい。

観光対象資源の評価の系譜

それでは、日本を中心に奈良時代から現代まで、誰が何を評価して、それを人々がどのように受け入れていったのかを概観する。

奈良時代～室町時代

奈良時代から室町時代までは残された文字を読むということから、上流階級の人々の間で憧れの地が知れわたるわけで、国家的事業であった古事記と日本書紀に登場する場所、古今集・新古今集に代表される「歌枕」の地、小説では源氏物語による明石・須磨・宇治などが思い浮かぶ、人気の地であった。

万葉集は古今集よりも早く編まれ、古今集の歌人たちには影響を与えたが、古今集・新古今集の陰に隠れ、その存在が再評価されたのは江戸時代中期で、国民に広く知れわたるようになったのは、明治時代に正岡子規が世にその素晴らしさを伝えてからである。

「歌枕」とは、多くの歌人たちによって和歌に詠まれてきた名所で、『能因歌枕』によれば、国別の歌枕の場所数は、山城に八十六、大和に四十三、それに続いて陸奥（みちのく）にも四十二とほぼ大和と同じ数になっている。

陸奥は京の貴人たちは、実際には行くことは少なかったが、塩釜・松島などに憧れを抱いて、歌に採り入れていったのである。歌枕ではサクラは吉野、モミジは龍田という場所の決めつけがされていたのである。

旅人は寺社への参詣が旅の主目的であった。熊野詣では平安時代前期の九〇七年に宇多上皇に始まるとされるが、本格化されるのは平安時代後期、一〇九〇年から十二回の熊野行幸を行った白河上皇からである。その後、鎌倉時代にかけて、鳥羽上皇が二十一回、後白河上皇が三十三回、後鳥羽上皇が二十八回も熊野詣でを行っている。

一二二一年承久の乱で、後鳥羽上皇の倒幕が失敗してから熊野は武士の参詣地となり、室町時代には庶民の参詣も盛んになった。伊勢神宮、金刀比羅宮、善光寺への参拝も、鎌倉時代には庶民に浸透していった。

鎌倉に武家政権が確立してから、鎌倉と京を結ぶ東海道の往来が盛んになるにつれ、著された数々の書物の中で、人気の高かった『伊勢物語』を踏襲しつつ、富士山を見た喜びを含めて東海道の名所の地が繰り返し記述された。

江戸時代―旅行の隆盛と観光地選定

五街道（東海道、日光街道、奥州街道、中山道、甲州街道）が整備され、参勤交代制度が実施されると、日本の主要道路の往来がにぎやかになってきた。

庶民の間でも、湯治や寺社参詣の目的で旅をする。それに合わせて、旅に関する情報も庶民に届くようになった。葛飾北斎の「東海道五十三次」、安藤広重の「名所江戸百景」や「東海道五十三次」が、名所の人気を高めるのに寄与している。

今では紀行文の代表である芭蕉の「おくのほそ道」は、当時、紀行文の位置づけが低く、芭蕉も紀行文は趣味の世界で出版する気はなかったほどである。俳諧の確立を目指した芭蕉の没後六十年くらい経ってから芭蕉の一連の紀行文も読まれるようになり、以降、俳句の道を志す人たちは、「おくのほそ道」を読み、芭蕉の跡をたどるようになったのである。

一五〇〇年、室町時代に選定された近江八景が江戸時代に定着し、それに合わせて全国各地に八景が誕生することになった。今日までよく知られている「日本三景」は、儒学者・林羅山の息子、林春斎が一六四三年に発表したときは「三処の奇観」といった。後、海内三景、三勝景と言われたりしながら、五十年後に「日本三景」に定着した。三景は、島または半島の水景を主とし、寺社を配した風景になっている。

現在あまり知られていないが、一六九〇年に俳人・大淀三千風が「本朝十二景」を選んでいる。江戸時代後半となると、これまでの「歌枕」のように想像上の地域でなくて、実際にその地を訪れて、旅（旅行）の対象地を評価するようになってきた。それが、地理学者・古川古松軒の『西遊雑記』『東遊雑記』であり、医師・橘南谿の『東西遊記』、画家・谷文晁の『日本名山図会』である。古川は、日本の観光資源・観光地を五段階に分けて評価し（**表1**）、橘も名山を五段階に分けている（**表2**）。谷は、日本の名山九十座を選んでいる。

明治時代～現代

明治時代になると、日本国内を自由に往来できるようになり、出版物や新聞、ラジオ、戦後にはテレビと、情報手段が発達すると、観光資

表2　橘南谿が選ぶ日本の名山（1795年）

1	富士山			
2	白山			
3	立山			
4	霧島山	雲仙岳	駒ヶ岳＊	鳥海山
	月山	岩城山	岩鷲山	
5	彦山	阿蘇山	久住山	姥ヶ岳
	海門岳	高峯＊＊	恵那岳	御嶽
	伊吹山	妙高山	戸隠山	地蔵岳
	筑波山	幸田山	御駒ヶ岳	

大山、妙義山は未だ見ず　桜島山は景色無双なる
＊信濃　＊＊石鎚山

注：橘南谿『東西遊記1』平凡社197pより著者作成

表1　古川古松軒の評価（1788年）

1	日本第一	富士山・田子浦及び清見ガ関・三保ガ崎
2	4、5目下	松島
3	松島の8、9目下	坊の津の海辺　天の橋立
4	先ばかり劣らんか	箱崎の海面・海の中道　須磨浦・明石より淡路島眺望
5	人びと好む所 勝劣を論ずべからず	和歌浦、厳島、象潟、住吉浦、桜島、佐賀の関、肥後玉島川、虹ヶ浜の風景、門司ガ関、柳ガ関、赤間関、鳥海山、月山、岩城山の雪景、雲州三保ガ関、弓の浜の海上、二見浦、鞆の津より伊予路の詠め、琵琶湖の浦うら、淀、浜川の浦、八幡、山崎、伏見の詠めより、長柄・難波津の景色

注1：彼は、「山で富士に越ゆるものなく、景においては松島にまさるものなし」という
注2：古川古松軒『東遊雑記』東洋文庫27（平凡社）245pより著者作成。
すべてに国名がついているが、わかりにくい地名のみに付記する

源の評価は、特定個人、全国民による投票、専門機関あるいは専門家を集めた委員会で行われた。さらには評価が世界的な規模でなされ、日本の観光資源の評価に影響するようになってきている。

明治時代、関所が廃止され、大井川など河川に橋が架けられ、人の往来が自由になった。一八七二年(明治五年)に、わが国に初めて鉄道が登場してから、国鉄、民鉄が急ピッチで鉄道を建設し、一九二二年(大正十一年)に鉄道の全国網はほぼ完成する。そのお陰で、これまで歌枕の地であった東北地方や、未知の北海道が、大町桂月(けいげつ)ら作家たちによる紀行文で紹介され、層雲峡や奥入瀬渓流が世に知れわたるのであった。

この時期、イギリス人宣教師のウエストンやイギリス人技師のガウランド(ゴーランド)らの外国人による山岳記録から影響を受けた地理学者・志賀重昂(しげたか)が、一八九四年(明治二十七年)に著した『日本風景論』の与えた衝撃は大きかった。この書ではこれまで人気の高かった、温和な優しい日本三景的な景観を否定し、信仰対象から登山対象に山岳を切り替えて、山岳のような規模の大きい観光資源こそ、日本が誇るものだと力説した。

林春斎、志賀重昂のような特定個人の評価が、国民に影響を及ぼすのは難しくなっていくが、戦後、一九六四年に作家で登山家の深田久弥が選んだ「日本百名山」は今日でも、多くの人の登山選定のバイブルになっている。

国民の投票による選出で最も大規模だったのは、一九二七年の「日本八景」選出である。はがきによる投票枚数は九千七百万枚を超えるという過熱ぶりであった。しかしこのとき、わざわざ「日本三景は除け」という条件を出し、「富士山は別格で選定の対象にしない」「昭和の新時代にふさわしく、これまでの個人の一部の趣味に片寄った鑑賞で定められている日本人の風景観を改める」という名目であった。日本三景は、新しい昭和の時代にはふさわしくないというのである。

こうした国民投票は、戦後もたびたび行われたが、影響があったのは一九五〇年の「新日本観光地百選」が最後である。このときに全国一位になった蔵王山が脚光を浴び、観光地の仲間入りをしていくのである。

一九三四年からの国立公園の選定に見るように、専門家を集めて審議して全国の中から、その基準に合った資源を選出するようになる。戦後に、国が文化財保護法(一九五〇年)に基づいて、国宝、重要文化財、天然記念物、名勝、史跡などを選定した。

同種のものは戦前にもあったが、国宝などの選定基準にあいまいさが

表3　日本の世界遺産

2014年6月現在

		登録名称	所在地	登録年月
自然遺産	1	屋久島	鹿児島県	1993年12月
	2	白神山地	青森県・秋田県	1993年12月
	3	知床	北海道	2005年7月
	4	小笠原諸島	東京都	2011年6月
文化遺産	1	法隆寺地域の仏教建造物	奈良県	1993年12月
	2	姫路城	兵庫県	1993年12月
	3	古都京都の文化財	京都府・滋賀県	1994年12月
	4	白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県・富山県	1995年12月
	5	原爆ドーム	広島県	1996年12月
	6	厳島神社	広島県	1996年12月
	7	古都奈良の文化財	奈良県	1998年12月
	8	日光の社寺	栃木県	1999年12月
	9	琉球王国のグスク及び関連遺産群	沖縄県	2000年12月
	10	紀伊山地の霊場と参詣道	三重県・奈良県・和歌山県	2004年7月
	11	石見銀山遺跡とその文化的景観	島根県	2007年6月
	12	平泉-仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群	岩手県	2011年6月
	13	富士山-信仰の対象と芸術の源泉	静岡県・山梨県	2013年6月
	14	富岡製糸場と絹産業遺産群	群馬県	2014年6月

資料：環境省・文化庁ホームページを基に公益財団法人日本交通公社にて作成

あり、戦後に見直しを図ったのである。選定の目的は貴重な資源を保護することであるが、国が選定したことで権威づけとなり、その地を旅行者が訪れることになり、保護資源が観光対象となっていく。町並みなどの伝統的建造物群保存地区（一九七五年制度発足）も同様である。

世界基準による日本の観光資源評価

情報が世界中に伝わるようになると、外国の機関が　日本の資源を評価したり、世界規模の評価の中に日本の資源が選定されたりするようになってくる。

ミシュランは、ホテルやレストラン、観光地の選定とランク付けを、自国のフランスから始め、ヨーロッパ各国に広げ、二〇〇五年にニューヨークへ、二〇〇七年に東京を評価対象地域に選んだ。同時に観光地の評価も行われ、高尾山が三ツ星になり、日本人だけでなく外国人が訪れる地にもなっている。

さらに強い権威付けとなったのが、ユネスコが登録する世界遺産である。一九七二年の世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約）採択後、わが国は二十年も経った一九九二年、百二十六番目という遅い批准国であったが、その後は、世界遺産を学ぶ大学の学科が新設されたり、世界遺産検定試験（民間資格、二〇〇六年開始）が実施されたりするなど、国民の関心は高くなっている。

海外旅行の商品では、世界遺産が何カ所含まれているかが集客に影響するほどである。二〇一四年現在、日本には自然遺産が四カ所、今年六月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が新たに登録されて、文化遺産が十四カ所存在する（表3）。

客観的評価への取り組みと風景の見方・見せ方

評価を客観化する手法を求めて

筆者はかつて観光資源評価の客観化に取り組んだ。風景の見方、評価は主観によるものだといつまでも言っていると、なぜ八郎潟は潰してもよくて、尾瀬ヶ原は駄目だということができるのか。それでは、他の観光資源はどうなるのか。優れた観光対象となる資源を保護するためにも、あるいは旅行者の誘致力を測定するためにも、観光資源の客観的評価の確立が望まれていた。

筆者はどのようにして観光資源を客観的に評価する手法を考察したか。

誤解を招くかもしれないが、単純化すると、次のような式を想定する。

$$y=b+a_1x_1+\cdots\cdots+a_nx_n$$

yは、専門家が評価した外的基準である。x_nはyを評価するいくつかの要因で、a_nは各要因の重みである。bは定数項である。

専門家が評価したように、いくつかの要因から観光資源が評価できないかというのが、筆者の研究であった。yにあたる外的基準については、筆者が専門家と言われる人十五名にインタビューして作成し、xの要因を考え、各要因の重みaとで計算していく。重みが分かり、要因が分かれば、yが求められるというものである。

湖の評価には、周囲の景観、透明度、接近性の三要因で評価できることを結論付けた。

観光対象資源をよりよく見せる

観光対象となる資源をよりよく見せるのが大切であるのに、来訪者により近くでよく見せようと競い合い、逆に観光関連の宿泊施設や飲食施設が利益優先のあまりに、観光対象に接近しすぎて本来の評価を低めている例が多い。その施設から風景の対象が美しく見えても、他の施設から見ると、その施設が前景に入ってしまい、せっかくの対象資源の景観を壊してしまっているのである。観光対象周辺に施設が乱立すると、世の人は「あそこは俗化した」とか「観光化しすぎた」といって、本来の価値への評価よりも低くめてしまう。

富士山が自然遺産の登録では無理だったので、文化遺産に切り替えたのもそうした例である。

富士山にしても、蔵王山、十和田湖にしても、自然資源が都道府県の境界になっているために、県間の競争になって、乱開発が生じている。それらの地域は国立公園、国定公園になっているので、国が一体的、総合的な整備や開発をするのが合理的であろう。

さらに、どの地点で観光資源を見せるかという、見せ方の問題も重要である。滝であれば、落差の高さ一・五～二倍の距離を滝からとり、滝の中央よりやや下部に観瀑台があるといいと言われる。滝つぼでは水量のすごさは感じても、滝の全体像が分からない。滝の上流部を見せてしまうと幻滅を感じさせることがある。もっとも、ナイアガラの滝やイグアスの滝のように、ものすごい水量で落下するのは、上流から見ても迫力がある。

十和田湖には、発荷峠（はっか）や御鼻部（おはなべ）山など十和田湖を見る眺望地点が数カ所ある。それぞれに特色ある風景が味わえるが、どこからどのように見せるか、どの眺望地点が優れているかは、地元で旅行者に知らせる以外にない。

同じように、松島を訪れる人のほとんどは、塩釜港から松島海岸まで船の遊覧で松島を観賞している。船上の旅行者と、江戸時代からの四大観、現在さらに好展望地として挙げられている三カ所からの松島を俯瞰した旅行者とは、同じ松島の風景を見たといっても評価は異なるだろう。

筆者が鳴子峡と奥入瀬渓流を訪れて、渓谷は、下流部から上流部に向かって歩くのがよいことがわかった。上流部に向かって歩くと、川の流れが目線と同じ高さになり、川を中心とした周辺の渓谷の風景がよく見える。上流部から歩くと、川の流れに押されるようでせわしくなるし、眼前に川はなく、川の方が低くなり、

写真2　御神体「那智の滝」と夏・年末の2回張り替えられる注連縄（しめ）/JTB Photo

見下ろさないと駄目になる。渓谷をこうした見せ方にしているかどうかである。

自然資源と人文資源との関係

最後に観光対象資源の評価の際に留意することを述べたい。山と湖は一体的に評価するとその度合いは高くなる。北海道の駒ヶ岳と大沼は、どちらが欠けても駄目である。富士五湖、それぞれの湖の評価でも、富士山がなかったら、どれだけの評価になるのだろうか。

観光資源の評価は、特集3の表2（22ページ）に見るように、普通は自然資源と人文資源とに分けるが、自然資源に人文資源的要素が入っているし、人文資源に自然資源的要素が入っている点を考慮して評価するのが重要である。

例えば、日本の山岳は、明治期に入るまでは、立山、白山、御嶽山のように信仰の対象の山、つまり人文資源的な評価をされてきたので、自然景観とともに宗教対象の山であることを評価に加える。那智の滝は、自然資源的評価も優れるが、さらに滝そのものが御神体であると分かれば、那智の滝の奥深さが理解できよう（**写真2**）。

同じように、巨岩は自然資源であるが、巨岩が神の磐座になっているところも多く、人文資源的要素を加えなければいけない。これまでは、オーストラリアのエアーズロックと呼ばれていた巨岩は、アボリジニの聖なる地であることを尊重して元々のウルルに戻された。

それは一般人には、世界で二番目に大きい単一岩が夕陽に照らされた赤い岩として、感動する自然資源であるが、昔からその地に暮らしてきたアボリジニはウルルと呼び、神聖な聖地であり岩に登るなんてとても許されるものではない。もしアボリジニが評価すれば、人文資源的な評価になろう。

庭園は人文資源に入っているが、元々は理想的な自然景観を人間の手によって構成されたのが庭園であるから、庭園には自然資源的な評価が必要なのである。庭園の今日的問題は、東京の諸庭園に見るように、周辺が高層ビルに囲まれて、これらのビル群に圧迫されて庭園に広がりが感じられなくなっていることである。京都などでも借景式庭園の背後の自然が開発されたり、背後にビルなどの人工物が入りこんだりして、庭園本来の価値が減じてしまっている点である。

日本の素晴らしい観光資源を遺すために

今回、公益財団法人日本交通公社で発行した『美しき日本 旅の風光』は、日本全体の優れている観光資源の大筋を紹介したもので、この資源がなぜ入っているか、なぜあの資源が入っていないかと疑問を持つ方もいらっしゃるであろう。理解を深めるために、当財団としては、なぜこれらの風景が素晴らしいのかというカルテを作成することが大切である。

全都道府県から、今回取り上げた対象と同等のもの、あるいはそれ以上のものがあれば、写真と評価内容をいただいて再検討する。それらを三年くらいかけて、日本の優れた風景を解説した最終評価の書籍を刊行してほしい。ミシュランの評価は、利用者からの多くの評価が集まり、再審査も考慮に入れているから信頼されているのである。観光資源のミシュラン版を確立してほしい。

これまで、日本の優れた資源を守ってきたのは、環境省と文化庁である。日本政府は、美しい日本、文化力のある日本を創造するためにも、両省庁の位置づけをもっと高くするべきであろう。

（みぞお　よしたか）

［参考文献］
・溝尾良隆『観光学と景観』（古今書院、二〇一二）

溝尾良隆（みぞお よしたか）
帝京大学経済学部地域経済学科教授、学科長。理学博士。公益財団法人日本交通公社理事。群馬県出身、東京教育大学理学部地理学専攻卒業。1964年株式会社日本交通公社外人旅行部に入社、1968年財団法人日本交通公社へ移籍。1989年立教大学社会学部観光学科教授。観光学部教授、観光学部長、日本観光研究学会会長を歴任。

「観光資源」の評価と観光計画

――我々は「観光資源評価」をどう活用してきたか

2

公益財団法人日本交通公社　理事・観光政策研究部長

梅川　智也

私が新米研究員として当財団に入社した頃、地域の仕事といえば、まずは「観光資源の分布図」を作ることであった。作成のプロセスは今で言うアナログな作業であるが、それを通じて地域の観光ポテンシャルが理解できた。

例えば**図1**は、全国の観光資源（特A級資源のみ・従来の評価基準による）の分布であるが、首都圏周辺では東京都心や日光周辺、富士山、北アルプス周辺等の観光資源集積が高いということが駆け出しでもよく分かった。そして、観光計画策定の要諦は、〝当該地域の観光ポテンシャルの把握にあり〟と諸先輩から教わった。そうした経験から、彼らが残してくれた「全国観光資源台帳」のおかげで、つまり、〝過去の蓄積〟で仕事をさせてもらっている……という感謝の気持ちをずっと抱いてきた。

この前提となる「「観光資源」の評価に関する調査研究」は、一九六八年（昭和四十三年）の**「観光資源調査の手法」**（当財団自主研究）などを契機として、全国の観光資源の客観的、総合的評価の必要性が指摘され、旧建設省道路局からの委託による一九七一年度（昭和四十六年度）～一九七三年度（昭和四十八年度）の**「観光交通資源調査・観光行動調査」**によって実施された。その評価結果が「全国観光資源台帳」（当財団）である。

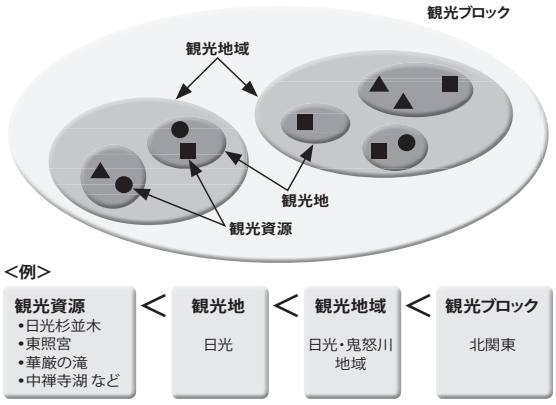
あるとき、某県の観光基本計画策定の中間報告会で、県内の観光資源評価について説明したとき、「我が町の歴史ある○○がなぜB級なのか、あなた方交通公社は我々の味方ではないのか」と町の観光課長に怒鳴られたことがあった。懇切丁寧に観光資源評価の体系について説明し、理解してもらうよう努めたが、残念ながら納得はしてもらえなかったと記憶している。

そうした経験から、諸先輩方の「観光資源評価」も必ずしも唯一絶対的なものではなく、評価に対する考え方は多様であるということ、そして、評価の軸がしっかりしていることこそが重要であるということを学んだ。

過去四十年間、我々は観光資源評価をどう活用してきたか

我々が、これまで観光資源の評価を、観光計画をはじめとする観光関連調査でどう活用してきたのかは、当財団が直接間接に関与したものだけを対象にしても、次のようなタイプに分類できる。

<参考>観光資源・観光地などのヒエラルキー



出典：財団法人日本交通公社

これまでの「観光資源の分類と評価」

1.「観光資源」の定義

○「観光資源」・・・「観光地の魅力を構成する要素の一つ」
定義・・・『「見る」観光の対象となりうる風景や文化的景観であり、現代の金や技術では簡単につくることのできない固有性、独自性を持つものであり、代替性がきかないもの』

○（参考）全国観光資源調査による「観光資源」の定義
－「利用者がそれを見ることにより、美しさ、珍しさ、偉大さ、深遠さ等を感じ、『自己発見』へといざなうもの。つまり日常生活とは異なった空間へ行き、『自らを知る』手がかりを与えるもの。」

2.「観光資源」の要素

①美しさ、②珍しさ、③大きさ（長さ、高さ）、④古さ、⑤静けさ、⑥地方色
→6尺度評価

3.「観光資源」の分類

①自然資源－山岳、高原、原野、湿原、湖沼、渓谷、滝、河川、海岸、岬、島嶼、岩石・洞窟、動物、植物、自然現象の15分類

②人文資源－史跡、社寺、城趾・城郭、庭園・公園、歴史景観、地域景観、年中行事、歴史的建造物、現代建造物、博物館・美術館の10分類

4.「観光資源」の評価と基準

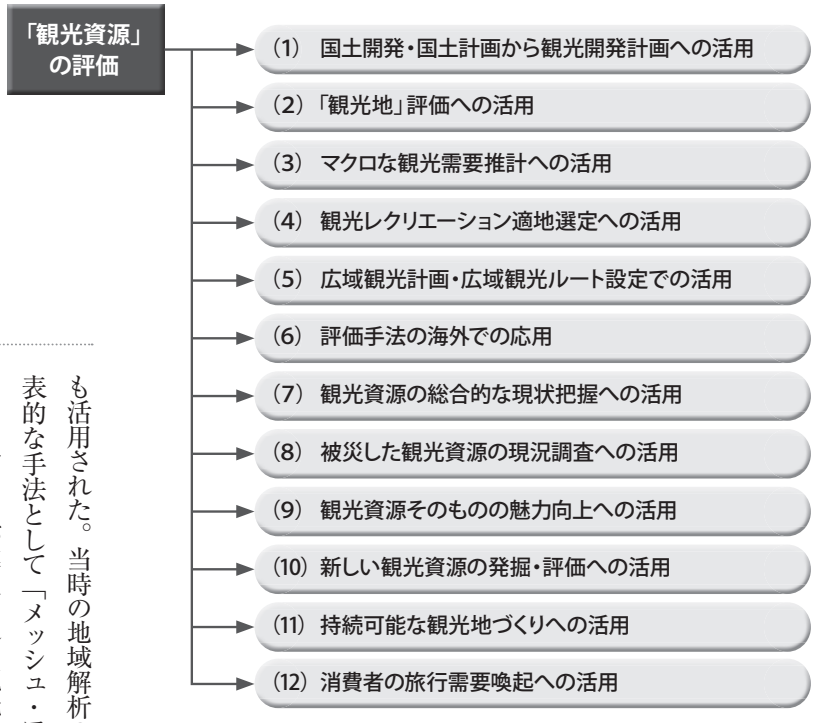
●特A級－わが国を代表する資源で、世界にも誇示しうるもの。わが国のイメージ構成の基調となりうるもの
例：富士山、摩周湖、法隆寺、姫路城、祇園祭りなど

●A級－特A級に準じ、その誘致力は全国的なもの、わが国の人は一生のうち一度は見る価値のあるもの
例：乗鞍岳、琵琶湖、清水寺、松本城、阿波踊りなど

●B級－地方スケールの誘致力を持ち、地方のイメージ構成の基調となるもの
例：筑波山、浜名湖、柴又帝釈天、津和野城跡、長崎ペーロンなど

出典：財団法人日本交通公社

「観光資源評価」の主な活用タイプ



(1) 国土開発・国土計画から観光開発計画への活用

観光資源の評価に取り組み始めた時代は、一九六〇年代前半からの高度経済成長をベースとした国土開発・国土計画、特に観光開発計画での活用を想定して行われ、全国の高速道路ネットワークなど交通計画にも活用された。当時の地域解析の代表的な手法として「メッシュ・アナリシス」(注1)が導入され、観光資源の分布がデータとして客観的に可視化されるに至った。

当時の代表的な調査研究としては以下が挙げられる(図2)。

- 「山形県総合観光基本計画」(一九七四、山形県・日本交通公社)
- 「メッシュ・アナリシスとレクリエーション適地の検索」(一九七六、当財団職員助成研究)
- 「観光開発計画の手法―観光立地条件調査」(一九七八、当財団自主研究)

(2)「観光地」評価への活用

「(国土の)正しい保護・開発の促進のためには観光資源・観光地の評価が必要である……」という鈴木忠義東京工業大学名誉教授(当財団評議員)の指導により、観光資源の評価と同時に「観光地」の評価にも取り組みが進められた。観光資源は〝観光地の魅力を構成する要素の一つ〟であるが、観光地を評価する「軸」は多彩であり、時代を超えて取り組まれている。

一九七〇年前後「新全総の時代」は、観光地としての開発ポテンシャル(魅力)のマクロ的把握の研究が行われた時代であり、代表的な調査研究としては、

- 「観光地の評価手法」(一九七〇~七二、(財)日本交通公社)

が挙げられる。観光資源評価の六尺度をさらに細分化して三十六尺度とし、六十五観光地に対して、主軸法、セントロイド法、バリマックス法などの手法を用いて、評価尺度の因子分析を行っている。その後、一九八〇年代中頃までの「三全総の時代」には、石油危機以降全国的に開発意欲が低減した時代であり、「地方の時代」と言われたものの、ほとんどこうした研究は行われていない。

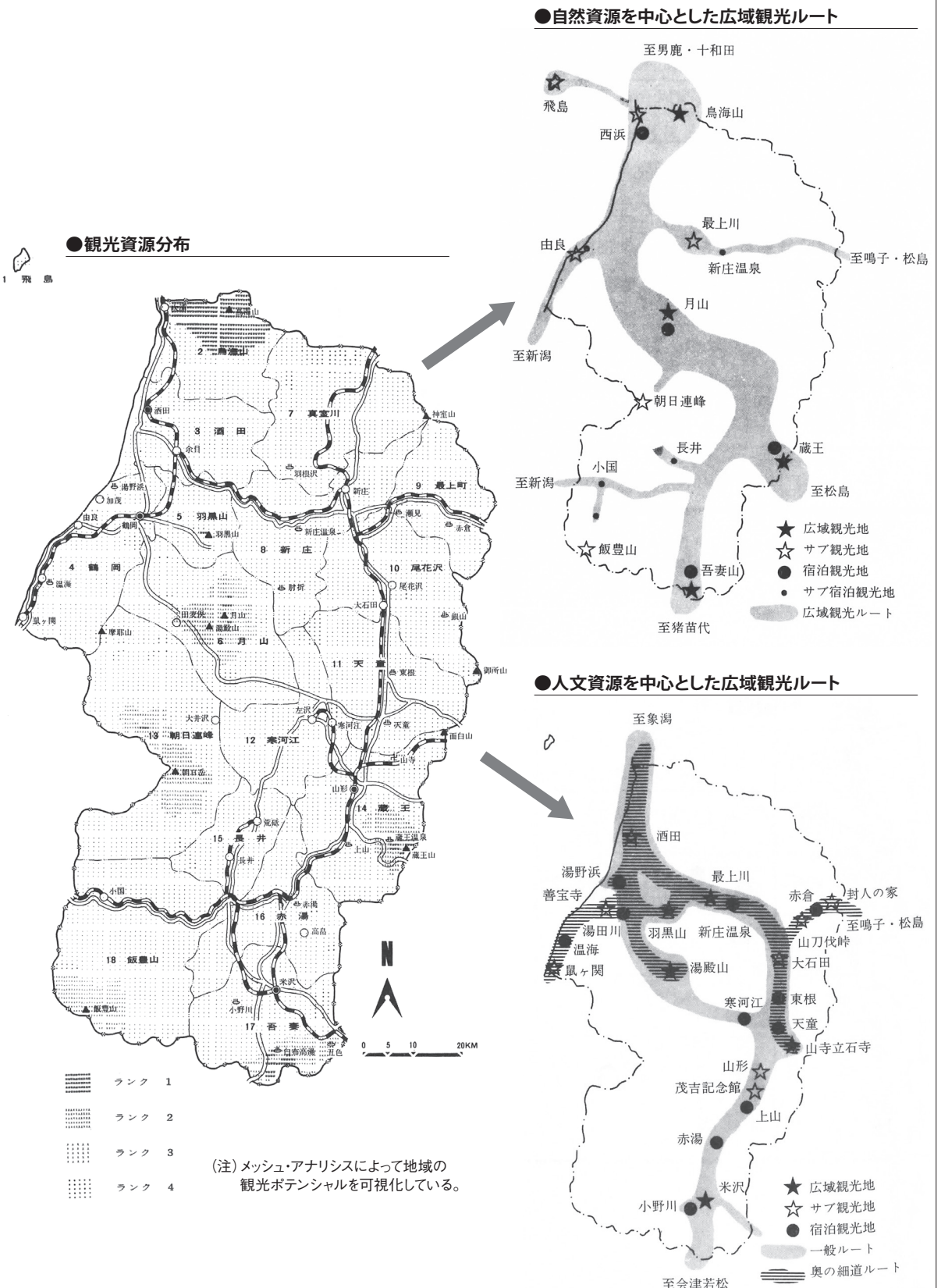
一九八〇年代後半以降、「四全総」以降になると、観光交通分野での研究が行われるとともに、目的地選択、周遊行動分析の一環として観光地魅力の定量化が行われた。その代表的な調査研究が以下である。

- 「新時代の国内観光」―観光地の魅力度評価の試み(一九九八、(財)運輸政策研究機構)

本研究は、当財団が協力し、観光地の魅力度評価を次のように体系化したうえで、具体的な観光地の評価を行っている。

①賦存資源(観光資源)…資源性/多様性/集積度
②活動メニュー…メニューの豊富さ/独自性・地域性
③宿泊施設…サービス水準/多様性/話題性
④空間快適性…アメニティ/雰囲気

図2『山形県総合観光基本計画』における観光資源評価の活用事例



出典:『山形県総合観光基本計画』山形県・財団法人日本交通公社　1974年3月

この研究のさらなる進化を目指したのが、

・「観光地づくりに向けた魅力度評価手法に関する研究」（二〇〇〇、（財）運輸政策研究機構）

であり、当財団が（財）運輸政策研究機構からの委託によって研究が行われた。

（3）マクロな観光需要推計への活用

観光資源評価を地域単位で数量化し、観光需要の予測に活用するという調査研究も一九七〇年代頃盛んに行われた。その代表例が以下であり、当財団が作業を受託している。

・「観光の需要予測」（一九七六～七八、（社）日本観光協会）

手法については、数量化理論Ⅰ類、Ⅱ類、システム・ダイナミックスなどが導入されており、観光レクリエーション発生量の推計、県際OD（注2）推計、県内地域別入込量などの他、観光レクリエーション施策の効果測定モデルなども構築されている。その説明変数として、数値化された観光資源の評価が活用されている。

（4）観光レクリエーション適地選定への活用

観光レクリエーション開発の適地選定にも、観光資源評価が活用された。なかでも林野庁による国有林野の「総合森林レクリエーション・エリア整備事業」においては、観光レクリエーション土地利用（計画）の考え方として、「観光資源の集積性」によって開発の方向性を定めている。具体的には観光資源が集積する観光拠点を避けてレクリエーション適地を選定している。また、観光レクリエーション交通（計画）では、広域観光周遊ルート設定に観光資源分布を活用している。

草津、知床、伊豆、栗駒、ニセコ積丹など多くのエリアで、当財団は基礎調査を受託したが、代表的なものとしては、以下が挙げられる。

・「支笏・定山渓地域総合森林レクリエーション・エリア整備事業基礎調査」（一九七八、林野庁札幌営林局）

（5）広域観光計画・広域観光ルート設定での活用

一九七〇年代半ばから、当財団では複数県、複数市町村にまたがる広域観光計画の策定業務を多数受託した。その策定プロセスの中で、「観光資源の分布と集積」を基礎調査として実施し、その状況を踏まえて広域観光ルートの設定を行っている。特に本四架橋の開通に伴う中四国地方や高速交通体系の整備が進んだ東北地方、九州地方で広域観光ルート設定に関する調査が実施された。

提案内容の中には、団体客に対応する「広域周遊」ルート、個人客に対応する「滞在＋エクスカーション」ルートなど、当時、台頭する個人客に対する工夫も見られた。

・「東北観光の問題点と誘客のための方策」（一九八五、（財）東北開発研究センター）
・「二十一世紀駿河路観光ビジョン策定業務」（一九九六～九七、（財）静岡総合研究機構）
・「三大架橋に係わる広域観光ルート策定調査」（一九九五～九六、（株）日本交通事業社）

（6）評価手法の海外での応用

観光資源評価の手法を海外に応用したのが以下の研究であり、当時、増加が予想される中国への日本人観光客への対応を検討したものである。

・「中国の観光資源評価の試み」（一九八二、当財団職員助成研究）

さらに、現在の（独）国際協力機構（JICA）による海外での国際協力事業に参画し、途上国における総合開発計画の中の観光開発分野を担当したが、そのプロセスの中で、日本の観光資源評価の手法が応用され、計画策定の基礎資料となった。

・「中国海南島総合開発計画調査」（一九八七、（財）国際開発センター）

（7）観光資源の総合的な現況把握への活用

観光資源自体だけではなく、アクセスや管理・運営の状況など周辺を含めた総合的な現況把握を実施するという、過去には行われてこなかった詳細な実態調査が行われた。しかも八年後にも同様に実施され、その間の整備状況や管理運営状況を比較検討するという業務を受託している。

・「青森県観光総合評価調査」（一九八九、青森県）
・「第二次青森県観光総合評価調査」（一九九七、青森県）

・「彩の国観光振興行動計画策定調査」（一九九七、埼玉県）

(8) 被災した観光資源の現況調査への活用

東日本大震災による大津波などによって被災した陸中海岸地域の観光資源の状況把握を目的に行われたのが以下の調査である。

震災発生から約二カ月後に当財団研究員を派遣し、観光資源評価を踏まえた目視による現況調査を実施した。二〇一一年（平成二十三年）六月には報告書として取りまとめ、当財団の「旅の図書館」やホームページなどで情報公開した。

・「東北地方太平洋沖地震後の陸中海岸地域における観光資源の状況把握調査」（二〇一一、当財団自主研究）

(9) 観光資源そのものの魅力向上への活用

市町村レベルの観光計画においては、観光資源をより魅力あるものにしていくための計画が多数提案されているが、ハードを含めて実現化させた例は多くない。

次の業務は、A級観光資源に付随する駐車場のアプローチ道路を本来あるべき姿に移設するとともに、資源の見せ方もピストン型から周遊型へと改良して滞在時間の延長を図る目的で計画されたものである。実際には駐車場の移設とアプローチ道路の変更のみが実現したが、整備のための補助事業（電力移出県等交付金）の選定から導入を含めて当財団がプロデュースした例である（図3）。

・「大内・中山地区整備マスタープラン」（一九九六、福島県下郷町）

(10) 新しい観光資源の発掘・評価への活用

全国一律の基準に基づいた観光資源評価だけでなく、その地域ならではの優れた資源を持つ地域は少なくない。そうした地域資源に光を当て、独自の資源として発掘・活用した事例が以下の調査である。

人文資源の「歴史的建造物」か「近代的建造物」のどちらかの範疇に入る「橋」であるが、四万十川流域においては地域独自の「沈下橋（ちんかばし）」を新しい観光資源として位置づけたり、どちらかというと地方部を想定した観光資源評価であるが、東京都においては、大都市の観光資源評価を改めて見直し、「都市観光資源」として新しい評価軸を構築したり、半島地域という特殊な地域の観光資源のあり方を検討した以下のような業務も受託している。

・「四万十川流域振興計画」（一九八六～八七、（財）地域活性化センター）
・「東京都新観光資源調査」（一九九七、東京都）
・「半島地域の観光資源及び活用状況等に関する調査」（二〇一〇、国土交通省）

(11) 持続可能な観光地づくりへの活用

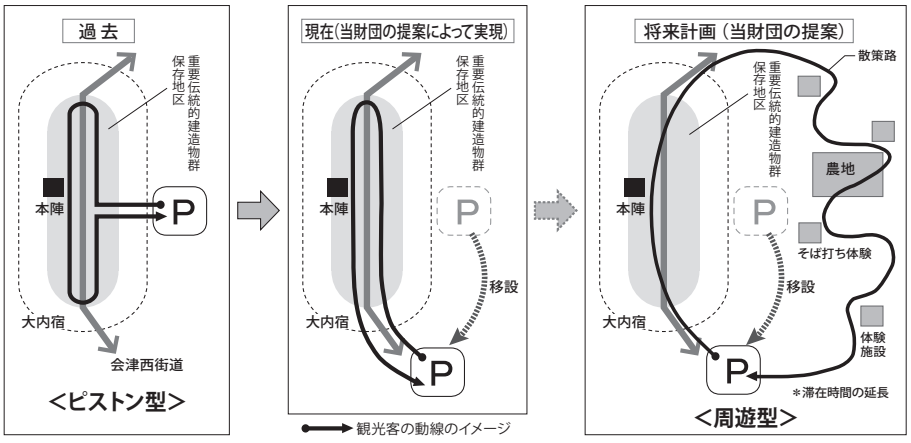
持続可能な観光地づくりを推進するためには、各地域でのバランスの取れた観光客の受入と多様な利用体験機会の創出が重要となる。沖縄県では、県全体の観光利用や観光資源の状況などを統一的に把握した上で、バランスの取れた観光拠点のあり方と観光地受入容量の定量化手法の研究を当財団に委託して実施しており、観光拠点台帳の作成に観光資源評価の考え方を導入している。

・「持続可能な観光地づくり支援事業（調査研究）」（二〇〇八～〇九、沖縄県）

(12) 消費者の旅行需要喚起への活用

円高による海外旅行の隆盛やバブル経済の崩壊などによって「国内観光の空洞化」が叫ばれた一九九〇年代、国内旅行の需要喚起を目的とし

図3 A級資源の魅力向上を目的とした「観光計画」策定の例



て、「観光資源評価」を活用した写真集が製作された。

その後、十五年を経て、海外からの旅行客が一千万人を超え、二〇二〇年（平成三十二年）の東京オリンピック・パラリンピックが決定した時期に当財団五〇周年記念事業として出版されたのが今回の写真集である。

- 『美しき日本～いちどは訪れたい日本の観光資源』（一九九九、当財団）
- 『美しき日本　旅の風光』（二〇一四、（株）JTBパブリッシング、当財団監修）

「観光資源」評価を巡るいくつかの論点

「観光資源の評価」を巡る論点はいくつかあるが、ここでは次の三点について言及する。

①「見る」対象としての観光資源からの脱却

②「空間（開発）のための評価」と「時間（利用）のための評価」のバランス

③「資源」単体の評価から「面」「管理運営」等も含めた評価の可能性

（1）「見る」対象としての観光資源からの脱却
―「感動」の変化

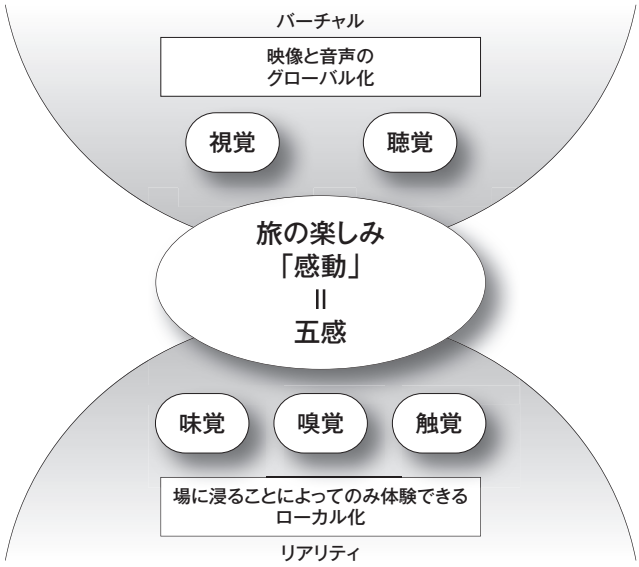
旅行の楽しみは、未知のものを見ること、体験することによる「感動」であり、これまでの観光資源評価は、「見て感動する、見て学ぶ」資源、すなわち「見る」ことに比重が置かれてきた。

いつの時代も「見る」ことを基本とした周遊観光の楽しさは普遍的であると思われるが、近年、特に感じるのはテレビや映画、インターネットなど映像の世界のグローバルな可視化によって、「実際に（リアルに）見て感動する」ことが相対的に低下しているのではないかと感じている。国内はもとより、世界各地の映像が毎日のように映し出されては、未知のものは限りなく少なくなる。

「感動」は図4に示すように、五感―視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚―で感じるわけだが、そのうち、視覚と聴覚はテレビやオーディオ機器、インターネットなどの発達により、それで人が感動することは難しくなってきている。

むしろ現地に行かないと体感できないもの―味覚、嗅覚、触覚―これらが新しい感動を生むのではないか。つまり「リアリティのある実体験」である。

図4　五感と「感動」の変化



テレビや雑誌で紹介された地域の食べ物や体験・経験などを味覚、嗅覚、触覚で確認して、期待通り、あるいは期待を上回ったことに感動する、つまり〝バーチャルな世界とリアルな現実とを再認識し、確認することこそが「感動」〟なのかも知れない。

（2）「空間（開発）のための評価」と「時間（利用）のための評価」のバランス―二つの評価軸

観光資源、そして観光資源評価は、二つの側面から見ることができる。すなわち「空間」と「時間」であり、人々を感動させる「空間」、感動させる「時間」である。

さらに言えば、観光資源の評価には、

- 「開発」（国土）のための評価軸
- 「利用」（旅行）のための評価軸

があり、観光資源の評価に関する研究が始まった一九六〇年代からこうした論点はあったものと推察できる。

前者は、「誘致圏、誘致力」（どこから人を呼べるか）が重要であり、

「（観光資源の）空間的な分布」が国土開発・国土計画にとって重要である。一方、後者で重要なのは「訪問価値」（訪れる価値があるか）であり、「（観光資源にまつわる）物語」が旅行の価値を決定づける。

図5は、観光資源・観光資源評価が持つ二つの視点・側面について整理したものであるが、一九六〇年代は明らかに前者であり、現代は後者と言いたいところであるが、実際には両者のバランスが求められているということである。つまり、どちらの視点も重要であり、時代に応じて重視される視点が異なるということであろう。

図5「観光資源」・「観光資源評価」が有する2つの視点・側面

	空間軸	時間軸
観光資源の捉え方	「観光地」を構成する魅力要素（空間）の一つ	「旅行」を構成する魅力要素（時間）の一つ
観光資源評価の目的	「開発」（国土開発）のための評価	「利用」（旅行促進）のための評価
	地域振興 地域活性化 観光立国	豊かな旅、旅行 人生を楽しく 国民福祉
観光資源評価の視点	供給側 マクロな視点 地域の側から	需要側 ミクロな視点 人間の側から
	＜誘致力、誘致圏＞ 世界から、全国から	＜訪問価値＞ 一生に一度は…
求められる時代背景	「開発」の時代 ディベロップメント	「管理運営」の時代 マネジメント
重視される視点	（観光資源の） 分布	（観光資源にまつわる） 物語
必要とされる計画	観光（地）計画	生涯旅行計画

（3）「資源」単体の評価から「面的な管理運営」等も含めた評価の可能性

我々の観光資源評価は、観光的な視点により観光資源評価委員会が合議によって評価した、いわば「絶対評価」である。

ムーディーズやスタンダード・アンド・プアーズ、フィッチなどの格付け機関、あるいは百年以上の歴史を持つミシュランのレストラン評価・観光地評価などと同じである。無論、我々に瑕疵があれば、見直しもあり得るし、さらなるバージョンアップも必要であると認識している。

一方で、「観光資源をどうマネジメントするか」、「観光資源の保護や活用」といった視点からすると、「どうすれば、評価を上げることができるのか」という発想が地域や管理主体などから出てくるのも必然であろう。資源単体ではなく、周辺も含めた面的な環境や管理運営の状態なども含めての評価であれば、世界遺産のように改善努力を組み込むような仕組みも取れるであろう。しかしながら、我々の評価は、地域からの申請方式ではなく、いわば全国を対象とした悉皆調査方式であることからすれば、四十年以上の知見の蓄積を踏まえた手法であり、妥当な評価方式であると考えている。

観光資源とこれからの「観光計画」

〝資源は一流だけれど、観光地としては二流である〟、〝資源にあぐらをかいて、活用のための努力をしていない〟などと言われる資源もある。この背景には、観光資源単体では素晴らしくとも、資源に至るアクセスや資源周辺の環境、管理運営などに魅力が欠ける、あるいはそれらを怠っている場合が多いことによる。それは、地域全体としての「マネジメントの必要性」を、「管理運営主体」が理解し、実行していないことを示している。

観光資源を含めた地域全体として保存と活用に関する基本的な理念・方針（ビジョン）を打ち出し、持続可能な戦略と戦術（施策）を、管理運営主体（行政を含む地域コ

ミュニティ）との関係性を踏まえて、提示するのがこれからの「観光計画」である。なお、観光資源を生かす「観光計画」の役割は、**図6**に示す通り、多岐にわたっている。

（1）地域としての魅力づくりの必要性

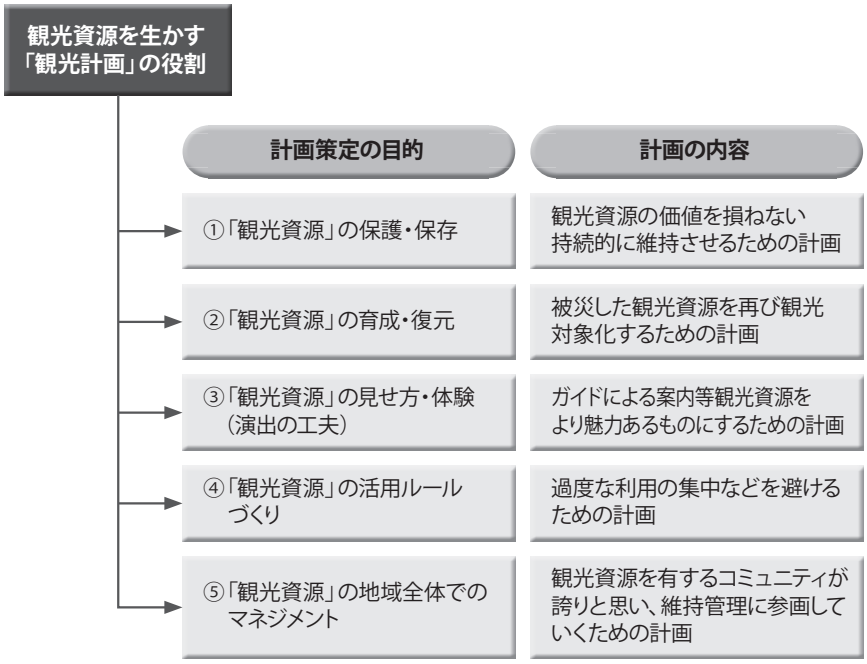
「観光資源」自体の保護・保存や維持管理は、将来の世代に引き継いでいかなければならない重要な課題であり、「地域としての魅力づくり」が近年ますますその意義が問われている。資源単体の魅力による誘客力には限界があり、地域総体として、あるいはある一定の空間的広がりとしての魅力が大切になってくる。つまり観光地としての総合的な魅力向上を目的とした「観光計画」が重要な役割を担っている。

（2）コミュニティとの密接な関係の構築

「観光資源」の適切な保護と利用に向けて、観光資源に対する地元住民の理解や誇りの醸成が不可欠であり、そのためには、行政や観光関連組織、住民を含めた地域コミュニティとの密接な関係の構築が肝要となっている。

具体的には、「観光客が訪れてみたい「まち」は、地域の住民が住んでみたい「まち」であるとの認識のもと、従来は必ずしも観光地としては捉えられてこなかった地域も含め、当該地域の持つ自然、文化、歴史、産業等あらゆる資源を最大限に活用し、住民や来訪者の満足度の継続、資源の保全等の観点から持続的に発展できる「観光まちづくり」を、「観光産業中心」に偏ることなく、「地域住民中心」に軸足を置きながら推進する必要がある」（「今後の観光政策の基本的な方向について」二〇〇〇、観光政策審議会答申第三九号）ということであり、地域としてのマネジメント、住民を含めた協働型の管理運営がこれからますます大切になる。それらを規定するのが「観光計画」である。

図6 観光資源を生かす「観光計画」の役割



（3）地域の自律性とサステナビリティ ―マネジメントの必要性

「観光計画」を策定するとき、地域としての理念、戦略が問われることとなる。無秩序な開発や発展が許されていいのか、環境に対する取り組み方針はどうかなど、地域コミュニティの自律性が、持続的な地域（観光地）の発展を促すこととなる。具体的には、環境容量（入込のコントロール＝空間）と成長管理（開発のコントロール＝時間）の二つが大きいと思われる。

例えば、カナダのバンフ国立公園**（写真）**では、以下の三原則を地域コミュニティとして決めている。

①人口は増やさない
②宿泊容量は増やさない
③開発エリアは増やさない

自らの地域をコントロールし、さらに魅力を高めていく「したたかな戦略」を自らが宣言し、地域としてマネジメントを実践している。

(4) 観光計画と資源管理計画との綿密な連携

「観光計画」は、残念ながら法的な担保がない。観光立国推進基本法においても明確に観光計画策定については規定していない。したがって、適切な資源の保存管理計画との連携が不可欠となってくるものの、その連携はほとんど行われていないのが現状である。

「自然資源」については、自然公園法に基づく国立公園制度の中で「公園計画」が策定されており、公園ごとに「管理計画書」が定められている。観光計画は、「利用に関する方針」を理解しつつ、利用者サイドからの提言・提案が求められる。

「人文資源」については、文化財保護法に基づく「保存活用計画」、文化庁による「歴史文化基本構想」、都市計画法に基づく「都市計画マスタープラン」、歴史まちづくり法（通称）に基づく「歴史的風致維持向上計画」などを理解しつつ、観光計画の策定を進める必要がある。世界遺産地域についても、「世界遺産地域管理計画」に基づく「適正な利用」を踏まえた観光計画の策定が求められる。

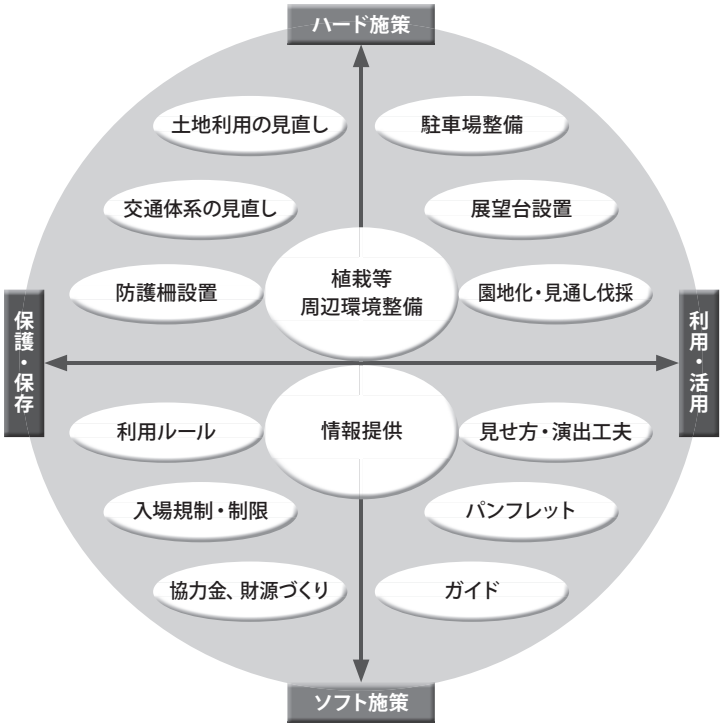
いずれにしても、保護と利用が個別に進められてきたことは否めず、そのバランスを踏まえた計画策定と地域マネジメントの実践こそが「観光計画」に求められている（図7）。

当財団としては、観光資源の評価、そして観光資源の保存と活用に関する知見を生かし、これからの「観光計画」のあり方を始めとする各種「観光研究」を進めて参りたい。

（うめかわ　ともや）

観光資源（カスケード山）をアイストップに（カナダ・バンフ）

図7「観光資源」をより魅力あるものとするための方策の例



（注1）国土を一定のルールに従って隙間なく網の目（メッシュ）の区域に分割し、それぞれの区域毎にデータを集めて数値化し、地域解析を行う分析手法。近年では「地域メッシュ統計」と言われ、総務省統計局をはじめとする国の行政機関によって「標準地域メッシュ」が作成されている。

（注2）O−Origin（出発地）、D−Destination（目的地）

［参考文献］
・鈴木忠義、原重二「観光旅行と観光資源」一九九九、写真集『美しき日本』（財）日本交通公社
・梅川智也「「評価元年」―観光地の評価・格付けは定着するか／座談会を終えて」一九九九、『観光文化136号』（財）日本交通公社
・梅川智也「環境資源の持続的利用について―観光的側面から」二〇〇一、『富士山シンポジウム2001／セッション5：富士山の環境資源とその活用』、山梨県環境科学研究所

観光資源の今日的価値基準の研究

3

公益財団法人日本交通公社　総務部企画課長 主任研究員　中野　文彦
観光文化研究部 主任研究員　五木田　玲子

調査研究専門機関として五〇周年を迎えることを契機とし、当財団が長年にわたって継続してきた「全国観光資源台帳（一九七四年・一九九九年）」の趣旨を継承しつつ、今日の観光動向および観光活動の変化を勘案した「評価の枠組みの再構築」と「観光資源の再評価」を行った。

〝今日的〟の意味合い

「全国観光資源台帳」が作成された当時から現在に至るまでの観光を取り巻く社会環境の変化を概観し、評価の枠組みを再構築するにあたり、次のような点に着目した。

観光を取り巻く社会環境の変化

観光活動の多様化

物見遊山の周遊型観光が中心であった時代から、現在は「見る」だけでなく、「体験する」ことにも観光活動の範囲は広がっている。

また、直感的に認識できる「感性」的側面だけでなく、その背景にある歴史や生活文化等の「知性」的側面へと興味関心が広がってきた。

さらに、何げない日常の営みや街並み、独自の風景が織り成す地域の歴史・風土への注目も高まっている。

テレビの高画質化やインターネット技術の進展により、画面を通して観光資源に接する機会が増加したが、その反面、実際にそこに「居ること」によって得られる体験が重視されるようになり、観光資源の「周囲の雰囲気や環境」が重要な要素となっている。

海外旅行経験率の上昇

日本人の海外旅行の経験率が上昇し、海外の観光資源に触れた人が増加した。そのため、よりダイナミックな海外の観光資源に触れた旅行者は、国内の観光資源に対する評価もより厳しくなった。それに伴い、日本の文化、生活感といった日本人としてのアイデンティティや日本らしさを感じさせる観光資源を重視する意識が高まっている。

外国人旅行者数の増加

二〇〇三年（平成十五年）に観光立国を標榜（ひょうぼう）して以降、二〇一三年（平成二十五年）に初めて一千万人を超える等、訪日外国人旅行者数は大きく拡大した。またアジア圏を中心にリピーター率が増加するにつれてニーズも多様化した。こうした訪日外国人旅行者の数やニーズは、二〇二〇年（平成三十二年）の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、さらに大きく変化することが予想される。

そのため、日本の誇るべき文化としてどのような観光資源を紹介するべきかといった、国際的な視野もより重要となっている。

既存研究からの変更点

評価対象とする観光活動の拡充

観光活動の多様化を受け、「見ること」に加え、「居ること」「体験すること」も評価対象とした。

その場に立って、周囲の雰囲気に感じ入ることも代表的な観光行為

であり、独自の風景が織りなす地域の歴史・風土を感じることは、今日的な観光を考える上では非常に重要な視点である。

観光資源種別の拡充・統廃合

観光活動の多様化に伴い、評価対象とする観光資源種別に「テーマ公園・テーマ施設」「温泉」「食」「芸能・興行・イベント」を加えた。

「テーマ公園・テーマ施設」については、これまで人の手で作り出せるものであるとして評価対象としてこなかった。しかし、開業から一定程度の年数が経過しているもの、普遍的または特徴的なテーマ性を有し、それらが統一的に表現されているもの、それを深く感じることができるものについては、評価対象とすることとした。

「温泉」「食」は、これまでは「見る」観光資源ではなかったこともあり、評価対象としてこなかった。しかし、「入浴する」「食べる」などの体験は、その場所でしか果たすことのできない、地域性に触れる観光行為であり、「温泉」「食」は誘引力を発揮する観光資源であることから、評価対象に加えた。

伝統芸能やスポーツ、イベントなども感動の源泉となりうる観光資源であることから、「芸能・興行・イベント」として取り上げた。ただし、内容だけでなく場所の必然性も重視し、場所と演目とを合わせた資源としてリストアップし、評価対象としている（例：○○（場所）で上演される△△（演目））。

これまでの「歴史景観」「地域景観」の区分は、歴史的街並みや現代都市などからなる「集落・街」と、地域風土が織りなす人との営みがうかがえる「郷土景観」に整理した。

「集落・街」は、日本らしさや地域の特色を表している現代都市を中心に評価対象資源を拡充した。

「郷土景観」については、人が織りなす風景やその土地の産業景観などを中心として、評価対象資源を大幅に拡充している。

「神社・寺院・教会」は、その範囲を再整理した。既存研究では、社寺の庭園は社寺と切り離して庭園・公園として評価していたが、社寺は、仏像、建物、庭園、植物などの要素の複合物であり、一体的な空間として人が作ったものであることから、社寺に含めて評価することとした。また、同様の考えから、塔頭も本坊に含めて評価することとした。これに伴い、「庭園・公園」の範囲についても再整理している。

これまでの「高原」「湿原」「原野」、「河川」「渓谷」、「海岸」「岬」については、資源の特徴や評価の視点に共通点が多かったため、「高原・湿原・原野」、「河川・渓谷」、「海岸・岬」として統合した。

「島」については、観光地としての評価になっていたため種別を廃止し、島内にある個別資源を評価対象とした。

評価の視点の拡充

既存研究の観光資源評価の視点は、「美しさ」「大きさ」「静けさ」「古さ」「珍しさ」「地方色」の六つであったが、観光活動の多様化や観光市場のグローバル化に伴い、「日本らしさ」「住民とのつながりの深さ」を加えた八つとした。いずれも、直感的に認識できる「感性的側面」と、知識や丁寧な解説などから認識できる「知性的側面」の両側面を意識している。

観光資源評価の枠組み

こうした今日的価値基準の着眼点を基に、観光資源の考え方、観光資源ランク、観光資源種別、評価の視点といった観光資源評価の枠組みを再構築した。

観光資源の考え方

観光資源、観光活動、魅力ある観光資源の定義については、既存研究を継承しつつ、次のように定義づけを行った。また、評価対象とした観光資源についても明文化した。

【観光資源の定義】

観光資源とは、人々の観光活動のために利用可能なものであり、観光活動がもたらす感動の源泉となり得るもの、人々を誘引する源泉となり得るもののうち、観光活動の対象として認識されているものである。

観光活動とは、見ることや、その場に身を置くこと、体験することにより、感性や知性を通して観光資源の「素晴らしさ」を感じることで、人生が豊かなものになり、人間的な成長を促される行為である。

魅力ある観光資源とは、自然や人間が長い時間をかけて創り出したものであり、現在のお金や技術で容易には創り出すことができない「固有性」や「土着性」、「独自性」を持ち、他に「代替」がきかないものである。その資源が本来有している魅力に加え、その整備状況も評価の対象とし、資源の現在のあり様を評価対象とする。ただし、アクセスの容易さのように、資源のあり様と関係の薄い要因によって多くの観光客が訪れることもあり、多くの観光客が訪れているからといって観光資源の魅力が高いということにはならない。

【評価対象とした観光資源】

- 観光資源の定義を満たすもので、スポーツのように特別な技能を要さない、ごく一般的な利用方法によって認識できる部分を評価対象とする。
- 観光地は複数種類の観光資源や観光施設が集積して構成されている。今回の評価対象として取り上げるのは、あくまで個々の観光資源であり、観光地は評価対象とはならない。
- 視点場は評価対象とならない。感動の源泉となり人々を誘引する源泉となるのは、視対象であるためである。
- 一時期の社会的流行や風潮によらず、資源が本来有している魅力を評価するため、社会的に評価が定まっていると考えられる資源を評価対象とし、観光対象となってから原則としておおむね20～30年程度が経過したものを中心に評価を行う。

観光資源ランク

日本の各地に立地する数多くの観光資源の中から、とりわけ魅力があるものを選定するため、以下の2つのランクを設けた（表1）。

観光資源種別

観光資源は、「自然資源」と「人文資源」の二つに大きく区分し、それぞれ十種類、十四種類、計二十四種類に分類した（表2）。

評価の視点

「美しさ」「大きさ」「古さ」「珍しさ」「静けさ」「日本らしさ」「地方らしさ」「住民とのつながりの深さ」の八つを評価の視点とした（表3）。

また、観光資源種別ごとの特徴を踏まえた個別の評価の視点も設定しており、参考として表6に掲載した。

観光資源の評価

前述の枠組みを用い、観光資源の再評価を行った。評価方法と評価結果は以下の通りである。

評価方法

長年にわたって観光の現場を見続けてきた観光研究者や観光実務の専門家など有識者七名による「観光資源評価委員会」を設置し、評価の枠組みの構築と評価を行った（表4）。

また、研究の過程では、日本の自

表1 観光資源ランクの定義

資源ランク	定義
特A級	わが国を代表する資源であり、世界にも誇示しうるもの。日本人の誇り、日本のアイデンティティを強く示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。
A級	特A級に準じ、わが国を代表する資源であり、日本人の誇り、日本のアイデンティティを示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。

表2 観光資源の種別

自然資源（10種別）		人文資源（14種別）		
01 山岳	06 海岸・岬	11 史跡	16 庭園・公園	21 テーマ公園・テーマ施設
02 高原・湿原・原野	07 岩石・洞窟	12 神社・寺院・教会	17 建造物	22 温泉
03 湖沼	08 動物	13 城跡・城郭・宮殿	18 年中行事	23 食
04 河川・峡谷	09 植物	14 集落・街	19 動植物園・水族館	24 芸能・興行・イベント
05 滝	10 自然現象	15 郷土景観	20 博物館・美術館	

	自然資源	人文資源	合計
特A級	15	40	55
A級	143	253	396
合計	158	293	451

然や文化、観光への造詣が深い国内外の有識者を専門委員として迎え、助言を得た。

観光資源の評価にあたっては、一つ一つの観光資源を委員会で丁寧に議論し、前述した評価の視点を組み合わせた総合的な判断の下、特A級、A級資源を決定した。

評価結果

今回改訂した「全国観光資源台帳」は、一九九九年（平成十一年）の資源台帳（特A級、A級、B級の約二千件）に、新規種別の資源（テーマ公園・テーマ施設、温泉、食、芸能・興行・イベント）を中心に評価委員会委員や専門委員からの推薦、各種文献等から抽出した約三千五百件を加え、合計約五千五百件となった。

この「全国観光資源台帳」から、特A級・A級資源として、四百五十一件を決定した（**表7参照**）。その内訳は、自然資源では、特A級十五件、A級百四十三件、人文資源では、特A級四十件、A級二百五十三件である。

（なかの　ふみひこ／ごきた　れいこ）

表4『観光資源評価委員会』構成員および専門委員

役職名は2014年4月1日時点のもの（五十音順・敬称略）

【『観光資源評価委員会』構成員】

＜委員＞	
梅川　智也	公益財団法人日本交通公社理事・観光政策研究部長
楓　　千里	株式会社JTBパブリッシング執行役員
志賀　典人 ＊委員長	公益財団法人日本交通公社会長
寺崎　竜雄	公益財団法人日本交通公社理事・観光文化研究部長
林　　清	元・公益財団法人日本交通公社常務理事
日比野　健	株式会社ジェイティービー代表取締役専務
溝尾　良隆	公益財団法人日本交通公社理事（非常勤）／帝京大学教授
＜特別顧問＞	
今井　久吾	元・公益財団法人日本交通公社会長
小林　　清	元・公益財団法人日本交通公社会長
新倉　武一	前・公益財団法人日本交通公社会長

【専門委員】

家田　　仁	東京大学大学院教授
石川　理夫	日本温泉地域学会会長／温泉評論家
グラハム　ミラー	サリー大学教授
小磯　修二	北海道大学公共政策大学院特任教授
島田　崇志	京のまつり研究会代表
下地　芳郎	琉球大学教授
下村　彰男	東京大学大学院教授
白幡　洋三郎	国際日本文化研究センター名誉教授
進士　五十八	東京農業大学名誉教授・前東京農業大学学長
西村　幸夫	東京大学先端科学技術研究センター教授
根本　敏則	一橋大学大学院教授
橋爪　紳也	大阪府立大学21世紀科学研究機構教授・観光産業戦略研究所長
本保　芳明	元・観光庁長官／首都大学東京教授
安島　博幸	立教大学教授
安田　亘宏	西武文理大学教授

表3　観光資源評価の視点

美しさ	視覚的な美しさをもつ資源が評価される。たとえば、鮮やかな色彩や洗練された造形、繊細な細工、調和のとれた景観は美しさを感じさせる。美しさは総合評価の性格も有し、雄大さ（山岳など）や季節感（植物など）、日本らしさ（年中行事）などと結びつくと評価が高まる
大きさ	視覚的な大きさ、雄大さ、迫力をもつ資源が評価される。また、山岳の形成史（造山運動）など、視覚的にとらえられなくても背景のテーマに物理的な大きさがあれば評価が高まる
古さ	資源の形成された年代が古い資源が評価される。また、古いだけではなく、日本の歴史や地域の歴史、伝統にとって重要なものは評価が高まる
珍しさ	希少性をもつ資源が評価される。解説によって理解が増大する珍しさが一般的だが、視覚的にもその珍しさが理解できるものは評価が高まる
静けさ	資源と対峙するときに、資源の存在を強調（神秘性や荘厳さ）するような静かな環境や雰囲気をもつ資源が評価される。一方で、観光資源の種類によっては、賑わいや猥雑さが評価を高める場合もある
日本らしさ	日本の自然や歴史、文化、日本人の心情が反映され、継承されてきた資源が評価される
地方らしさ	地方独自の自然や歴史や文化、風土を感じさせ継承されてきた資源が評価される
住民とのつながりの深さ	今なお住民の生活に組み込まれていたり、誇りに思われているなど、地域住民のアイデンティティの一部となっているものが評価される

表5　観光資源種別ごとの特A級、A級観光資源数

自然資源	01 山岳	02 高原・湿原・原野	03 湖沼	04 河川・峡谷	05 滝	06 海岸・岬	07 岩石・洞窟	08 動物	09 植物	10 自然現象	合計
特A級	5	1	1	2		3			3		15
A級	32	13	13	18	5	22	6	11	14	9	143
合計	37	14	14	20	5	25	6	11	17	9	158

人文資源	11 史跡	12 神社・寺院・教会	13 城跡・城郭・宮殿	14 集落・街	15 郷土景観	16 庭園・公園	17 建造物	18 年中行事	19 動植物園・水族館	20 博物館・美術館	21 テーマ公園・テーマ施設	22 温泉	23 食	24 芸能・興行・イベント	合計
特A級	1	13	4	3	2	1		5		4	1	2	2	2	40
A級	6	59	14	19	20	12	13	26	3	15	4	31	19	12	253
合計	7	72	18	22	22	13	13	31	3	19	5	33	21	14	293

なものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国またはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。
- 保存状態：城跡・城郭の築城技術に独自性が高いものは、評価が高い。その資源が状態良く保存・復元され、真正性の良いものは、評価が高い。

14. 集落・街

【定義】
- 農山漁村や歴史的街並み、繁華街、商店街などにより、その土地の自然や歴史、文化を表す特徴的な集落・街区を構成している地区

- 容姿：面的または線的な広がりを持ち、各要素が調和して一体感のあるものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国もしくはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。
- 保存状態：その土地の歴史や文化を知ることのできる資源が、状態良く保存されているものは、評価が高い。
- 人の織りなす雰囲気：静けさ、賑やかさなど、人が織りなす雰囲気があると、評価が高い。

15. 郷土景観

【定義】
- その土地の産業、生業や風習、人の織りなす風景など、その土地の自然環境や歴史、文化を表す特徴的な景観を構成している地区

- 容姿：面的または線的な広がりを持ち、各要素が調和して一体的なテーマを構成しているものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国もしくはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の歴史や文化を知ることのできる資源が、状態良く保存されているものは、評価が高い。

16. 庭園・公園

【定義】
- 鑑賞や散策などのために作庭および造成された庭園・公園。社寺、城郭等に含まれるもの、自然公園は対象外。体験要素の強い公園は「テーマ公園」に区分

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国もしくはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

17. 建造物

【定義】
- 建物、橋、塔などの建築物や構築物（社寺、城郭に含まれるものを除く）。複数の建造物が集積しているものは、「集落・街」または「郷土景観」に区分

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。雰囲気やたたずまいの優れているものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国もしくはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

18. 年中行事

【定義】
- 社寺や市町村あるいは各種団体が開催日を決めて定例的に催す祭りや伝統行事

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、大きく迫力のあるもの、特徴的なものは評価が高い
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国またはその土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。地域住民の生活と深く結び付いているものは評価が高い。

19. 動植物園・水族館

【定義】
- 動植物を収集、飼育、展示する施設

- 展示物の容姿：展示している動植物またはその群れの姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 展示方法：動植物の生態や生息・生育環境を深く感じることができるものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国またはその土地の自然環境や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

20. 博物館・美術館

【定義】
- 歴史的資料・科学的資料や芸術作品（絵画、彫刻、工芸品等）を収集、保存、展示する施設。および歴史的事象などの記録、保存等のために作られた園地

- 展示物の容姿：展示品の姿・形が美しいもの、大きく迫力のあるもの、規模が大きいものは、評価が高い。
- 展示方法：展示品のテーマや意義などを深く感じることができるものは、評価が高い。
- 展示物の価値：展示品の歴史的、文化的価値が高いもの、著名な作者によるものは、評価が高い。
- 展示施設：施設そのものや付随する建造物の歴史的・文化的価値が高いものは、評価が高い。

21. テーマ公園・テーマ施設

【定義】
- 特徴的な概念（テーマ）を表現し、それを体験するために造られた園地や施設

- 施設：その資源の規模が大きいもの、多様な施設を有するものは評価が高い。その資源の歴史的・文化的価値が高いものは、評価が高い。
- 施設テーマ：そのテーマが普遍的または特徴的なものであり、それらが統一的に表現されていること、それを深く感じることができるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

22. 温泉

【定義】
- 温泉湧出現象、源泉の活用（入浴）法と施設、温泉文化、情緒を表す温泉場の環境

- 湧出現象、お湯そのもの：泉質や湯量、色、温度などお湯そのものに特色のあるものは、評価が高い。
- 浴場・建物：浴場や建物が優れているものは、評価が高い。
- 入浴環境（眺望など）：浴場からの眺望など入浴環境が優れているものは、評価が高い。
- 温泉文化：わが国またはその土地の温泉文化（入浴方法、飲泉方法、利用方法、歴史的背景等）や自然、歴史に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。
- 街並み：温泉街が整っているもの、特徴的なものは、評価が高い。

23. 食

【定義】
- その土地の自然や歴史、文化を表す特徴的な食事や食文化、食事環境

- 地域とのつながり：食事や食文化として、その土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。
- 人の織りなす雰囲気：食事環境として、賑やかさ、猥雑さ、祝祭性など、人が織りなす雰囲気があると、評価が高い。

24. 芸能・興行・イベント

【定義】
- 地域の歴史、文化を表す興行や芸能、イベント

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、大きく迫力のあるもの、特徴的なものは評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国もしくはその土地の地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。その興行・芸能とつながりの深い場所で上演されているものは、評価が高い。

表6 観光資源種別の定義および個別の評価の視点

01. 山岳

【定義】
- 2万5千分の1の地形図に山岳として名称が記載されているもの。山頂、山腹、山麓・裾野を含めた範囲

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い（遠景から認識できる特徴ある山容等）。
- 林内景観：山岳が有する自然（高原、湿原、湖沼、滝等）を含め、山岳に踏み入る（登る、眺める、浸る）ことによって、特徴的な四季の変化（高原植物等の群落、紅葉等）を見ることができる等、総合的な魅力があるものは、評価が高い。
- 眺望：山頂または登山道からの眺望が特に美しいもの、雄大なもの、特徴的な魅力があるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

02. 高原・湿原・原野

【定義】
- 2万5千分の1の地形図に、名称が記載されている高原、原野。またはこれに類するものと、沼沢以外の湿原

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 動植物：特徴的な植物や珍しい動物などが、集積または高頻度で観察できるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境（動植物、鳥類の生態等）や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

03. 湖沼

【定義】
- 2万5千分の1の地形図に湖沼として名称が記載されているもの。またはそれに類するもの。自然地形を活かして造成されたダム湖も含む

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

4. 河川・峡谷

【定義】
- 河川風景（河川＋周辺）および一般的に○○峡、○○峡谷、○○谷と呼ばれるもの。同一河川であっても、上流と中流・下流で、それぞれ観光的に異なる魅力がある場合は別資源

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。水質が良好なものは評価が高い。
- 周辺環境：植生、地形などの周辺環境に特色のあるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

05. 滝

【定義】
- 2万5千分の1の地形図に滝もしくは諸瀑として名称が記載されているもの

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化を深く感じることができるものは、評価が高い。

06. 海岸・岬

【定義】
- 砂浜、砂丘、砂州、岩礁、断崖などによって構成される海岸風景（後背地も含める）。および容易に見ることができる海中景観

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 動植物：特徴的な植物や珍しい動物などが、集積または高頻度で観察できるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

07. 岩石・洞窟

【定義】
- 岩柱、洞窟、洞穴、岩門、鍾乳洞、溶岩流、溶岩原、賽の河原、断崖、岸壁、岩礁、海蝕崖、海蝕洞などの地質および地形上の興味対象

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 地球活動のダイナミズム：造山運動の大きさや時間経過の長さを深く感じることができるものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

08. 動物

【定義】
- 動物、およびその生息地。生息地が定まらないもの、見ることが偶然性に左右されるもの、動物園などで活動範囲を限定して保護・飼育されているものは対象外

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 集積度：面的な広がりがあるもの、密集しているものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然環境（生息環境等）や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

09. 植物

【定義】
- 森林や樹木や並木、植物や植物群落

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 集積度：面的、または線的に密集しているものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然（生育環境等）や地域文化を深く感じることができるものは、評価が高い。

10. 自然現象

【定義】
- 火山現象（噴火・泥火山現象、地獄現象など）、潮流現象（渦流、潮流など）、気象現象（樹氷、霧氷、流氷など）などの自然現象

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 集積度：面的な広がりがあるもの、密集しているものは評価が高い。
- 地域とのつながり：その土地の自然（生息・生育環境等）や地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

11. 史跡

【定義】
- 生活、祭、信仰、政治、教育学芸、社会事業、産業土木などに関する遺跡（城跡は除く）。当時の建造物が残っており、建造物として利用されているものは「建造物」に区分

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大なもの、大きく迫力のあるものは評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国またはその土地の自然や歴史、文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

12. 神社・寺院・教会

【定義】
- 由緒ある社寺等、建築的に優れた社寺等、文化財を所蔵もしくは付帯する社寺等、境内（庭園を含む）が優れている社寺等

- 容姿：その資源または付随する庭園や文化財などの姿・形が美しいもの、雄大なものは評価が高い。雰囲気やたたずまいの優れているものは、評価が高い。
- 日本らしさ、地域とのつながり：わが国やわが国の宗教の成り立ち、地域文化に由来することがらが顕著にみられ、深く感じることができるものは、評価が高い。

13. 城跡・城郭・宮殿

【定義】
- 近世に至る軍事や行政府等の目的で建造された城跡・城郭・宮殿（庭園を含む）

- 容姿：その資源の姿・形が美しいもの、雄大

表7　特A級・A級観光資源一覧（1）　種別01～11

種別	評価	資源	都道府県
01 山岳	特A級	大雪山	北海道
		立山	富山
		富士山	山梨・静岡
		穂高岳	長野・岐阜
		阿蘇山	熊本
	A級	利尻山	北海道
		羊蹄山	北海道
		駒ヶ岳	北海道
		十勝岳連山	北海道
		斜里岳	北海道
		岩木山	青森
		八甲田山	青森
		岩手山	岩手
		鳥海山	山形・秋田
		月山	山形
		飯豊山	福島・他
		男体山	栃木
		谷川岳	群馬・新潟
		妙高山	新潟
		剱岳	富山
		薬師岳	富山
		白山	石川・岐阜
		白峰三山	山梨
		甲斐駒ヶ岳	山梨・長野
		仙丈ヶ岳	山梨・長野
		浅間山	長野・群馬
		白馬三山	長野・富山
		八ヶ岳	長野・山梨
		常念岳	長野
		木曽駒ヶ岳・宝剣岳	長野
		槍ヶ岳	長野・岐阜
		乗鞍岳	長野・岐阜
		御嶽山	長野・岐阜
		赤石岳	長野・静岡
		大山	鳥取
		宮之浦岳	鹿児島
		桜島	鹿児島
02 高原・湿原・原野	特A級	尾瀬ヶ原	群馬・福島
	A級	サロベツ原野	北海道
		釧路湿原	北海道
		霧多布湿原	北海道
		雨竜沼湿原	北海道
		八幡平	岩手
		雄国沼湿原	福島
		戦場ヶ原	栃木
		鬼怒沼湿原	栃木
		苗場山頂周辺の湿原	新潟・長野
		雲ノ平	富山
		大台ヶ原山	三重・奈良
		草千里	熊本
		久住高原・飯田高原	大分
03 湖沼	特A級	十和田湖	青森・秋田
	A級	摩周湖	北海道
		屈斜路湖	北海道
		支笏湖	北海道
		洞爺湖	北海道
		大沼	北海道
		阿寒湖沼群	北海道
		知床五湖	北海道
		裏磐梯湖沼群	福島
		中禅寺湖	栃木
		芦ノ湖	神奈川
		三方五湖	福井
		富士五湖	山梨
		琵琶湖	滋賀
04 河川・峡谷	特A級	奥入瀬渓流	青森
		黒部峡谷	富山
	A級	層雲峡	北海道
		天塩川	北海道
		石狩川	北海道
		北上川	岩手
		鳴子峡	宮城
		最上川	山形
		阿賀野川	新潟
		西沢渓谷	山梨
		昇仙峡	山梨
		大杉谷	三重
		瀞峡	和歌山
		三段峡	広島
		仁淀川	愛媛・高知
		四万十川	高知
		菊池渓谷	熊本
		耶馬渓	大分
		高千穂峡	宮崎
		浦内川	沖縄
05 滝	A級	三条ノ滝	福島・新潟
		袋田の滝	茨城
		華厳滝	栃木
		称名滝	富山
		那智滝	和歌山
06 海岸・岬	特A級	北山崎	岩手
		瀬戸内海の多島景観	広島・他
		慶良間諸島の海岸	沖縄
	A級	知床半島の海岸	北海道
		仏ヶ浦	青森
		浄土ヶ浜	岩手
		松島	宮城
		南島	東京
		英虞湾	三重
		天橋立	京都
		鳥取砂丘	鳥取
		国賀海岸	島根
		足摺岬	高知
		九十九島	長崎
		大瀬崎断崖	長崎
		浅茅湾	長崎
		大金久海岸・百合ケ浜	鹿児島
		はての浜	沖縄
		川平湾	沖縄
		与那覇前浜	沖縄
		東平安名岬	沖縄
		波照間島の海岸	沖縄
		伊平屋島・伊是名島の海岸（野甫米岬・二見ヶ浦）	沖縄
		沖縄本島中部から北部にかけた西側の砂浜群	沖縄
		新城島の海岸	沖縄
07 岩石・洞窟	A級	龍泉洞	岩手
		鬼押出	群馬
		三原山溶岩群	東京
		秋芳洞・秋吉台	山口
		普賢岳溶岩流	長崎
		玉泉洞	沖縄
08 動物	A級	釧路湿原のタンチョウヅル	北海道
		蕪島のウミネコ	青森
		小笠原のクジラ	東京
		御蔵島のイルカ	東京
		佐渡のトキ	新潟
		立山のライチョウ	富山
		地獄谷野猿公苑のサル	長野
		豊岡のコウノトリ	兵庫
		奈良のシカ	奈良
		出水のツル	鹿児島
		永田いなか浜のウミガメ	鹿児島
09 植物	特A級	日光杉並木	栃木
		吉野山のサクラ	奈良
		屋久島の森	鹿児島
	A級	礼文島の高山植物群落	北海道
		弘前城のサクラ	青森
		白神山地のブナ原生林	青森・秋田
		北上市立公園展勝地のサクラ	岩手
		三春滝ザクラ	福島
		千鳥ヶ淵・牛ヶ淵のサクラ	東京
		青木ヶ原の樹海	山梨
		霧ヶ峰のニッコウキスゲ	長野
		高遠のサクラ	長野
		御室のサクラ	京都
		大船山のミヤマキリシマ	大分
		霧島のミヤマキリシマ	鹿児島・宮崎
		仲間川流域の植物群落	沖縄
		やんばるの植物群落	沖縄
10 自然現象	A級	オホーツク海沿岸の流氷	北海道
		八甲田山の樹氷	青森
		蔵王の樹氷	山形・宮城
		雲竜渓谷の氷瀑	栃木
		富山湾の蜃気楼	富山
		竹田城の雲海	兵庫
		鳴門の渦潮	徳島・兵庫
		肱川あらし（肱川の朝霧、雲海）	愛媛
		八重干瀬	沖縄
11 史跡	特A級	百舌鳥・古市古墳群（仁徳天皇陵、応神天皇陵）	大阪
	A級	三内丸山遺跡	青森
		一乗谷朝倉氏遺跡	福井
		平城宮跡	奈良
		吉野ヶ里遺跡	佐賀
		臼杵石仏	大分
		西都原古墳群	宮崎

自然資源　人文資源

表7　特A級・A級観光資源一覧（2）　種別12～18

種別	評価	資源	都道府県
12 神社・寺院・教会	特A級	中尊寺	岩手
		東照宮	栃木
		伊勢神宮（皇大神宮・豊受大神宮）	三重
		延暦寺	滋賀
		清水寺	京都
		鹿苑寺（金閣寺）	京都
		平等院	京都
		東大寺	奈良
		法隆寺	奈良
		高野山	和歌山
		熊野三山（熊野那智大社・熊野速玉大社・熊野本宮大社・青岸渡寺・補陀洛山寺）	和歌山
		出雲大社	島根
		嚴島神社	広島
	A級	毛越寺	岩手
		瑞厳寺	宮城
		立石寺（山寺）	山形
		出羽三山神社	山形
		鹿島神宮	茨城
		輪王寺大猷院霊廟	栃木
		成田山新勝寺	千葉
		明治神宮	東京
		浅草寺	東京
		建長寺	神奈川
		円覚寺	神奈川
		高徳院（鎌倉大仏）	神奈川
		鶴岡八幡宮	神奈川
		弥彦神社	新潟
		那谷寺	石川
		永平寺	福井
		久遠寺	山梨
		善光寺	長野
		諏訪大社	長野
		熱田神宮	愛知
		園城寺	滋賀
		日吉大社	滋賀
		大徳寺	京都
		教王護国寺（東寺）	京都
		真宗本廟（東本願寺）	京都
		本願寺（西本願寺）	京都
		蓮華王院（三十三間堂）	京都
		南禅寺	京都
		東福寺	京都
		鞍馬寺	京都
		慈照寺（銀閣寺）	京都
		平安神宮	京都
		西芳寺（苔寺）	京都
		龍安寺	京都
		円通寺	京都
		酬恩庵（一休寺）	京都
		天龍寺	京都
		醍醐寺	京都
		妙心寺	京都
		八坂神社	京都
		浄瑠璃寺	京都
		四天王寺	大阪
		住吉大社	大阪

種別	評価	資源	都道府県
13 城跡・城郭・宮殿	A級	室生寺	奈良
		春日大社	奈良
		興福寺	奈良
		薬師寺	奈良
		唐招堤寺	奈良
		長谷寺	奈良
		三徳山三佛寺	鳥取
		神魂神社	島根
		吉備津神社	岡山
		金刀比羅宮	香川
		太宰府天満宮	福岡
		祐徳稲荷神社	佐賀
		大浦天主堂	長崎
		長崎の教会群	長崎
		宇佐神宮	大分
		斎場御嶽	沖縄
	特A級	江戸城跡	東京
		桂離宮	京都
		京都御所	京都
		姫路城	兵庫
	A級	五稜郭	北海道
		若松城（鶴ヶ城）	福島
		丸岡城	福井
		松本城	長野
		名古屋城	愛知
		彦根城	滋賀
		二条城	京都
		大阪城（大阪城公園）	大阪
		松江城	島根
		松山城	愛媛
		高知城	高知
		熊本城	熊本
		首里城（首里城公園）	沖縄
		今帰仁城	沖縄
14 集落・街	特A級	原宿	東京
		白川郷合掌造り集落	岐阜
		祇園界隈	京都
	A級	函館市元町末広町の街並み	北海道
		角館武家屋敷	秋田
		大内宿	福島
		川越の街並み	埼玉
		銀座通り	東京
		五箇山合掌造り集落	富山
		金沢のひがし茶屋街	石川
		奥能登の黒瓦の集落群	石川
		高山三町の街並み	岐阜
		木曽川の輪中集落	岐阜
		伊根の舟屋群	京都
		美山町北山村集落	京都
		産寧坂の街並み	京都
		道頓堀	大阪
		神戸北野異人館群	兵庫
		今井町の街並み	奈良
		倉敷川畔の街並み	岡山
		知覧武家屋敷	鹿児島
		竹富島の赤瓦葺き民家群	沖縄

種別	評価	資源	都道府県
15 郷土景観	特A級	築地市場	東京
		小笠原の見送り	東京
	A級	函館山からの函館市街地の夜景	北海道
		美瑛の丘の農村風景	北海道
		恐山の霊場景観と湯小屋群	青森
		板柳のりんご畑の風景	青森
		旧富岡製糸場	群馬
		隅田川橋梁群	東京
		輪島白米千枚田	石川
		甲府盆地の桃畑	山梨
		高山の朝市	岐阜
		長良川の鵜飼	岐阜
		牧之原の茶畑	静岡
		大井川鐵道のSL列車	静岡
		丸山千枚田	三重
		和束町の茶畑	京都
		熊野古道	和歌山・三重
		宍道湖のシジミ漁	島根
		お遍路さんのお接待	徳島・他
		有田焼窯元群	佐賀
		軍艦島	長崎
		牧志公設市場	沖縄
16 庭園・公園	特A級	修学院離宮庭園	京都
	A級	大通公園	北海道
		モエレ沼公園	北海道
		偕楽園	茨城
		新宿御苑	東京
		浜離宮恩賜庭園	東京
		兼六園	石川
		仙洞御所	京都
		後楽園	岡山
		栗林公園	香川
		水前寺成趣園	熊本
		磯庭園（仙巌園）	鹿児島
		識名園	沖縄
17 建造物	A級	東京スカイツリー	東京
		東京タワー	東京
		国会議事堂	東京
		東京駅	東京
		黒部第四ダム	富山
		大阪市中央公会堂	大阪
		太陽の塔	大阪
		明石海峡大橋	兵庫
		閑谷学校跡	岡山
		しまなみ海道諸橋	広島・愛媛
		瀬戸大橋	香川・岡山
		錦帯橋	山口
		旧グラバー住宅	長崎
18 年中行事	特A級	青森のねぶた・ねぷた	青森
		式年遷宮	三重
		祇園祭	京都
		阿波踊	徳島
		博多祇園山笠	福岡
	A級	さっぽろ雪まつり	北海道
		仙台七夕まつり	宮城
		竿燈まつり	秋田
		大曲の花火	秋田

表7　特A級・A級観光資源一覧（3）　種別18～24

種別	評価	資源	都道府県
18 年中行事	A級	花笠まつり	山形
		相馬野馬追	福島
		秩父夜祭	埼玉
		三社祭	東京
		おわら風の盆	富山
		城端曳山祭	富山
		御柱祭	長野
		高山祭	岐阜
		郡上おどり	岐阜
		尾張津島天王祭り（津島祭り）	愛知
		葵祭	京都
		時代祭	京都
		天神祭	大阪
		岸和田地車祭	大阪
		東大寺二月堂修二会（お水取り）	奈良
		会陽（裸祭り）	岡山
		壬生の花田植	広島
		長崎くんち	長崎
		高千穂夜神楽	宮崎
		沖縄のエイサー	沖縄
		那覇大綱挽まつり	沖縄
		八重山の豊年祭	沖縄
19 動植物園・水族館	A級	旭川市旭山動物園	北海道
		上野動物園	東京
		沖縄美ら海水族館	沖縄
20 博物館・美術館	特A級	東京国立博物館	東京
		京都国立博物館	京都
		広島平和記念公園	広島
		沖縄平和祈念公園	沖縄
	A級	鉄道博物館	埼玉
		国立歴史民俗博物館	千葉
		国立西洋美術館	東京
		国立科学博物館	東京
		東京国立近代美術館	東京
		根津美術館	東京
		金沢21世紀美術館	石川
		国立民族学博物館	大阪
		奈良国立博物館	奈良
		足立美術館	島根
		大原美術館	岡山
		大塚国際美術館	徳島
		ベネッセアートサイト	香川
		九州国立博物館	福岡
		平和公園	長崎
21 テーマ公園・テーマ施設	特A級	東京ディズニーリゾート	千葉
	A級	三鷹の森ジブリ美術館	東京
		博物館明治村	愛知
		東映太秦映画村	京都
		ユニバーサル・スタジオ・ジャパン	大阪
22 温泉	特A級	草津温泉の湯畑自然湧出泉源広場と温泉街、共同湯と時間湯	群馬
		別府温泉郷(八湯)の湯けむり景観と鉄輪地獄、伝統的共同浴場群と入浴法(泥湯、砂湯)	大分
	A級	登別温泉の地獄谷と多様な泉質の自然湧出源泉、浴場群	北海道
		酸ケ湯温泉のヒバ造り千人風呂	青森
		蔦温泉の泉源浴舎	青森
		鳴子温泉の潟沼、温泉神社、滝の湯	宮城
		玉川温泉の「大噴」泉源と岩盤浴、強酸性泉湯治法	秋田
		乳頭温泉郷の源泉浴場群	秋田
		後生掛温泉の泥火山、箱蒸し、泥湯、オンドル湯治	秋田
		銀山温泉の旅館街と共同浴場群	山形
		蔵王温泉の酸性泉と源泉浴場群	山形
		那須湯本温泉の「鹿の湯」と高温源泉浴	栃木
		伊香保温泉の石段街と小間口で引湯された浴場群	群馬
		万座温泉の湯畑と源泉浴場群	群馬
		四万温泉の日向見薬師堂、伝統的旅館建築と元禄の湯	群馬
		尻焼温泉の天然「川湯」	群馬
		箱根大涌谷の噴気泉源地帯と天然岩盤湯壺「姥子の湯」	神奈川
		山中温泉の総湯広場と温泉街	石川
		山代温泉の「湯の曲輪(がわ)」・総湯広場	石川
		野沢温泉の麻釜と大湯などの外湯群	長野
		渋温泉の石畳温泉街と外湯巡り	長野
		奥飛騨温泉郷の大露天風呂群	岐阜
		修善寺温泉の川畔旅館街と「独鈷の湯」、修禅寺	静岡
		城崎温泉の街並みと外湯巡り	兵庫
		有馬温泉の歴史的泉源群と温泉街(温泉寺、湯泉神社)、入初式	兵庫
		湯村温泉の荒湯	兵庫
		湯の峰温泉のつぼ湯と湯筒	和歌山
		南紀白浜温泉の「崎の湯」と海沿いの外湯巡り	和歌山
		道後温泉の道後温泉本館	愛媛
		雲仙温泉の雲仙地獄と源泉浴場群	長崎
		由布院温泉の金鱗湖と下ん湯	大分
		指宿温泉郷(指宿、山川伏目海岸)の砂蒸し風呂群	鹿児島
		霧島温泉郷の噴煙地帯と温浴場群	鹿児島
23 食	特A級	江戸前の寿司	東京
		京懐石	京都
	A級	ビール園のビールとジンギスカン	北海道
		札幌ラーメン	北海道
		盛岡市のわんこそば	岩手
		秋田県北部地方のきりたんぽ鍋	秋田
		築地市場の海鮮料理	東京
		横浜中華街の中華料理	神奈川
		戸隠そば（信州そば）	長野
		浜松のうなぎ料理	静岡
		松阪牛のすき焼き	三重
		川床の京料理	京都
		大阪のたこ焼き	大阪
		山陰の松葉ガニ料理	兵庫
		高野山の宿坊の精進料理	和歌山
		広島のカキ料理	広島
		下関のふく料理	山口
		香川の讃岐うどん	香川
		高知の皿鉢料理	高知
		中洲川端の屋台村の食事	福岡
		沖縄そば	沖縄
24 芸能・興行・イベント	特A級	歌舞伎座で上演される歌舞伎	東京
		国技館で開催される大相撲	東京
	A級	国立能楽堂で上演される能・狂言	東京
		末廣亭で上演される演芸	東京
		国立劇場で上演される歌舞伎・文楽	東京
		鈴本演芸場で上演される演芸	東京
		箱根駅伝	神奈川・東京
		南座で上演される歌舞伎	京都
		都をどり（祇園甲部歌舞練場）	京都
		国立文楽劇場で上演される文楽	大阪
		なんばグランド花月（NGK）で上演されるお笑い	大阪
		宝塚大劇場で上演される歌劇	兵庫
		全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園）	兵庫
		旧金毘羅大芝居（金丸座）で上演される歌舞伎	香川

※写真集『美しき日本　旅の風光』による資源名表記には、これを変更・簡略化したものもある。
※自然資源（1～10）は濃いグレーで着色。人文資源（11～24）は薄いグレーで着色。

温泉の評価を考える

4

温泉評論家・日本温泉地域学会会長　石川　理夫

このたび刊行された『美しき日本　旅の風光』では、日本を代表する観光資源の種別に「温泉」が新しく加わった。その結果、特A級とA級に選定された三十三カ所（注1）の温泉地が紹介されている。

一九九九年（平成十一年）刊の『美しき日本』では温泉を取り上げなかったことを鑑みれば、近年の国内外観光客の温泉志向を背景に、観光資源としての温泉（地）を再評価したと言えよう。そこで温泉評価の歴史を踏まえ、「日本が誇るべき素晴らしい温泉」とはどのような資質、要件を備えたものか、温泉の選定評価について述べてみたい。

温泉(地)は自然資源と人文資源を併せ持つ

本稿では時に「温泉（地）」と言い表す。温泉資源を表す「温泉」とそれを基に成り立つ「温泉地」を包括した表現である。これは自然資源と人文資源に大別された観光資源の中で、温泉（地）は両方にまたがることを意味する。観光資源として優れて複合的な特性を持つのが温泉（地）なのである。

温泉（地）の自然資源、人文資源の理解には、以前に日本温泉地域学会が第一次選定百二十五件を本にまとめた「日本温泉地域資産」という概念が役立つと思われる。これは日本温泉地域自然資産と同文化資産、同複合資産の三つで構成される。

温泉地域自然資産とは温泉資源そのもので、今も豊かに自然湧出（ゆうしゅつ）する泉源（湯元）、多様な個性と成分や泉質を有する源泉、源泉が生み出す固有の自然現象の果実（間欠泉、噴湯丘、噴泉塔、石灰華、温泉に生息する特殊な生物等）が含まれる。

温泉地域文化資産には日本の湯治・温泉文化を特色づける入浴・温泉利用法や浴槽・浴舎、温泉神社や温泉寺・薬師堂を含む温泉信仰、伝統芸能・行事、情緒を醸し出す温泉街や泉源広場、伝統的建造物などが含まれる。ちなみに複合資産は選定対象が両方にまたがる例である。

日本温泉地域資産は日本の貴重な温泉資源と温泉文化、温泉地の歴史的文化的蓄積を評価、観光資産活用を含めて活性化に寄与する目的で選定した。自然資源と人文資源を併せ持つ観光資源として温泉（地）を評価する際にも参考になると考える。

世界遺産の例では、トルコの複合遺産「ヒエラポリス-パムッカレ」のパムッカレは湧出源泉の生成物である石灰華段丘で、ヒエラポリスは隣接して築かれた古代温泉都市遺跡である（写真1）。

写真1　トルコのヒエラポリス-パムッカレ：野天風呂の湯底に古代ローマ遺跡（筆者撮影）

前者は温泉地域自然資産または自然資源に、後者は温泉地域文化資産または人文資源に該当する。

写真2 イギリスのバース：源泉をたたえた古代ローマ浴場遺跡（筆者撮影）

イギリスの「バース市街」は、泉源と古代ローマ浴場遺跡（**写真2**）を含む街並みが登録されている。歴史的文化的蓄積を持つ温泉地が世界文化資産となる素晴らしい事例である。

温泉（地）は歴史的にどのように評価されてきたか

それでは温泉（地）を日本ではどのようなものとみなし、評価を与えてきたのだろうか。

文献上最も古い例は、奈良時代の『出雲国風土記』の島根県玉造温泉と湯村温泉に関する記述に見られる。湯浴みすれば「形容端正」、「万病除ゆ」。そのため、前者を「神の湯」と評価。同じく効能ゆえに後者は「薬湯」と評価された。老若男女が大勢集い、どちらも観光地さながらにぎわっていた。しかし何より温泉（地）は、入浴等の利用がもたらす恩恵、療養効果により、「神の湯」と称えられるほど評価を得たのである。

平安時代、熊野に詣でた右大臣・藤原宗忠は、湯垢離場（注2）であった和歌山県湯の峰温泉に入浴した感激を「これは神の験にほかならない。此の湯に浴すれば万病を消除するといわれる」と日記『中右記』に記した。湯の峰温泉も世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれている。

図1 1817年（文化14年）刊の温泉番付表「諸国温泉功能鑑」

医学に救いを求められなかった時代、湯治療養地として温泉地の存在価値は高く、評価は効能本位で一貫していた。相撲番付に倣って江戸後期に流行する温泉番付「諸国温泉功能鑑」（**図1**）もその一つである。

これは全国の温泉地約九十カ所を東西に分けて三役から前頭まで格付けし、温泉名の上に「万病・諸病」「瘡毒」（梅毒）等と記す。効能で知られる名湯を選定評価しており、東の草津温泉、西の有馬温泉は明治時代まで不動の最高位・大関を保った。

一方、伝統的な効能的評価法と並行して、新たに江戸後期には観光資源的評価が台頭する。

一例は、『北越雪譜』で知られる越後の文人・鈴木牧之が平家落人伝承の秘境・秋山郷を十返舎一九の勧めで探訪し、一八二九年（文政十二年）に出した『秋山記行』である。同書は秘湯紀行でもあり、「命の洗濯する心持ち」と、野天風呂や湯を愛でる観点から温泉を評価している。

江戸の大衆消費文化が成熟して、東海道中膝栗毛など滑稽本の旅物や温泉紀行文が増え、旅の許可を得る「湯治」は名目上で、実際は物見遊山の温泉旅行が広まった。一八一〇年（文化七年）に八隅蘆菴が出した『旅行用心集』は日本初の温泉旅行ガイドで、「諸国温泉二百九十二カ所」を収録。冒頭に「唯養生の為に湯治する人は勿論、物参り、遊山ながらに旅立」人にも見易くした、と刊行目的を記す。こうしたトレンドが新しい温泉評価登場の背景にあった。

温泉資源の卓越さが選定評価の基にある

温泉評価の歴史に登場した温泉地のうち湯の峰、草津、有馬の各温泉はこのたびも選定された。これらの温泉地は、評価法が異なる千年、数百年後もなお選定評価される資質、要件を備えていることになる。

温泉（地）は自然資源と人文資源を兼ね備えた複合的な特性を持つが、地球の恵みたる温泉湧出を基に成り立つのが温泉地である。したがって温泉選定評価の大前提、第一の

要件は、自然（温泉）資源の豊かさ、卓越性、その優れた特色にあると考える。

今回、草津温泉と別府温泉郷の二カ所が特A級に選定された。共通するのは、世界を見渡しても傑出した温泉資源を有し、その特色を活かした営みを重ね、人文資源・文化資産たる温泉地の今日の姿、景観や街並みを築いていることである。

草津温泉を特A級と評価するのは、高温自然湧出泉の泉源広場「湯畑」を中心に伝統的な和風旅館街や共同浴場群を持つ街並みを放射状に形成してきたこと（**図2**）、豊富に湧出する強酸性泉を利用した時間湯という伝統的入浴法・湯治文化を保つことである。なお、酸性泉は火山性温泉に恵まれた日本の代表的泉質で、海外では数少ない。

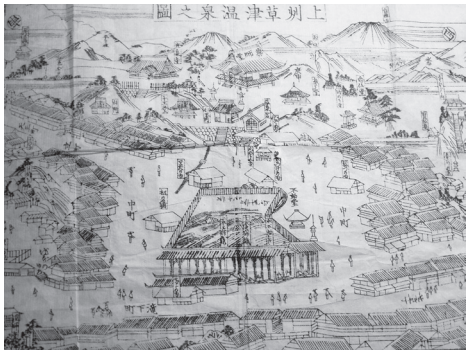


図2 江戸時代の「上州草津温泉之図」（草津町温泉資料館）。湯畑を核に温泉街を形成している様子がうかがえる

別府八湯より成る別府温泉郷は、温泉の生みの母たる伽藍岳・鶴見岳と別府湾の間の傾斜地に広がる自然景観が素晴らしい。そこに二〇〇一年（平成十三年）の「21世紀に残したい日本の風景」（NHK公募）で二位に選ばれた湯煙景観が現出し、別府のシンボルとなっている。

『豊後国風土記』にも記されたもう一つのシンボルが鉄輪地獄（**写真3**）で、噴気や熱泉ほとばしる地獄と呼ばれる泉源地帯が多く見られるのも日本の温泉地の特色である（注3）。

写真3 別府・鉄輪地獄の海地獄（筆者撮影）

選定三十三カ所のうち、別府のほか、登別、酸ヶ湯、乳頭温泉郷、玉川、後生掛、鳴子、那須湯本、草津、万座、箱根大涌谷、雲仙、霧島温泉郷の計十三カ所が噴気・地獄地帯を持つ。これも卓越した自然（温泉）資源が選定評価の基になっている証左だろう。

また、塩化物泉、硫黄泉、硫酸塩泉、酸性泉など九種類に大分類される泉質のうち、別府温泉郷は放射能泉を除く八種類がそろうのも、霧島温泉郷と並び、温泉資源の多様性、豊かさを表している。

温泉選定評価の対象となる要素

次に、温泉選定評価の対象となる資質、構成要素から考えてみたい。

草津は「草津温泉の湯畑自然湧出泉源広場と温泉街、共同湯と時間湯」が構成要素である。別府は「別府温泉郷（八湯）の湯煙景観と鉄輪地獄、伝統的共同浴場群と入浴法（泥湯、砂湯）」が構成要素である。草津の温泉街、共同湯、時間湯、別府の伝統的共同浴場群と入浴法（泥湯、砂湯）は人文資源の構成要素であり、湯煙景観は自然・人文の複合的な構成要素と言える。

選定三十三カ所中、純粋に自然資源のみで構成されるのは「噴煙・泉源地帯」の箱根大涌谷一件である。兵庫県湯村温泉も、自然資源の高温自然湧出泉源「荒湯」を構成要素とするが、『夢千代日記』の撮影舞台ともなり、荒湯を中心に広がる情緒漂う温泉街も観光資源として大きな資質、構成要素たり得ている。

一方、人文資源の構成要素のみで評価される温泉地は、木造三層・四層「旅館街」の山形県銀山温泉、日本初の計画的「石段街」の群馬県伊香保温泉、「総湯広場」を核に温泉街を形成した石川県山中、山代温泉、伝統的共同浴場建築「道後温泉本館」の愛媛県道後温泉を始め数多い。この場合も、例えば青森県酸ヶ湯温泉の「伝統的なヒバ造り千人風呂」が、風呂底から湧き上る酸性硫黄泉入浴のため造られたように、自然資源が

基にあることは言うまでもない。

こうした構成要素は、

- 自然資源としての**温泉の湧出現象**（以下草津と別府を例にとれば、自然湧出泉源、鉄輪地獄）
- **源泉そのもの**（強酸性泉、八種類そろう泉質）
- 周囲の**自然環境**
- 人文資源としての**伝統的な浴槽・浴場建築**（共同湯、共同浴場群）
- **入浴・温泉文化**（時間湯、泥湯・砂湯）
- **街並み**（広場、温泉街）

など六項目にまとめられる。

六項目全てに優れた資質の構成要素を備えた温泉地は、特A級二温泉地のように評価がきわめて高い。一軒宿、秘湯型のA級温泉地の場合、街並みといった構成要素はなくても、他の項目の多くに該当する資質、構成要素を備えている例が多い。

また、項目的には一、二該当するのみでも、海外に類を見ない特色、魅力、日本の温泉文化を体現していれば、高い選定評価を得るだろう。

日本の町で歴史的に唯一広場を形成し得たのは温泉町であることを考えれば、草津の泉源広場・湯畑同様、山中、山代温泉の「総湯広場」は意義深い。しかも総湯は中世の惣村（そうそん）以来温泉地域共同体が育んだ「惣湯」のことで、温泉地が共同で資源や浴場を管理する伝統を体現している。

A級温泉地では、野沢、渋温泉の核となる共同湯「大湯」も以前は惣湯と呼ばれていた。こうした地域共同体による資源管理（コモンズのガバナンス）は今日、世界的に見直されている（注4）。

また、A級選定の鳴子、那須湯本、野沢、渋、有馬、城崎温泉など歴史ある温泉地は、泉源と中核となる共同浴場を温泉神社や温泉寺・薬師堂が守護する形で形成され、温泉の恩恵にすがった人々の慈しみや畏敬（いけい）の念を今に伝えている。湯だけでなく、長く効能評価を支えた人々の思いが、訪れる観光客にも深い安らぎを与えてくれるはずである。

世界に評価される〝美しき日本〟の温泉

環太平洋火山帯に位置する日本は、源泉総数や総湧出量、温泉地数からみて世界一の温泉大国である。これは温泉が日本の観光資源上きわめて大きなファクターとなり得ることを示唆している。

温泉が日本人にとって主要な観光目的であることは言うまでもない。それに近年増大する東南アジアからを含む外国人観光客は、主な訪日目的に「温泉」を挙げている。実際、箱根を訪れる外国人観光客は必ず観光スポットの大涌谷に立ち寄り、噴気上る景観に日本の温泉資源の豊かさを実感している。

もっとも、日本は温泉資源の豊かさにあぐらをかいてはならないだろう。韓国や台湾に続き中国もまた近年、日本を参考にした大深度掘削による温泉リゾート開発に拍車をかけている。温泉地の数が三千カ所を超える（注5）という中国は潜在的な温泉大国であり、やがては国際的に温泉地の施設や設備面でのレベルが平準化・均一化して日本の優位性を失いかねないのである。

そのためには温泉選定評価に示されたように、日本の温泉資源と温泉地が育んできた歴史や文化、持ち味を活かし、まさしく〝ニッポンのオンセン〟らしさを発揮し、アピールしていく必要がある。このように日本の温泉（地）はグローバルな観光資源としてもっと評価されてよい。今回の温泉選定評価がその一助となることを期待したい。

（いしかわ　みちお）

石川理夫（いしかわ みちお）
1947年仙台市生まれ。東京大学法学部卒業。百科事典編集者を経て、企画編集会社有限会社ミュー・ワークス代表取締役。温泉評論家。環境省中央環境審議会自然環境部会温泉小委員会専門委員。2012年より日本温泉地域学会会長。

（注1）この他にも種別「動物」で選ばれた「地獄谷野猿公苑のサル」は長野県地獄谷温泉に当たる。
（注2）熊野本宮詣での人々が参詣前に湯の峰温泉で心身を洗い清めた。
（注3）火山性温泉が多いイタリアやニュージーランド等にも地獄景観がある。
（注4）米国の女性政治学者エリノア・オストロムがこの研究で2009年のノーベル経済学賞を受賞した。
（注5）于航（城西国際大学）「中国の温泉文化について」『温泉地域研究』第6号より。

地域の食の評価

5

西武文理大学サービス経営学部教授
安田　亘宏

観光旅行中の旅行者にとっての地域の食は、どの時代であっても、必要不可欠なものであり、大きな楽しみであった。

しかし、観光の成熟期以前の旅行中の地域の食は、観光資源と位置づけられる美しい自然景観や歴史ある神社仏閣、伝統的な祭事などの「本源的需要」に対し、それらを見学、体験するために必要な交通や宿泊などとともに「派生的需要」であり、「支援的商品」「補完資源」であるとの考えが一般的であった。観光資源としての固有性、独自性や代替性、さらに脆弱性などの観点からの議論であった。

地域の食は誘客の源泉となる観光資源

人々の生活が豊かになりレジャーとしての観光旅行の頻度が高まり定着する中、どうせ食べるのなら、その土地らしい、おいしいもの、珍しいものを食べたい、現地に出向いてその食が生まれ育まれてきた環境に自分の身を置いて食を楽しんでみたいと多くの旅行者が思うようになり、観光旅行中の食は旅行を構成する重要な要素となった。

旅行者のニーズの多様化、個性化が進むなか、すなわち、社会や時代の価値観の変化の中で、地域の食は「本源的需要」となり、「中核的商品」「中核資源」となっていった。今日では、地域の食が、誘客の源泉であり、感動の源泉となる観光資源となっていることは疑う余地はない。

特徴ある地域の食や食文化、食空間は、その土地の自然や歴史、文化、人々の暮らしの中から生まれ、育まれ、今日に続く、そこに暮らす人々にとっての自慢であり、誇りである。

地域の「食」が、公益財団法人日本交通公社の取り組む「観光資源評価」の対象に加えられたことは、時代の変化を感じるとともに大きな喜びである。このたび発刊された写真集『美しき日本　旅の風光』で取り上げられた「食」のそれぞれについて、筆者の見解を交えながら概観してみたい。

世界に誇る東西の横綱 ―京懐石と江戸前の寿司

地域の食の価値は、旅する人それぞれの味覚や興味、知識、経験などに委ねられており、客観的に評価することは困難である。しかし、だれもがおいしいと思うものはおいしく、多くの人がわざわざ食べに行きたいと感じるものはやはり魅力的である。日本人として一生の間にはぜひ一度は地元で味わいたい、外国の人々にもぜひ食べてもらいたい、そんな地域の食が確かに存在する。

その筆頭は、京都の京懐石であろう。懐石料理とは、本来、茶会の際に亭主が来客をもてなす料理のことであり、茶道の形式にのっとった食事の形式であった。したがって、献立、食作法、食器などにも一定の決まりがあったが、茶会ではなく料理

店で供されるようになってから、品数も増し趣向も凝らされるようになった。野菜や魚介などの食材にこだわり、その持ち味を生かす薄い味付けで、見た目にも美しい料理であり、まさに日本料理の原点である。多くの旅行者を惹き付ける料理であるが、庶民がなかなかか口にすることができない贅沢な料理でもある。

京懐石が西の横綱なら、東の横綱は江戸前の寿司であろう（写真1）。

江戸前の寿司【えどまえのすし】

江戸の食文化が生み出した代表的な料理で、少量握った酢飯の上に生身の魚介を主とする具材をのせた、にぎり寿司が中心である。「江戸前の海」すなわち東京湾で取れた魚介を食べる屋台料理として、江戸時代後期に生まれた。当時はコハダやシャコ、アナゴなどを酢や醤油に漬ける、煮るなど下ごしらえをしたものが中心だったが、現在は東京に集まる「旬」の素材をふんだんに用いた寿司が中心。左の写真は東京湾から揚がった旬の地魚をネタにしたにぎり寿司である。[食] 東京

Edomae Sushi

Edo style sushi is a product of the culinary culture of Edo (Tokyo), fast-paced, booming capital of the Tokugawa Shogunate. Edomae sushi usually refers to *nigiri-zushi* that consists of a small mound of cooked vinegared rice and a slice of fresh fish topping. It started in the late Edo period as a fast food sold at street stalls and served the fish and shellfish caught in Tokyo Bay—the sea in front of Edo. Early main ingredients included gizzard shad, squillas and sea eels and many fresh ingredients were cured with salt and vinegar or immersed in soy sauce and sometimes even simmered in broth to extend shelf life. Today, however, Edomae sushi features a wide variety of "in season" fresh ingredients delivered to the gastronomic capital of Japan. The photo on the left shows a *nigiri-zushi* set with a variety of seasonal fish freshly caught in Tokyo Bay. [Food] Tokyo

86

写真1　江戸前の寿司

こちらは、今日では決して安価な庶民食とは言えないが、ルーツは庶民である江戸っ子が好んで食べた江戸の郷土料理である。江戸前の寿司とは、本来「江戸の前」つまり江戸湾（東京湾）で捕れた海産物を使った寿司のことであるが、一般的には酢飯を一口大に握り、その上に四季折々の生身の魚介などを載せた握り寿司のことを指す。

具材はタネ（種）という。逆さにした符牒で「ネタ」とも呼ばれることが多い。主にコハダやサバなどを締めたもの、煮アナゴや蒸しエビ、卵焼きなどであったが、今日では東京に全国から集まる旬の素材を使うのが一般的である。江戸の郷土料理ではあるが、現在は全国各地に広がり、地域の旬なタネを使った寿司を楽しむことができる。その流れの中で地域性が希薄になったことは否めないが、日本の江戸東京が育て上げ完成させた、世界に誇れる料理であることは間違いない。

また、世界共通語となった「sushi」はこの江戸前の寿司である。海外ではヘルシー食として定着しているが、驚きのアレンジも見られる。

一度は地元で食べたい地域食材を生かしたおもてなし料理

日本各地にはそれぞれの特産物があり、その食材を生かしておいしく味わえる、客人へのおもてなしにもふさわしい料理として完成させた地域がある。今日では、全ての料理は東京にいながらにして食すことができるが、輸送手段、保存技術、冷凍技術などが発達していなかった昔は現地に行かなければ食べられなかった。もちろん、今日でも地元で食べるのが一番おいしい。

日本人の嗜好する美味、希少、季節限定の農水産物といえば、カニが筆頭に挙げられる。特に、冬の松葉ガニ料理は格別である。北近畿、山陰で水揚げされるズワイガニは松葉ガニと呼ばれ、日本海で育ったカニのぎっしりと詰まった身と上品な旨味はこたえられない。カニ刺し、焼きガニ、茹でガニ、カニすき、カニ雑炊と旅行者をうならせる。特に知名度が高いのは、兵庫県の城崎温泉、香住である。

下関のふく料理も日本を代表する地域のおもてなし料理である（写真2）。

下関では、フグのことを濁らずに「ふく」と呼ぶ、「福」につながるからだといわれる。下関は日本で水揚げされる天然のトラフグやクサフグなど八割近くが集まる大集積地である。この地に多くのフグ料理を専門

ing, Kintai-kyo Bridge stands as an unimpeachable masterpiece. [Buildings/Structures] Yamaguchi

下関のふく料理 [しものせきのふくりょうり]

下関では「福」に通じるから等の理由で、ふぐのことを濁らずに「ふく」とよぶ。明治初頭に中毒事故の増加でふく料理が禁止された際、伊藤博文が下関の料亭でふく料理を食べてその味に感嘆し、山口県下でふく料理を解禁させたとの逸話がある。[食] 山口

Globefish in Shimonoseki City

Because "fuku" means "good fortune" in Japanese, the usual word for globefish "fugu" is pronounced "fuku" in the city of Shimonoseki. Consumption of globefish was banned at the start of the Meiji period due to an increase in cases of poisoning from the fish, but the story goes that Ito Hirobumi ate the delicacy at a fine dining establishment in Shimonoseki, and was so taken by the taste he lifted the ban on globefish cuisine in Yamaguchi Prefecture. [Food] Yamaguchi

224

写真2　下関のふく料理

に出す料亭、割烹旅館、料理旅館が集積された。フグ刺し、フグ唐揚げ、焼きフグ、フグちり、フグ雑炊、どれも逸品であり、コースで食べることが多い。

和牛の代表格である松阪牛のすき焼きも、どこでも食せるとはいうものの、一度は地元で食べてみたい地域の食である。松阪牛の特徴は、きめの細かいサシと箸で切れるやわらかな肉質、脂肪分に甘みのある風味が特徴だ。とろけるような味、滑らかな舌触りなどとよく表現される和牛を代表する歴史ある牛肉である。松阪市内には専門店が多数あり、しゃぶしゃぶやステーキ、網焼きなどもあるがすき焼きをまず楽しみたい。

地域の特徴的な食材を生かすのとは逆に、限定された食材、すなわち、地元で採れた野菜や豆類、穀類のみを工夫して調理し、振る舞い料理、おもてなし料理として完成させたのが今日の精進料理である。もともとは僧の厳しい戒律の中で食していた料理である。和歌山県にある日本仏教の聖地である高野山には多くの宿坊があり、山里ならではの旬と生の食材にこだわり、丁寧に調理した品格のある精進料理で訪れた旅行者をもてなしてくれる。

その他にも、カキ生産量は全国一位で全国総生産量の半分以上を占めている広島の大粒で濃厚かつ繊細な甘みが特徴のカキを生かしたカキ料理、本格的なウナギ養殖の発祥の地と言われる浜名湖に近い、いつもウナギ料理専門店から蒲焼きの食欲をそそる香りが漂っているまち浜松のウナギ料理もまた生産地が生み出し育ち続けてきた旅行者を惹き付けるブランド料理である。

地元に今も息づく郷土料理

郷土料理とは、地域独特の自然風土、食材、食習慣、歴史文化等を背景として、地域の人々の暮らしの中で生まれたものであり、地域の伝統として受け継がれてきた料理のことである。

日本の郷土料理と聞いて、すぐに思い浮かべるのは秋田県のきりたんぽ鍋であろう。きりたんぽとは、つぶしたご飯を竹輪のように杉の棒に巻き付けて焼き、棒から外して食べやすく切ったものである。野菜やキノコと比内地鶏を煮込み、そのきりたんぽを入れた鍋がきりたんぽ鍋である。今も県民の定番の家庭料理ともなっている。田舎家、古民家、囲炉裏端、雪景色など料理から連想される、食する情景のイメージが旅心をくすぐる。

前項の地域食材を生かしたおもてなし料理に分類してもよいが、土佐の郷土料理とした方がピンとくるのが、高知県の皿鉢料理である。いくつもの大皿に刺身、カツオのたたき、寿司と組み物といわれる揚物、煮物、酢の物などを盛り合わせた料理で、もともとは本膳の後の酒宴用料理であったが、今日ではメインの料理として、酒とともに供されている。やはり、高知で豪快に食したい料理である。

わざわざ訪ねて食べ歩きたい庶民の味

地域の暮らしの中から生まれ、地

域住民が日頃より好んで食し、愛し、誇りに思っている、おいしくて安価な庶民的な郷土食を目当てに、多くの旅行者がわざわざ訪ねるようになってきている。地域内に一定の店舗集積が見られるのが特徴で、食べ歩き、店舗巡りがキーワードともなっている。

筆頭は、香川県の讃岐うどんであろう。郷土食として全国的に評価が上がり、多くの旅行者を呼び、幾度もブームとなった。讃岐出身の弘法大師が中国から持ち帰ったのが始まりと言われ、江戸時代中期にはうどんづくりが行われていたとされ、その歴史は長い。讃岐うどんはコシの強さが重視され、セルフサービスの店が多いのも特徴である。県内に千軒が立地していると言われ、うどん店巡りはとても楽しい。

そばも全国に有名な地域がある。そば粉の産地である長野県の戸隠神社周辺で食すことのできる戸隠そば、食べ方がユニークな岩手県のわんこそば、小麦粉から作られる麺を使用する独特の沖縄そばもわざわざ食べに行く価値がある。

日本の国民食ともなったラーメンはまさに現代を代表する庶民食である。地域には独自の味付けや調理法、食べ方などがある、いわゆるご当地ラーメンがある。その元祖ともいえるのが札幌ラーメンである。ルーツは大正期まで遡り、一九七〇年代に観光名所となる「ラーメン横丁」が誕生する。その頃から、全国的な札幌ラーメンブームが起こり、観光に寄与する。現在、市内のラーメン店は千軒以上あると言われている。

大阪のたこ焼きは、大阪発祥と言われる粉物料理の一種で大阪府民にこよなく愛されている。「食い倒れの街」大阪には同じ粉物のお好み焼きや串揚げなど庶民の味が生き続けていて、旅行者も十分に楽しむことができる。

旅しなければ味わえない食の空間

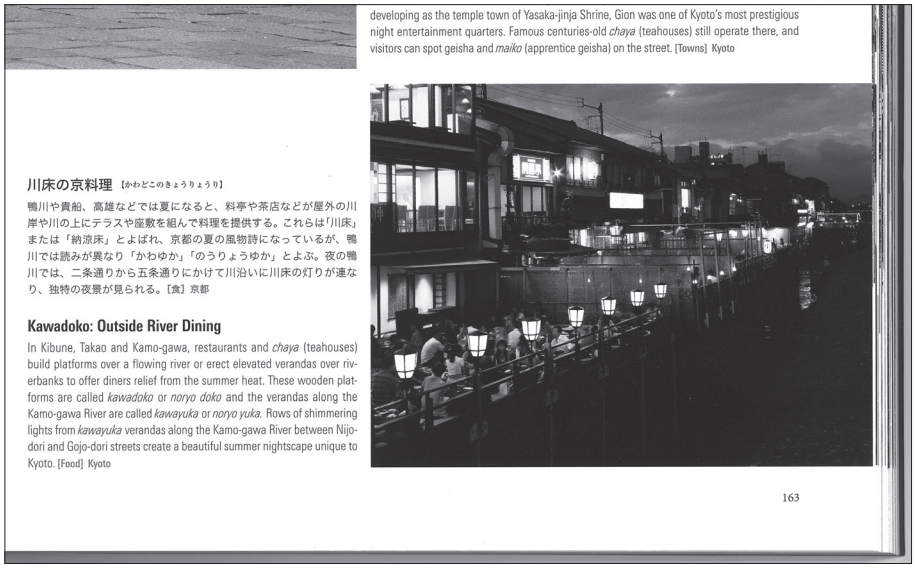
近年、地域の特徴ある食空間が旅行者を集めている。食材や料理ももちろん大きな要素ではあるが、それ以上に特異なその空間で食することを楽しむ食の旅である。

京都の夏の風物詩、川床の京料理は最も日本的で優雅な食空間であろう（**写真3**）。

料理屋や茶屋が川の上や、屋外で川のよく見える位置に座敷を作り、そこで京料理が供される。夏期のみの贅沢な楽しみである。川床は、鴨川では「ゆか」、貴船、高雄では「かわどこ」と言う。また、納涼床とも呼ばれる。

東京の台所と言われる、世界最大規模の魚市場、築地市場の海鮮料理も、国内外の旅行者が競って食べに来ている。もちろん、日本全国から集まる魚介類は新鮮で美味であるのは間違いないが、場内や場外の活気のある小規模な店舗で食することに価値があるようだ。

札幌のビール園も、旅をしないと味わえない特別な食空間と思える。形式はただのビアホールであるともいえるが、一九六〇年代、ひとつのビール園が開業し、「生ビール飲み放題・ジンギスカン食べ放題」をう



developing as the temple town of Yasaka-jinja Shrine, Gion was one of Kyoto's most prestigious night entertainment quarters. Famous centuries-old *chaya* (teahouses) still operate there, and visitors can spot geisha and *maiko* (apprentice geisha) on the street. [Towns] Kyoto

川床の京料理 [かわどこのきょうりょうり]

鴨川や貴船、高雄などでは夏になると、料亭や茶店などが屋外の川岸や川の上にテラスや座敷を組んで料理を提供する。これらは「川床」または「納涼床」とよばれ、京都の夏の風物詩になっているが、鴨川では読みが異なり「かわゆか」「のうりょうゆか」とよぶ。夜の鴨川では、二条通りから五条通りにかけて川沿いに川床の灯りが連なり、独特の夜景が見られる。[食] 京都

Kawadoko: Outside River Dining

In Kibune, Takao and Kamo-gawa, restaurants and *chaya* (teahouses) build platforms over a flowing river or erect elevated verandas over riverbanks to offer diners relief from the summer heat. These wooden platforms are called *kawadoko* or *noryo doko* and the verandas along the Kamo-gawa River are called *kawayuka* or *noryo yuka*. Rows of shimmering lights from *kawayuka* verandas along the Kamo-gawa River between Nijo-dori and Gojo-dori streets create a beautiful summer nightscape unique to Kyoto. [Food] Kyoto

163

写真3　川床の京料理

たったのは衝撃的であった。工場直送の生ビールと、北海道名物のジンギスカンを札幌で味わうのは、その空気感である。

大きな特異性のある食空間といえば横浜中華街がある。街には上海路、中山路、福建路など中国の地名を冠した路地が交差しており、エリア内には五百店以上の料理店が並んでいる。特定の料理店や料理を求める人もいるが旅行者にとっては、街全体の雰囲気を魅力に感じ、それが味付けとなっている。

日本には、人との触れ合いが楽しめる屋台村がまだ残っていて屋台料理が楽しめる。最も有名で規模が大きいのは、福岡の博多中洲川端や長浜地区であろう。屋台では博多ラーメン、餃子、おでんだけでなく洋食や天ぷらなども味わえる。不思議な食の空間を楽しむことができる。

地域の食を評価することの意義

地域の食が他の地域とちょっと違うというだけで、全てが食の観光資源になるかといえばそうではない。本稿で紹介してきた、多くの旅行者の支持を受けている地域の食には共通点がある。客観的に数値化することが困難な項目ばかりではあるが、これらが、筆者の考える観光資源となる地域の食に対する評価軸である。

第一に、美味で安全な食であること。味覚には個人差があり、全員がおいしいと思う食は存在しないかもしれないが、大多数の人がおいしいと感じることが必要であろう。食の安全は絶対的なものであり、大多数の人が安心と感じるものである。

第二に、地域固有な食、その地域でしか食べることのできないその地域らしい食であること。そこでしか食べられないというのは、流通の発達した日本においては、もはやあり得ないかもしれないが、明確な差別性が存在していなくてはならないだろう。

第三に、地域住民が共感する食であること。つまり住民がその食を好んで食べ、おいしいと感じ、誇りとしていることである。

第四に、物語性のある食、料理や食材、調理方法などに物語が隠れていること。歴史だけでなく、伝説やストーリーなどが、その地域でこその味となる。

最後に、持続性のある食、保護できることである。一過性で終わってしまうブームのような食は、この対象とはならない。

とはいえ、食は、誰が何と言おうが自分自身がおいしいと思ったものが、おいしい魅力的な食である。そんな食を評価することはとても難しく、意味のないことかもしれない。

しかし、南北に長く、四季がはっきりとある日本の地域には、そこに住む人々の暮らしの中から生まれ、愛され、継承されてきたおいしい食がある。それを多くの人に知ってもらい、その地を訪ねて味わってもらいたい。そして、その食を地域の誇りとして、日本の宝として次の世代にも残していきたい。そのきっかけになることが地域の食を評価する大きな意義であると考えている。

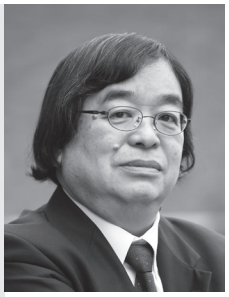
もっともっと多くの人に、長く本源的な価値となる地域の食にかかわっていってほしい。食を味わうことを通して、地域の文化、日本人のアイデンティティを、観光という行為によって多くの人に知られるようになるとうれしい。

日本人だけでなく、世界中から日本の食を求めて多くの人々が訪れ、日本の地域まで足を延ばし、住民自慢のさまざまな地域の食を堪能してくれることを望みたい。

「美味しき日本」をアピールする地域の食という観光資源はたくさんある。

（やすだ　のぶひろ）

掲載写真　出典：JTBパブリッシング『美しき日本　旅の風光』より



安田亘宏（やすだ　のぶひろ）
西武文理大学サービス経営学部教授。法政大学大学院政策創造研究科博士後期課程修了、博士（政策学）。観光士。一九七七年JTBに入社、元JTBグループ旅の販促研究所所長。二〇一〇年より現職。日本エコツーリズム協会理事、コンテンツツーリズム学会副会長、日本地域資源学会常務理事など。『フードツーリズム論』古今書院、『食旅と観光まちづくり』学芸出版社、『澤の屋旅館』はなぜ外国人に人気があるのか』彩流社、など著書多数。

座談会

旅の風光を語る

6

株式会社ＪＴＢパブリッシング　執行役員　**楓　千里**

立命館アジア太平洋大学　非常勤講師
元・公益財団法人日本交通公社　常務理事　**林　清**

株式会社ＪＴＢ総合研究所　代表取締役社長
前・株式会社ジェイティービー　代表取締役専務　**日比野　健**

公益財団法人日本交通公社　会長　**志賀　典人**

公益財団法人日本交通公社　理事・観光文化研究部長　**寺崎　竜雄**（進行役）

写真集『美しき日本　旅の風光』発刊の意義、日本の国内外の多くの方々にどのように写真集をご覧いただきたいか、何を感じ読み取っていただきたいか、あるいは写真集に表現した日本の美しさについて、岩手県宮古市浄土ヶ浜の美しい景色を背景に観光資源評価委員会委員に語っていただきました。

寺崎　いま散策いただいた浄土ヶ浜は、『美しき日本　旅の風光』ではA級にランクされた観光資源です。訪れた印象はいかがでしたか。

楓　盛岡から延々と山道を経て、私たちはこの地にたどり着きました。昔の人たちもようやく海岸に出てこの風景を見たわけで、そのときのインパクトが今もなお古びていないと思います。この自然の造形力を目の当たりにしたときに、人間ではなし得ないものの大きさを感じましたね。

林　全国的に有名な景観ですが、これだけ美しくまとまった海のある風景は三陸海岸の中でもほかにありません。ただ、ここは海水浴場でもあるんですね。景観を守るという観点から、見るところと遊ぶところは別にした方がいい。こういう希少な場所は、なるべく景観や雰囲気を大事にすることに徹してほしいと思いました。

日比野　この場所に「浄土」という名を付けたのは人間ですよね。先ほど案内していただいたときに由来を聞きましたが、そのネーミングの力とイマジネーションが素晴らしいと感じました。風景が美しいだけでなく、人の営みや現代性も生きているいい場所だと思います。

志賀　ここの素晴らしさは、やはり光ですよね。岩の白さが印象的ですが、単に白いだけではなく、海と光の関係によって見え方が変わり、刻々と風景が変化することが魅力だと思います。

風景を見つめ直す

寺崎　浄土ヶ浜を含め、日本の数多くの観光資源の評価に関わっていただきました。その成果の一つが、『美しき日本　旅の風光』です。この本のどのようなところに注目いただきたいか、お聞かせください。

楓　冊子の制作者サイドとして写真のクオリティにはかなりこだわりました。例えばお祭りは躍動感があり、音が聞こえてくるような写真を選んでいます。また、特Ａクラスの観光資源については一枚の写真だけではなく、広角の写真とアップの写真を組み合わせて、資源の素晴らしさを表現するようにしました。

窓越しに浄土ヶ浜を望む座談会会場

修学院離宮庭園は庭園だけでなく、造営時から残る田畑の写真も入れたり、「小笠原の見送り」もワンシーンだけではなく、港を異なる視点から撮った写真を入れるなど、資源が立体的に見えるような工夫をしています。

寺崎　どういう方にこの本を見ていただきたいですか。

楓　やはりまず外国の方ですね。また国内では、中学から大学までの学生の方に「日本ってこんな良さがあるんだよ」ということを、英語の勉強も兼ねて知ってもらえたらいいなと思います。彼らはインターネットを通じ、断片的にいろいろな情報を得ていると思いますが、日本には北から南までこんなに多彩な自然や文化があることを、トータルで受けとめてもらえるとうれしいですね。

寺崎　この本の発行を発案された立場からはいかがでしょうか。

志賀　一九七二年（昭和四十七年）に作られた観光資源台帳（特集2・特集3参照）をどのように改訂していくか、また、一定の客観性を持った形で評価した資源を社会にどうフィードバックしていくかという議論からこの本が生まれました。

口コミなどの利用者目線や一時的な感覚を重視して評価するのも一つの方法だと思いますが、この本で掲載した特A級・A級資源は、知識や学識を蓄積された研究者、観光の実務を積み重ねた方々が、観光資源の価値や見方を体系的に議論し、評価した結果です。これだけ多くの専門家の方たちがいろんな議論をしながら突き詰めてリストアップされたものはなかなかないと思います。

そういう意味では、外国の方はもちろん、日本のこれからの観光を考える方や日本を知りたいという若い人たちに対しても、いいメッセージになるのではないかと思います。

寺崎　観光分野で実務や研究を積み上げたいわゆる「目利き」が議論して、日本代表を集めたということですね。

志賀　もちろん人文科学的な評価ですから、個人的な感性や何らかの思いが入ることは事実だと思いますが、学術的経験を積み上げてきた専門家の皆さんが評価しているという

意味で、一定の客観性を持った評価だと思います。

寺崎　林さんは『美しき日本』（一九九九年版）に引き続き、今回も評価から制作まで関わっていただきました。この本はどのような点が特徴だと思いますか。

林　自然資源は、目に入る景観そのものを評価するという点において結構分かりやすく、客観的な評価もしやすいんですね。しかし、人文資源の評価というのは、視覚だけではなく、その背景にある歴史的なことや、人が織りなした物語までが価値となるのでなかなか難しいのです。前回の写真集、『美しき日本』にはなかった新しいカテゴリーとして、「温泉」や「食」などを加えました。これらについては随分と検討し、あえて、難しいことに足を踏み込んでみました。多くの観光資源を実際に見てきた専門家の議論の成果を見てほしいですね。深田久弥の『日本百名山』は、選定に基準を明示しています。なぜそういう評価に至ったか、どういうところを重点的に見て評価したか、理由や根拠をきちんと示すことが重要だと思います。この冊子には、一つ一つそれらを記述していませんが、選定の過程ではそのようなことを丁寧に話し合いました。

日比野　こうして一冊の本にできあがったものを見ると、日本の自然に育まれた日本人の考え方や生活、気質みたいなものが浮かび上がってくるように感じました。食文化やお祭りもそうですし、宗教や社会習慣など、人の営みに自然資源が重なっていることが、うまく表現できたのではないかと思います。

　この本を作る動機の一つに、外国人に日本の良さを知ってもらうことがありましたが、結果的には我々自身が日本はこういうものだと感覚的に理解できるものになったと思います。外国人だけでなく日本人にとっても、もう一度風景を見つめ直すいいきっかけになると思います。

「静」と「動」

寺崎　今お話に出たようなことは、『美しき日本　旅の風光』の例えばどの観光資源に表現されているのでしょうか。具体的にお聞かせください。

楓　私は瀬戸内海の多島景観ですね。先日亡くなられた作家の渡辺淳一さんが瀬戸内海を「微温的な風景」とおっしゃっています。「優しい」「穏やか」など瀬戸内海を表す表現はいろいろありますが、この言葉が非常にぴったりくる写真だと思います。

　瀬戸内地域では、気持ちのゆったりした方にお会いする機会が多くあります。こういう風景を見ながら過ごすと、心の持ち方や人生観も自然と風景に沿うようになるのではないか、そういうことを一番表している写真だと思いました。

楓千里委員

志賀　私は日本的な渓流、渓谷という意味で奥入瀬渓流ですね。日本庭園にも通じる美しさがあり、箱庭的な日本の自然を表していると思います。渓流に沿って、ゆっくり歩くことで変わっていく川の表情を楽しめますし、本に掲載されている紅葉

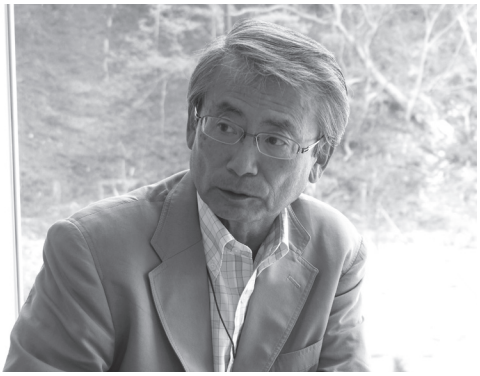
奥入瀬渓流

の写真もいいですが、四季によっていろんな表情を見せます。小さいけれど、あらゆるものが表現されているのが奥入瀬渓流で、極めて日本的な景観だと思います。

寺崎　今日の浄土ヶ浜も、額縁の中におさまるような空間に、一言では表現できない多面的な魅力がありますね。

志賀　海外にはもっとダイナミックな風景がいくつもあり、スケールではとてもかないませんが、奥入瀬渓流や浄土ヶ浜には、それらとは全く違う日本の風景の良さがあると思います。

林　私が好きなのは山の写真です。大雪山と苗場山はとても良い写真を選んだと思います。大雪山は旭岳だけでなく裏側の写真も掲載していますが、なかなかこういう写真は見ないですよね。これまで山の評価は、外から見た山の形、山容を主に評価対象としていましたが、今回は山を歩くときの雰囲気も意識しています。その点で、大雪の雄大さに抱かれて、そこに居るときの素晴らしさが伝わるように表現できていると思います。


林清委員

苗場山の湿原も、本当の素晴らしさはそこに立ってみなければ分からないのですが、そのイメージは伝わったのではないでしょうか。人文資源以外では高野山がいいですね。写真で奥の院の雰囲気を伝えるのは難しいのですが、行ってみたいという気持ちが湧いてくると思います。

日比野　私があえてこだわったのは原宿です。今の日本の若者たちの明るさや時代性を提示しています。ロジカルで整然とした欧米流の考え方ではなく一種猥雑（わいざつ）な、ここから何か新しいものが生まれてくるという息吹を感じますね。奥深い日本の自然とは対極にある、今の若い人たちのエネルギーの在所です。

日本の自然や文化を背景にして、こういう人たちの、いわゆるサブカルチャーが前面に出てきているんですよね。深い森も意識しながら、一方でこういう明るさもある。日本の自然、文化、歴史、宗教も内包しつつ、明るくやっていくんだということが感じられます。そういう意味で外国の人も楽しめるし、現代の日本をよく表している写真だと思います。

志賀　議論として非常に難しかったのが、食や祭り、温泉などにどういう評価軸を置くかということでしたね。原宿同様、大阪の道頓堀や銀座、歌舞伎町といった街をどう評価するかといった議論もかなり活発に行いました。いずれも今の日本を表す観光資源として非常に重要な意味を持つと思いますが、それをどう位置づけるかというのは非常に難しかった。

楓　築地市場も、市場で働く人の生き生きとした姿を写真で表現できたのはよかったと思います。築地市場というと魚が並んでいて観光客が見ているという写真が定番ですが、築地は本来働く場であり、魚が並んでいる観光地ではないことが伝わると思います。

寺崎　絵に動きがありますよね。かつては資源の姿を絵として、つまり静的なものとして見ていたのですが、今回は、動きや人が発するエネルギーみたいなものも評価に入ってきたことが特徴的なことではないかと思います。

多様性

林　私は日本の美しさは、繊細さと季節感にあると思います。明治時代に志賀重昂（しがしげたか）が書いた『日本風景論』では日本の特徴を四点にまとめ、それらが日本の美しさを醸し出していると論じています。

一つ目は気候です。日本の沿岸には寒流と暖流の両方が流れており、また大陸の東側に位置していることなどから気候に多様性があることです。二つ目は空気中に水蒸気が大量に含まれるため、それによって森林やコケの美しさなどが作られる。三つ目が火山で、四つ目が急流です。

こうして見ていくと、今回の本にもこの四つの要素がいろいろな形で表れています。

日比野　日本人は漢字から平仮名を作りましたが、そういう応用力や寛容性は、優しく包み込むような日本の風土や自然が作り上げたのではないかと思います。日本人は自然に触れ、そこから真の美しさや神を感じるといった生き方をしてきており、そのことが今の日本の文化を作り上げているとも言えます。自然に神が宿っているという考え方がずっと息づいているように思いますね。

寺崎　風景が日本人の世界観を作り上げているということですね。

日比野　二十年ほど前に書かれたサミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』という本を最近読み返したんですが、この本には世界に西欧・イスラム・中国など七つの文明があると書かれています。日本も千年以上にわたって独特の文化を形成しており、それは「日本文明」という一つの文明であると言っているんですね。今回作った本はある意味、日本文明の集大成ではないかと私は思っています。

志賀　日本列島は地理的には南北に長いのですが、その中にあって文明が均一的な国というのは世界でも珍しいのではないでしょうか。しかし、一方ではそれぞれの地域のローカリティも結構強いところもある。

日比野　おっしゃる通りで、日本は文明としては統一していながら、同時にローカリティも大事にしていますよね。蓮如上人が言った「ばらばらで一緒」という言葉によく表されています。そういう日本文明の特色というべきものが、この本では実にうまく表現されていると思います。

日比野健委員

いかに日本の自然や文化がオンリーワンかということがわかると思いましたね。

志賀　日本の風景は宗教性も感じさせますね。那智の滝も、青岸渡寺との組み合わせで考えると世界に冠たる風景だと思います。その裏側には、先ほど日比野さんがおっしゃったように日本人の人生観や世界観があると言えますね。

林　自然の美しさに心を打たれて、ここには何か違うものがあると思うわけです。那智の滝もそうですね。美しい滝に引き付けられて、死後の世界を体験しようとそこに人々が信仰を見いだしたわけですから。

日比野　祭りの写真も音が聞こえてくるようなんだけれど、同時に止まっていて音がないんですね。静と動が矛盾なく共存しているというのも、日本ならではかもしれません。

志賀　そういう意味で、伊勢神宮の式年遷宮の写真は素晴らしかったですね。あの写真こそ、全てを象徴していると思います。たくさんの人がいて、あれだけ動きがあって音も感じられるのに、静けさがありますよね。まさにこれが日本だなと感じました。

式年遷宮

「風光」

楓　今回のこの本はタイトルに「風光」という言葉を使っていますよね。

「風土」「風景」「風」と、観光の語源でもある「国の光を観る」の「光」で「風光」ですね。まさに、「光を探しましょう」ということで、とてもいい表現だと思います。

それは自然だけではなく生活の部分についても言えて、さんさんと光が当たっているのではなく、ちょっとした光が当たっているところに人の暮らしがあり、人の面白さや歴史の集積があると。この本では、さまざまな「日本の光」を表すことができたのではないかなと思います。

志賀　当財団のスタッフにいくつかタイトル候補を出してもらったんですが、その中にこの言葉があって、「これがいい」ということになりました。風光というのは風土であり、光であり、影であり、全てを表現していると思います。

ただ明るいだけではなく、光があるから影が強調されるわけですね。日本の風景では陰影が重要で、それが柔らかさを作り出したり、自然の厳しさにもつながります。我々はその中で暮らし、物事を考えてきたわけで、日本の観光資源は光と影が表裏一体であると言えます。風光という表現には、光と陰影の両面を表していると思いますね。

日比野　風光という言葉は、瞬間的なイメージもあって、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の世界に通じますよね。もう戻らないこの一瞬の光と風、温度、そういう感覚がこの言葉には込められていて。ほんの一瞬の美しさを感じる繊細さですね。

志賀　私がもう一つ、風光という言葉に感じるのは、雰囲気や空気感ですね。単に空気が動くだけではなく、空気そのもののあり方も表している。この一瞬のこの雰囲気の中にいる、と体感できるものですよね。

日比野　「風光明媚」ではなく、「風光」だからいいんですよ。

楓　本当にそうですね。この二文字の中に、とても多くのものを含んでいると思います。

文化の継承

寺崎　前回の資源評価研究の際には、歴史景観や地域景観という資源種別で取りまとめていたものを再整理し、新たに郷土景観という種別を設けました。その種別の資源として、水田の風景が二カ所入っています。いずれも前に発行した『美しき日本』には入っていなかった資源です。

越後湯沢でほくほく線に乗り換え、車窓に広がる水田を眺めるのが好きです。揺れる苗、風の通り道が見えます。水面に反射する光。季節によって、絵が違うんですね。観光資源としては特に名もない場所なんですが、旅の途中で目にしたこのような情景は強く印象に残ります。ここではないのですが、郷土景観として農業景観が二カ所入っています。いずれも、前に発行した『美しき日本』にはなかった資源です。

林　そういう資源を入れていこうという議論は以前からありましたね。場所を特定するのがなかなか難しいですが、農業景観で素晴らしいところはたくさんあると思います。特徴的な棚田をA級として選びました。

志賀　棚田というのは別に日本だけのものではなく、モンスーン地帯などどこでもありますよね。でも、日本の棚田にはバリ島などの棚田にはない繊細さがあり、まさに風光の違いみたいなものがこの写真集には明確に表れていると思います。

歴史的に見ると、日本の稲作文化というのは棚田とともにあって、日本の伝統的な農業技術の出発点のひとつでもあるわけです。そうした風景が日本の景観として評価されて、観光資源となることは素晴らしいことだと思います。

楓　白川郷の写真ですが、ただ合掌造りの家だけを写しているのではなく、手前に黄色く色づいた田んぼが写っているんですね。その奥に田んぼを耕すための家があり、上の方で蚕を飼っている。そうした生活感をきちんと表していることが大事だと思います。

志賀　これは意味がある写真ですね。日本の豊かさを表していると思います。今、古い町並みを昔の姿のまま保全はしているけれど、完全にお土産物屋さん街になってしまっているところもあります。

周囲から隔絶され、通過型の観光

地と化していて、いわば資源を消費してしまっているんですね。日本人の生活観や人生観を表した町並みだからいいと言えば言うほど、資源として消耗していってしまうのではないかという危惧を覚えます。

寺崎　伝統的な文化や生活の継承に観光を活用することがよくあります。しかしながら、経済的メリットのみが強調されているような観光地を、今後どうしていけばいいのかという問題はありますね。

林　逆のパターンもあります。歴史的、文化的に意義がある建物だけど、そのままでは経済的に成り立たず老朽化が進み、見るに耐えられなくなる。バランスの問題だと思いますね。

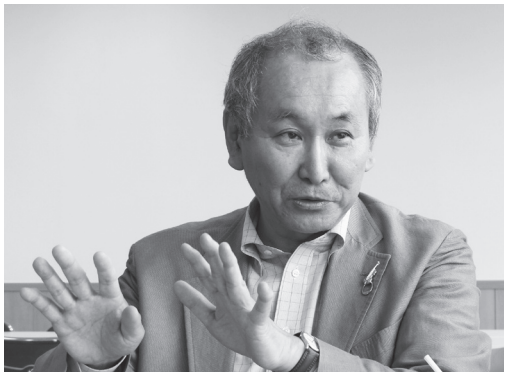
志賀　白川郷などに求められるのは、そのバランスでしょうね。まさに観光資源の利用のあり方を問われていると思います。

寺崎　そういう意味では、今回の評価の中で、人文資源について論議する時間が長かったような気がします。

志賀　以前、中国の麗江古城を訪れたことがあります。もともとここは地元の少数部族の人たちの生活を守るために土産物屋があったのですが、漢民族の資本が入り、少数民族の人たちは郊外に移り住み、そこで民族衣装を着ているのは、漢民族に雇われた人という形になってしまっていて。

楓　一種のテーマパークになってしまっているんですね。

志賀　そうなんです。そういう流れをどこで止めるかという線の引きどころが難しいと思いますね。経済利得への指向はなかなか食い止められないけれど、一定の指標づくりの議論に地域が取り組んでいくことがすごく重要だと思いますね。地域で共通の目標を持ち、あるレベルでバランスを取るといった議論をしていかないと、麗江古城のように本来の担い手である人によって地域文化が継承されなくなってしまいますから。


志賀典人委員長

寺崎　地域の伝統芸能やお祭りなどを継承していくために、観光を活用することがよくあります。ただ、お祭りがイベント化しているようで、複雑な心境になりますね。

林　私がバランスのいいと思うお祭りは「長崎くんち」です。ずっと伝統的に続いていますが、一つの町に順番が回ってくるのは七年に一度なので、待ち遠しい気持ちが続くことにつながることと、負担が過大にならないこと。また、大人と子どもがセットになって取り組むので、子どもたちにも演（だ）し物の責任があるわけです。

　彼らは大人の演し物を見て「かっこいい、大きくなったら自分もこういうのがやりたい」と思い、そういう思いがうまく循環しているんですね。それを外から見に来て、地域にお金が落ちるようにもなっています。

　お祭りが本来の神事から人に見せることが目的になっているケースも多いですが、ある程度はやむを得ないのではないかと思います。見られることで生きがいを感じることもあるし、自分たちだけでやっていても継続しないという問題もありますから。

時間とともに

寺崎　前回の『美しき日本』から『美しき日本　旅の風光』の出版に至るこの十五年間の変化の一つとして、日本を訪れる外国人の増加が挙げられます。これにより、日本にどういう影響があったと思われますか。

林　日本の良さの再発見でしょうね。我々が当たり前と思っていたものの良さを、外国人に気づかされる部分がたくさんあるのではないでしょうか。浅草にしても、雷門の写真を撮りまくるという感覚は我々にはなかったし、最近では多くの人が行き交う渋谷のスクランブル交差点が、外国人観光客には面白いと人気だそうです。我々の感覚では気づかないもの、ごく当たり前のものでも、外からの視点で見ると面白いものが随分

あるのではないかと思います。

楓　季節感の再発見もありますね。今までは外国人が来るのは桜のシーズンが多かったのですが、雪や紅葉シーズンにも来る人が増えるなど、日本の楽しみ方も広がりを見せています。日本人の旅行の仕方に、より近づいているんじゃないでしょうか。

寺崎　日本人が旅行に求めるもの、旅行の仕方も変わってきているのでしょうか。

日比野　たくさんの外国人が日本を旅している姿を目にすることで、日本人の意識も変わりつつあると思いますよ。

志賀　テレビ番組で、日本に来た外国人がある海岸にたどり着き「どこにも行きたくない、ここにいたい」と、三日間くらい何もしないでじっとしているという場面を見ました。そういう旅の仕方を今までの日本人はあまりしてこなかったけれど、これが本来の旅かもしれないなと思いましたね。そういう旅に日本人も学んでいかないと、どうしても観光地を消費してしまうわけです。

滞在型のの観光客がもっと増えれば、今までとは全然違った観光地づくりができると思いますね。そうすると地域も活性化すると思いますし。

林　時間軸というのは大事で、一定の時間をかけて滞在することでその場所の良さが詳細に分かってきます。こうした観光地やリゾートがもっと出てきてほしいですね。今私たちがいる浄土ヶ浜のようなところも、短時間で通過してしまうとかえって魅力が見えなくなってしまうと思います。

志賀　先日、秋田内陸縦貫鉄道に角館から乗りました。すると、同乗していた台湾人二十数名のグループが阿仁合（あにあい）という駅で途中下車したのですが、どこを訪ねたかというと、この駅に隣接する公園の川沿いにある桜並木だったようです。角館はすでに散り際だったこともあって、こちらはちょうど満開の時期だったので、訪ねてきたとのことでした。

ここの桜は二十年前に植えられて、樹勢も強く、最高の状態の花盛りでしたが、残念ながら日本人観光客は全くおらず、混雑する角館と対照的でした。そこに目を付けた台湾人観光客がいるということは、これからのインバウンド観光や日本人のこれまでの観光のあり方を問うものですね。

楓　岡山県の英田（あいだ）では若い人たちが千枚田の復活に取り組んでいて、田植えのシーズンなどには関西から人が来るようになり、農業観光が成り立つようになってきています。そういう新しいことに取り組む人たちをどう応援できるかという課題もありますね。

価値観の変化

日比野　日本人の旅も変化しつつありますね。ＪＴＢが新しく作ったヨーロッパ旅行商品のなかで、人気が高いのは、「私だけの旅・パリ一〇日間」というツアーで、パリとその郊外をゆっくりきめ細かく巡るという内容です。「こういう商品が欲しかった」と、申し込みが千人を超えています。かつての物見遊山的な周遊旅行から、日本人の旅も様変わりして、成熟化してきているなと感じます。

寺崎　旅の成熟化というのは、具体的にはどのような状態でしょうか。

日比野　一言で言えば自分の意思を明確にし、好き嫌いを判断できるということでしょうね。例えばまち歩きをしていて道端で売っている花を買ったり、屋台で何か食べたり、ニューヨークの蚤（のみ）の市で掘り出し物を探したり、気の向くまま思い思いに旅を楽しめるようになってきたと言えます。

寺崎　一人ひとりにとって固有の旅の価値があり、それが行動に結びついていく状況の中で、ある特定の目利きが観光資源を選定しまとめたこの本は、時代に逆行しているようにも思えます。

寺崎竜雄委員

日比野　そうではない。この本には多様性が満載されていますよ。外国の人たちに、この本を見せて「ミシュランのガイドブックなどと比べてどうか？」とヒアリングしてみたいですね。専門家、一般の日本人、外国人の視点はそれぞれ違うわけで、その差について考えるのもいいかもしれません。

楓　旅の成熟化という話で言えば、旅先にいかにたくさん接点を作れるかも重要ですよね。多く接点を作った分、旅も楽しくなりますから。課題は、その接点作りを地域でどうやっていくかということでしょうね。

寺崎　この本に載っている写真も、一番いい時期に一番いい光があたっている状態を表現していますが、そういう時期は一般の旅行者にはなかなか分からないわけです。地域の方が「この時期に来てください」とか「もう一泊して、この時間帯に見てください」と、訪れる人たちに言えるような仕組みも必要だと思います。

楓　そういう意味で、解説する役割というのは大事ですね。先日、特A級資源の岩手県北山崎を漁師さんの船で回りました。単に景観を説明するだけではなく、震災経験も含め、ご本人の体験の話をいろいろ聞くことができ、地域への興味がより深まりました。

林　昨年訪れた桂離宮では、ガイドの方が宮内庁職員だったのですが、本当に公務員かと思うくらい説明がうまくて、その人いわく「一番いい季節は今ではなくて冬だ」と。その風景を言葉で表現してくれるんですね。想像力を非常にかき立てられました。

日比野　で、私が修学院離宮を訪れたときについた宮内庁のガイドさんはちょっとぶっきらぼうな方でしたが、何かガイドの基準があるのかと聞いたら「みんなばらばらだ」とおっしゃっていました。自分の興味に応じて好き勝手にやっていますということでした。でも、外国人にはその方が受けるかもしれないですね。

林　皆、同じではないというのも面白いですね。

志賀　それも大事なことですよね。ガイドって結局個性ですから。先日ある旅行先で、内装が白木の凝った造りの蔵があって、そこのご主人がなぜ白木がいいか、いかに手入れが大変か、「でも漆なんて塗ったら駄目だ」みたいなことを延々と説明してくれるんですね。その後、地元の老舗と呼ばれる店に行ったら、内壁に漆をたっぷり塗っているんです。ああ、こういうことかと。彼としてのプライドと誇りがあったんですね。

日比野　その人にしか語れないこと。これもオンリーワンですよね。

日本人のアイデンティティ

日比野　二〇五〇年になったら、世界中の観光客が今の三倍になると言われています。その頃には訪日外国人が三千万人に達するのは間違いありません。世界中に観光客が溢（あふ）れる事態が迫っているわけで、これは世界的な大テーマだと思います。

　それがいいか悪いかということではなく、大変なことになることは明らかです。そのときに美しき日本をどうやって守るかという問題もさらにクローズアップされると思います。

寺崎　それほど多くの外国の方が増えるとどのような状況になるでしょうか。

日比野　欧米人の旅行の仕方はかなり成熟してきて、五箇山や屋久島などへ足を延ばす人も増えています。日本人はもちろん、アジアの人たちの旅も成熟化するのがかなり早いのではないかと思います。

　物見遊山の旅から目的を持った旅をする人が増え、興味が分散化している中、風景だけでなく、人の営みや文化など、さまざまな角度から日本の魅力を感じていただけると思いますね。

楓　例えば五箇山に行ったら合掌造りを見るだけではなく、紙すきの職人さんを訪ねたり、実際に紙すきを体験してみたり、ひもで縛った硬い豆腐を食べてみる面白さなどがありますね。今回の本の中では、伝統工芸という切り口が打ち出せなかったのですが、旅先で手づくりのものに出会う楽しさもあるはずです。

日比野　有田焼の窯元に行ったり、栃木県の湯西川温泉へ昔話を聞きに行く外国人観光客も増えているそ

うです。自然よりむしろ、生活や人に注目が集まっていると言えます。

楓　日本人が手でいろいろなものを作り上げている姿に外国の人は感動したり、「なぜこんなものができるの」とびっくりするのではないでしょうか。その接点を広げていくことによって、特A級やA級といった評価基準とはまた違う評価による観光資源が見いだせるのではないでしょうか。

例えば、有田焼もちょっと絵付け体験をしてみることにより、どうしてああいうデザインがこの土地で生まれたのかという点に、外国人の関心が広がると思います。人の技ですよね。

林　一方でそういう観光資源は選ぶのがなかなか難しく、観光対象としての魅力に永続性があるかという問題もあります。場所にかかわらず人の技をピックアップするのがいいという議論と、その技が息づく場所も特定した方がいいという議論があるでしょうし。

日比野　例えば、盆栽というのも今回の本には入っていませんが、埼玉県の大宮が有名ですね。盆栽の世界もすごく深くて、まさに小宇宙ですよ。外国人の関心が高いし、ああいうものは世界に他にないという意味では、次の観光資源としての可能性があると言えます。

寺崎　このようなことは、十五年前の評価作業のときには話題になりませんでした。旅行者の意識と行動は着実に変化しているのですね。今回はA級と特A級の観光資源を選定しましたが、今まで皆さんからいろいろな具体例が出たように、従来とはまた異なる基準で評価されるべき資源もまだまだあると思います。

優劣はないので、「準」という表現はちょっと違うかもしれませんが、今後はそうした「準A級的」な資源をうまく定義していかなければなりません。

志賀　今回のA級や特A級では受けとめられなかったけれど、別の観点から見て可能性のある資源をリストアップする作業は必要かもしれませんね。そうすると、これまでなかなかビジネスベースに乗れなかった着地型旅行などのあり方も変わってくるかもしれません。

日比野　旅の成熟化とともにアピール力がある資源として、A級や特A級との差が狭まる予感がしますね。人によってはA級や特A級より、準A級に価値を見いだす人もいるでしょう。むしろ、我々の評価軸を広げて、議論をオープンにしないといけない。いずれにしても、この仕事は日本人のアイデンティティへの気づきに、大きな貢献をしたと思います。ですから、さらに発展的に継続させていく必要があります。それが、公益財団法人日本交通公社の使命です。

寺崎　早くも、次の宿題が見えてきました。新しい価値への気づき、それを表現する資源の抽出、さらには資源の持続的な利用のあり方、そして観光の力など、観光研究者はさらに意欲的に多くの研究課題に取り組まなければなりませんね。本日は、多岐にわたるお話をどうもありがとうございました。

（二〇一四年五月十三日・岩手県宮古市浄土ヶ浜にて）

取材協力　㈱REGION　井上　理江

掲載写真「奥入瀬渓流」「式年遷宮」
出典：JTBパブリッシング
『美しき日本　旅の風光』

楓　千里（かえで　ちさと）
（株）JTBパブリッシング執行役員ソリューション事業本部副本部長兼会員サービス事業部長。学習院大学法学部卒業後（株）日本交通公社入社、出版事業局配属。海外ガイドブック、月刊『るるぶ』編集部を経て、一九九九年から月刊『旅』編集長。二〇〇四年（株）JTBパブリッシング設立と同時に広告部長、二〇〇九年執行役員法人事業部長を経て、二〇一一年から現職。国土交通省「小笠原諸島振興開発審議会」、総務省「地域の元気創造有識者会議」委員等。

林　清（はやし　きよし）
立命館アジア太平洋大学（二〇〇八年～）、高崎経済大学（二〇一一年～）、横浜商科大学（二〇一二年～）非常勤講師。一九七一年東京工業大学工学部社会工学科卒業。同年、（財）日本交通公社入社。一九七七年（株）札幌リゾート開発公社出向、札幌国際スキー場開発事業に携わる。一九七九年（財）日本交通公社復帰。二〇〇三年常務理事を経て、現職。専門分野は観光計画・旅行動向。主な著書に、『旅行業界』（共著、教育社、一九九一）、『観光読本』（共著、東洋経済新報社、二〇〇四）

日比野　健（ひびの　けん）
（株）JTB総合研究所代表取締役社長。一九七四年に大阪大学文学部を卒業し、（株）日本交通公社（現：（株）ジェイティービー）に入社。団体旅行京都支店長、関西営業本部副本部長を歴任。二〇〇二年取締役経営企画部長、二〇〇三年（株）JTBビジネストラベルソリューションズ代表取締役社長、二〇〇八年（株）ジェイティービー常務取締役旅行事業本部長、二〇一〇年（株）JTB西日本代表取締役社長を経て、二〇一二年六月から（株）ジェイティービー代表取締役専務、二〇一二年六月から現職。

特集テーマからの 視座

観光資源評価研究を振り返って

公益財団法人日本交通公社
理事・観光文化研究部長　寺崎　竜雄

観光資源の価値は、観光する人それぞれの興味や感受性、知識に委ねられている。また、個々人においても知識が増大し、感受性が磨かれれば、資源の見え方も変わるだろう。個人的に好きなもの、あるいは特定の趣味を持つ人たちの中で話題となる観光資源も多々あり、それぞれが魅力的な観光資源であることに変わりない。

しかし今日のように、日頃接する情報量が多くなり、価値観が多様化し、その多様性を認め合う風潮のもとでも、やはり誰もが美しいと思うものは美しく、多くの人が素晴らしいと感じるものは素晴らしい。この等しく人を惹きつける魅力の源泉は何なのか。この探究こそ、われわれが取り組んできた観光資源評価研究の主題である。

研究の経緯

当財団が関与するわが国の観光資源の評価と全国観光資源台帳の作成（リスト化）は一九六八年の研究に端を発する。これを仮に第一期としよう。その時代背景や、研究成果の活用例は梅川（**特集2**）が詳しい。また、溝尾（**特集1**）は、それ以前の観光資源評価の系譜や、そもそも風景の見方によって資源の観光的価値が顕在し、観光対象となったものが観光資源となること、資源の見せ方の重要性にも触れている。

さて、膨大な作業を通して一九七〇年代（第一期）に整えた全国観光資源台帳は、一九九九年に見直しを行った。これを第二期とする。このとき、その結果を踏まえて特A級とA級資源を紹介した写真集『美しき日本～いちどは訪れたい日本の観光資源』を制作した。この冊子は株式会社ジェイティービーの国内旅行の販売促進にも利用された。また、諸外国に向けて日本の魅力を発信する道具としても活用された。当財団にとって、全国観光資源台帳（リスト）を開示（特A級、A級、B級に限定）するきっかけにもなった。

このときの発端は、その低迷がいわれていた国内旅行需要の喚起である。当時の経済的な要因もあるが、海外旅行に比べて国内旅行には魅力が乏しいという論調があった。あるいは、国内は行き尽くしたので、もはや見るべきものがみあたらないという声も聞かれた。ならば、日本の良さを広く明示してみようと意気込んだ仕事であった。

観光資源評価研究の意義は、第一期では観光資源の魅力の源泉を客観的に表現し、観光資源をランク別にリスト化することによって、資源の保全と効果的な活用を図ろうとすることにあった。供給（観光地づくり）の側の目線である。

第二期は、第一期の成果を需要（旅行者）の側で活用すること、研究成果を広く問うという意義があったと考える。

私は、第一期については、研究成果の活用者として、第二期は、評価研究プロジェクトの中心メンバーとして関わってきた。そして観光資源の今日的価値基準の研究と題した今回（第三期）は、研究チームの責任者として、観光資源評価委員会の委員の一人として作業にあたった。

今日的観光資源評価（第三期）に着手

観光資源評価（第一期）を観光地計画の場面で活用したときに、また一九九九年改訂の際（第二期）にも、いくつかの消化不良があった。梅川（**特集2**）の指摘とも重なるので詳細は省く。流行にまどわされず古典

としての資源の価値を尊重する、したがって、一度定まった資源の評価は普遍であるという諸先輩が築いた観光資源評価の大前提には共感するし、継続すべきコンセプトだと考えるが、人の行動や価値観の変容を実感する中では、評価の枠組みの修正は否めないと、強く感じていた。

今回（第三期）、当財団の五〇周年記念事業を企画するにあたり、最初に頭をよぎったのは、この問題意識であった。向かう課題は困難であり、当初はためらいが大きかった。結果として理論を一から作り上げた第一期ほどの議論と作業の時間はとれなかったものの、新しい局面に踏み出せたと考えている。

研究内容の一端は、中野・五木田（**特集3**）が紹介している。前述の課題には今日的価値基準という表現で対応した。具体的には

- **観光活動の多様化**
- **海外旅行経験率の上昇**
- **外国人旅行者数の増加**

の三つの社会環境の変化を強く意識して評価の枠組みの再構築を試みることとし、観光資源、観光活動、魅力ある観光資源の定義の再考から始めた。

一方で、多くの観光客が訪れているからといって観光資源の魅力が高いということにはならない、人気投票によらず、資源の魅力の本質を探りたいという考え方を再確認した。つまり、観光資源評価研究の主題は、既存研究を踏襲した。

観光資源評価委員会

観光資源評価の枠組みの構築と評価作業は、当財団の研究チームに加え、有識者による委員会を構成して進めた（**特集3 23ページ参照**）。観光資源の根源的な魅力のことを考え続ける研究者、観光計画を専門領域としたプランナー、実在の観光需要に直接触れてきた実務経験者、なによりも日頃からあちこちに出かけて、観光現象を見ているもの、観光のプロの目利きに頼ることにした。

ここで各委員の思考や価値観は、**特集1**と**2**、そして座談会（**特集6**）を見てほしい。ちなみに、本誌には全委員が登場する。

議論の過程では、全員の考えが一致する場面もあれば、意見が分かれたこともある。多数決は行わず、全会一致するまで議論をつないだ。また、現地調査も行った。特A級資源は、ほぼ全員が目にしている。そういう点では、見ていないもの、行っていないところは選に漏れているかもしれない。

専門委員の指摘

あわせて、専門委員（**特集3 23ページ参照**）を任命し、助言を仰いだ。本研究の意義や評価の枠組みについて、たとえば次のような意見をいただいた。

- 〝長期的に、未来の世代の人も評価するもの〟〝百年たっても評価し得るもの〟として、専門家が大所高所からの視点で選ぶということに意義あり
- 見られる姿だけではなく、その背景にある文化的なことや、歴史的なストーリーもあわせて考えることが重要
- 日本らしさ、地方らしさ、固有の歴史・文化、社会（コミュニティ）、生活文化、伝統などを、伝えるものにすべき
- 無形文化については〝その場所で演じることに意味があるもの〟、食についてもその〝場所と深く結びついておりそこで食べることが価値〟ということが重要
- 日本人が、日本人として何を我々の文化（観光資源）として捉えているのかが問われる。本当の意味での〝国際化〟を考えると、外国人の志向や人気に合わせることは間違いで、まず日本人に日本を知ってもらうこと。この取り組みでは〝特に日本的なものを別格として扱う〟ことが重要

もちろん、個別資源についても言及があったが、ここでは触れないことにする。

評価結果の考察

新たな評価の枠組みをもとにして選定した特A級とA級資源の数を、

前回（第二期）研究の結果と比較すると、前回の自然資源二百十八件、人文資源百八十一件に対して、今回（第三期）は自然資源百五十八件、人文資源二百九十三件と、自然資源は減少、人文資源は増大という結果となった（**図参照**）。〝今日的〟に対する答えの一つである。

具体的な変更点の一例として自然資源をみると、〝大雪山〟や〝立山（弥陀ヶ原までも含めた範囲）〟は、山容の美しさや雄大さに加えて、そこに抱かれたときの周辺環境にも着目し特A級とした。〝瀬戸内海の多島景観〟は日本らしさ、〝慶良間諸島の海岸〟は美しさが特筆されることから特A級となった。

A級資源の大幅減は、資源種別の統廃合によるところが大きいが、海外の自然資源と比較したときの大きさ（ダイナミックさ）という面での厳しい見方によるもの、不適切な開発や利用による価値の低減によるものもある。

人文資源では、追加した種別に属する観光資源が新たにリストアップされたことに加え、既存の資源種別ごとにも数が増加した。

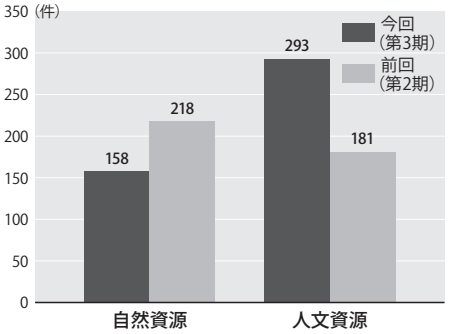
新種別の「テーマ公園・テーマ施設」では、東京ディズニーリゾートはこれまで見る観光対象というより、アトラクションやホスピタリティ、雰囲気を楽しむ観光対象としての性質が強いこと、興行の価値は主催者の一存で変わりうることなどの理由により、リストアップしなかったが、今日的枠組みにのっとり、特A級と評価した。

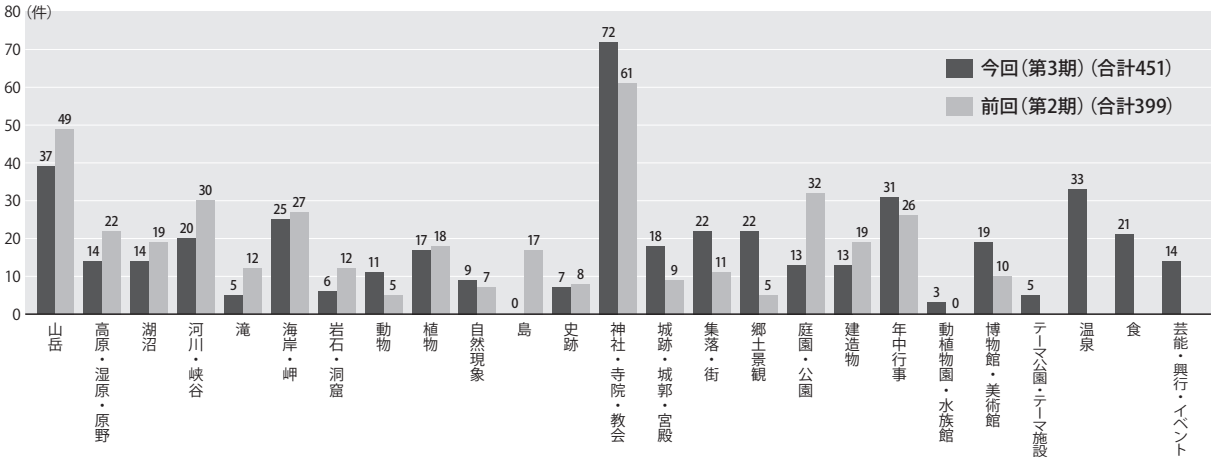
同じく新種別の「芸能・興行・イベント」として、歌舞伎や能などの日本の伝統芸能をリストに加えた。ただし、その演芸自体の文化的価値をいうのではなく、そこまで出向いて、その場所で見ることの価値を主張した。また、イベントとして〝箱根駅伝〟〝夏の甲子園〟のスポーツ観戦を新たにA級として選定した。日本人の精神性が強く表れていることが選定理由の一つである。

「集落・街」では、新たに〝原宿〟が現代のポップな若者文化が象徴的に表現されている街として（**特集6参照**）、〝白川郷合掌造り集落〟は生活文化を継承する独特の集落として、〝祇園界隈〟はまさに日本の伝統文化の息づかいが感じられる街として、日本を代表して世界に誇示する特A級資源となった。

「郷土景観」には人がおりなす風景、人の息づかいや生活文化、そして人の心が表現されている資源が新たに高評価を得た。たとえば、特A級とした〝小笠原の見送り〟は、もともとは島を離れる島民のためものだが、いまでは観光客の離島時の演出として、島びとのホスピタリティ

図　特A級・A級の観光資源数の比較（種別・研究期別）





が絵のように浮き出された様子として、「日本らしさ」「住民とのつながりの深さ」という面で、観光客の心を強くうつと考えた。

なお、「温泉」についての議論は石川（**特集4**）が簡潔にまとめている。「食」については安田（**特集5**）が特A級、A級の資源を個別にあげて、詳しく評価を述べている。

外国人の目線

今日的観光資源評価研究（第三期）の成果として、**特集6**の座談会の話題にした写真集『美しき日本 旅の風光』（特A級とA級の観光資源を象徴的な写真で紹介し、日本語と英語による解説を併記したもの）を本年五月に出版した。

この後、簡体字・英語、繁体字・英語、ハングル・英語、タイ語・英語のそれぞれの併記版を作成し、株式会社ジェイティービーが各国で配布する予定である。諸外国に向けて日本の魅力を発信しようとするものだ。

ところで、国際化をめぐる議論の過程では、外国人にとっては路地端の朝顔の鉢植え、渋谷のスクランブル交差点の様子なども感動の対象（「日本らしさ」）だということが話題になった。外国人目線による魅力の源泉の探究にも踏み込もうとしたが、各国民によって感性は異なるはずだという難問を提示したところで、議論を終えた。

日本人が選んだ日本の魅力、この写真集が放つメッセージは外国人の心に届くだろうか。反応は各国によって同じか否か。

日本らしさの自覚

写真集『美しき日本 旅の風光』眺めていると、研究の主題として一貫して意識した観光資源の魅力の源泉、感動の根源は、美しさ、大きさ、古さ、……という評価の視点、理論立てた魅力のものさしの他にもあるのではないかと考えるようになった。

写真はその場に居る自分を想像させる。視覚に頼って自分の意識や感性を集中させて見ると、それぞれの観光資源が誇らしく〝日本〟を主張しているかのように思えてくる。日本らしさの共感、日本人としてのアイデンティティの気づきが、心を動かす。そこに居、資源と対峙するなら、なおさらだろう。

話が大げさになったが、外国人目線を意識し、それに対応することも日本の観光振興に必要ではあるが、専門委員の指摘にもあるように、国際化が進む今、大切なことは日本に暮らす我々が日本らしさを確認することだと改めて感じた。

そして、今回の研究の意義を問われれば、〝わが国を想う〟ことだったと今は考えている。とはいえ、この仕事に対する評価によって意義は変わり得るものだと思う。

今後の取り組み

今回の評価作業では、特A級とA級の観光資源の選定を行ったものの、B級資源の精査には至らなかった。既述の通り、A級の次の評価ランクとして、**特集2**ではB級、座談会（**特集6**）の中では準A級的と表現している資源群の再評価作業が次の研究課題として残っている。

既存研究では、B級資源はA級資源に劣るというニュアンスであった。しかし、その中にも他の資源にはない独自の魅力を持ち、観光ニーズの多様化に十分に対応するもの、ゆえに遠方からの誘客力をもつ資源も多数あるだろう。そのことを考慮の上で、今日の観光状況に応じた観光資源の概念整理が重要だと考えている。

おそらく、今回はA級として選定されなかったものの、ユニークな光を放つ観光資源を改めて調査することになるだろう。いずれ、その結果は、当財団のホームページで公表していきたい。

評価の枠組みについても、五年ごとぐらいに再検討していくことが必要だろう。併せて、特A級とA級の資源リストも更新していくことが望ましい。

そのときに日本らしさが観光資源評価としてどのように表現されるのだろうか。時代とともにどのように変わっていくのだろうか。楽しみである。

（てらさき　たつお）

自主研究報告（1）

里山エリアの活性化に果たす観光の役割に関する研究

公益財団法人日本交通公社　観光政策研究部　主任研究員
堀木　美告

「里山」あるいは「里地里山」という言葉を耳にする機会は以前よりも格段に多くなった。里山への訪問や里山での体験を銘打った旅行商品も目につくが、それでは「里山」とは具体的に何を指すのだろうか。

「里山」に対するまなざし

古くは一七五九年（宝暦九年）刊行の『木曽山雑話』で寺町兵右衛門が「村里家居近き山をさして里山と申し候」と記している（注1）が、今日の「里山」という言葉や概念の普及には森林生態学者・四手井綱英（しでいつなひで）の著作や今森光彦が発表した一連の写真集の影響が大きいと言われる。

それが具体的に何を指すのか、環境省自然環境局のウェブサイト（注2）で見てみると、里地里山とは、

①「原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域」としてまず空間的な構成の面から規定している。また、

②「農林業などに伴うさまざまな人間の働きかけを通じて環境が形成・維持」されてきたという成立背景や、

③「特有の生物の生息・生育環境として、また、食材や木材など自然資源の供給、良好な景観、文化の伝承の観点からも重要」だという機能面にも触れている。

このような「里地里山」は、一九六〇年代の大規模な宅地開発によって大きく消滅した。また、七〇年代に観光地化するに至るほどの「資源性」は有しておらず、八〇年代から九〇年代にはリゾート開発の対象となった地域もあるが、それは先に触れた里山の特性に依拠したというよりは開発可能な土地の存在が要件であった。

里山が観光の対象として政策的な面から注目されたのは、環境省の「エコツーリズム推進モデル事業」が一つの契機だったであろう。

二〇〇四年度（平成十六年度）から二〇〇六年度（平成十八年度）にかけて実施された同事業では、「豊かな自然の中での取り組み」「多くの来訪者が訪れる観光地での取り組み」、そして「里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取り組み」という三区分のもと、全国十三カ所のモデル地区が指定された。五十以上の応募地域の半数以上が里地・里山をフィールドとするもので（注3）、これらの地域でも地域振興の観点から観光（当該事業ではエコツーリズム）への注目度が高まっていたことが分かる。

本稿では異なるアプローチで来訪者を受け入れている二つの取り組み事例を通じて、里山エリアの活性化に果たす観光の役割について考察する。

事例❶ 里山の古民家を活用した滞在施設「集落丸山」（兵庫県篠山市）（注4）

丸山は兵庫県篠山（ささやま）市の中心部から自動車で十分足らずの距離に位置し、篠山の城下町の水源地に当たる集落

である。昭和の後期から徐々に人口流出が進み、二〇〇八年度（平成二十年度）当時で十二戸の民家のうち七戸が空き家となっていた。

空き家を持ち主から借り受けて、有志の出資と行政からの補助金によって三棟の古民家を改修、二〇〇九年（平成二十一年）十月に一棟貸しスタイルの滞在施設「集落丸山」として開業した。NPO法人集落丸山と一般社団法人ノオトが有限責任事業組合を結成して運営に当たっている。

丸山集落

古民家を改修した「集落丸山」の滞在施設

二〇〇七年（平成十九年）以降に古民家診断や集落全世帯の調査が実施され、建築や景観の専門家が古民家の魅力と再生の可能性を発見したとされる。その後は住民が主体的にワークショップなどに参加して話し合い、後に連携して「集落丸山」の運営に取り組むこととなる一般社団法人ノオトなどと共にまちづくりの方向について検討を行った。施設運営についても専門スタッフの招請や外部への業務委託ではなく、基本的にNPO法人の役員すなわち集落の住民が自ら担っている。

前述したとおり、古民家を改修した施設を一棟貸ししており、古民家での滞在そのものを価値ある体験として提供している。特筆すべきは魅力的なレストランの存在である。一九九八年（平成十年）から集落内で蕎麦を提供する「ろあん松田」、宿泊施設に隣接する米蔵を改修したフランス料理店「ひわの蔵」（二〇一四年六月現在臨時休業中）の二店舗と連携して食事を提供することによりオーベルジュとしてのポジションを取っている。

一棟貸しというスタイルや高めの価格設定と相まって、家族や旧知の友人グループが地元食材を使った食事を楽しみ、ゆったりと過ごすような利用形態が多いという。

事例❷ 里山での活動体験「飛騨里山サイクリング」（岐阜県飛騨市）

「飛騨里山サイクリング」は〝クールな田舎をプロデュースする〟をミッションとして活動している株式会社美ら地球が提供するプログラムである。代表取締役の山田拓氏が世界中の田舎を一年半かけて旅する過程で日本の田舎の魅力に注目し、移住先を探す中で飛騨古川に巡り合ったことがきっかけである。

同社では古民家の保存状況や無形の暮らし・営みに関する情報などハード・ソフト両面の聞き取り調査や、古民家の維持管理に関するボランティア活動を行っており、活動を通じて得られた地域情報を海外も視野に入れてホームページで紹介している。

観光の視点はあまり意識せず、地域の小さな例祭など生活と密着したイベントをコンテンツの中心に据え、日本語と英語、一部はフランス語でも発信している。

これらの活動を通じて住民とのコミュニケーションの中で得られた地域情報を「飛騨里山サイクリング」のツアー内容に反映させている。その背景には、これら地域の生活と密着したコンテンツが来訪のきっかけになるという考えがある。

基本的なコースとして午前中半日、午後半日、一日がかりのツアーを用意し、その他に季節に応じた特別なプログラムを提供している。自転車という移動ツールがセットになっているため行動範囲は比較的広く、午後半日を使った「スタンダード」コースでは里山エリアに設定された二十キロ強のルートを巡る。これらのプロ

グラムは「飛騨人と旅人をつなぐエコツアー」、すなわちガイドが来訪者と地域住民を引き合わせる役割を担っていると位置づけられている。

サイクリングの運動の負荷はさして高くないため、幅広い年齢層に利用されている。ホームページからアクセスしてくる海外からの参加者も多い。

ルート上で出会った地元の人たちと会話を楽しむ

里山を巡り変化する風景を味わう

観光が里山エリアにもたらす効果

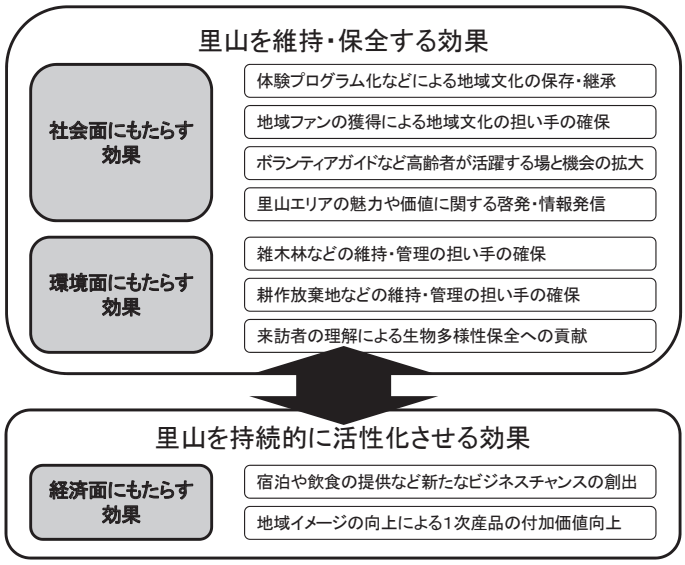
以上二つの事例も踏まえつつ、観光が里山エリアに及ぼす効果を例示的に整理すると、図1の通りとなる。

「里山を維持・保全する効果」として社会、環境の両面にもたらす効果があり、更に「里山を持続的に活性化させる効果」として、宿泊や飲食の提供などかつての薪炭の産出に代替する新たな経済的価値の創出が考えられる。

観光地を「観光で訪れる来訪者から得られる収入が地域経済の基盤となっている地域」(注5)と捉えた場合、里山エリアのうち既に観光地となっている地域はそう多くはない。

里山の大半を占めると考えられる「観光地ではない里山」、すなわち観光産業が集積していない里山エリアにおいても、観光振興は地域活性化に欠かせない重要な手段である。その目的は地域社会や環境の維持から地域経済の活性化までより幅広いものとなるが、それらの目的達成のためには観光が里山エリアに対して及ぼす社会面での効果、環境面での効果に加え、経済面での効果を指標として地域をマネジメントする姿勢が求められる。

図1　観光が里山エリアに及ぼす効果の例



里山エリアにおける観光振興の留意点

更に既存観光地と里山エリアの相違を意識しつつ、里山エリアの活性化のために観光振興に取り組む上での留意点について考えてみたい。

地域外部からの視点による里山エリアの魅力再認識

事例❶では地域外部の専門家による調査をきっかけとして住民が丸山集落の持つ価値に気づき、その後の取り組みへとつながった。

事例❷では移住者の視点が飛騨古川の都市や周辺の里山の魅力を浮き彫りにした。

前者では住民がその後の事業の担い手の中心となり、後者では民間事業者が住民との関わりの中で核となって事業を進めたという違いはあるものの、地域の魅力を再認識する段階においては、いずれも地域外部からの視点が大きな役割を果たしている。

地域の魅力を把握する際に外部の視点が重要であることは、里山エリアに限らず認識されているところ

であるが、里山においてはそれが自然資源や歴史文化資源に比べて現在の住民の生活とより密接に結びついている。そのため内部で生活する住民にとっては一層気づきにくい性格を有していると考えられる。この意味において、里山エリアの魅力の再認識に際しては地域外部からの客観的な視点をどのように取り込むかが一層重要な鍵となる。

「里山らしさ」の表現と地域への効果を共存させるサービスの創出

来訪者を受け入れる際には宿泊や飲食その他のサービスの導入を進めることになる。サービスを評価する基準はさまざまであるが、「観光地ではない里山」エリアでは、独自の「里山らしさ」をどのように表現して伝えるかが重要なポイントとなると考えられる。

例えば、事例❶では基本的に集落の住民が来訪者へのサービス提供を行っており、宿泊者はおのずと集落の住民とコミュニケーションする機会を持つこととなる。

また、事例❷のサイクリングツアーのガイドは地域外の出身者が多いが、ツアーで巡る先々の農家の庭先などで地域住民と交流する場面がちりばめられている。

里山エリアでは、このような住民と直接触れ合う機会の存在がサービスの魅力向上の面で大きな意味を持つと考えられ、既存観光地とは異なる基準で「里山らしいサービス」とは何なのかを見極めることが求められる。その中で観光による里山エリアへの社会的、環境的、経済的な効果をどのようなバランスで高めていくのか、留意することが重要である。

集落を基本単位とした観光計画論の必要性

先に挙げたような課題の解決も含め、地域が目指すべき将来像を共有してその活性化に取り組むためには、将来ビジョンすなわち観光計画の策定が効果的であるが、ここでは観光計画が対象とする空間のスケールが重要な意味を持つ。

既存の観光計画は自治体レベルでの策定を基本的な対象範囲として、複数の自治体にまたがる広域圏や都道府県レベル、あるいは自治体内の特定箇所にフォーカスした地区レベルや施設レベルのものもある。

一方で特定の「集落」を対象とした観光計画はほとんど見られない。これは観光関連産業の集積という社会的要因により規定される観光地と自然地理的な要因で形成された集落という空間単位が必ずしも一致しないことが一因であろう。

本稿で取り上げた事例を見ると、事例❶は丸山という里山集落の住民自らが地域の活性化に取り組んでいる事例である。また、事例❷は取り組み全体として見ると集落というまとまりは直接見えにくいが、プログラムづくりの背景には、個々の里山集落が抱える空き家の管理や地域文化の継承などの課題がある。

これらの事例が全てではないが、里山エリアでの人々の営みが集落という空間単位と密接に結びついていることを考えると、里山エリアの活性化を目的として観光振興に取り組む際は、おのずと集落を基本単位とした計画論が必要とされ、そのための知見の蓄積を図ることが重要だと考えられる。

以上見てきたように、里山エリアを対象として観光による地域活性化を図ろうとする場合には、既存の観光地を対象とする場合との相違点があることが分かった。今後、集落という空間単位の存在を強く意識した取り組みとそれに応じた計画論的な知見をストックするとともに、実践面からのフィードバックを進めていくことが欠かせない。

当財団では、自主研究「これからの観光地づくりと観光計画に関する研究」を通して、集落における計画論についても研究を進める予定である。

（ほりき　みつぐ）

掲載写真：筆者撮影

（注1）資料『里山の環境学』1ページ、二〇〇一年十一月、武内和彦　東京大学出版会

（注2）「里地里山の保全・活用」環境省自然環境局ウェブサイト http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html

（注3）出典『エコツーリズム推進マニュアル（改訂版）』二〇〇八年三月、環境省

（注4）資料『集落丸山の物語 歴史・自然・空間をよむ』二〇一〇年、一般社団法人ノオト

（注5）資料『観光地経営の視点と実践』二〇一三年十二月、公益財団法人日本交通公社編著　丸善出版

自主研究報告（2）

欧州の先行事例に学ぶ「持続可能な観光のための指標」の導入過程

――イギリス・アイルランド視察報告

公益財団法人日本交通公社　観光文化研究部　研究員　清水　雄一

近年、世界各地で「持続可能な観光のための指標（以下、指標）開発」が行われてきている。これまで本誌でも度々取り上げてきたので詳細は割愛するが、一言で言えば指標とは、「持続可能な地域の将来に向けて、地域の現状を、経済・環境・社会の各観点からバランスよくモニタリングするためのチェック項目」である（『観光文化』216号「特集」、同219号「財団活動のいま」参照）。

我が国での指標導入の参考とすべく、二〇一三年（平成二十五年）十二月に、欧州の二つの事例について、その開発の中心人物であるサリー大学のグラハム・ミラー氏と、ダブリン工科大学のケビン・グリフィン氏らに話を伺った。

欧州共通指標「ETIS」導入過程の現状（イギリス視察）

ロンドンの南西、サリー州ギルフォードにある緑の美しいキャンパスを抜け、グラハム・ミラー氏は我々を研究室に通してくれた。

「ようこそ、サリー大学へ。前回お会いした時の東京は、本当に暑かったですね」。

今回の訪問に先立ち、当財団では、二〇一三年（平成二十五年）八月に来日した同大教授のミラー氏を東京に招いていた。世界で取り組まれている「持続可能な観光のための指標」の情報収集として、また、国内初となる沖縄県での指標導入プロジェクトに関する意見交換を行ったのである。

さらに遡ること半年、同年二月末に、ミラー氏が議長を務めた欧州委員会のプロジェクトでは、ETIS（European Tourism Indicators System for Sustainable Management at Destination Level 観光地レベルにおける持続可能な管理・運営のための欧州観光指標システム：イーティス）という共通の指標及び指標管理・運営システムが開発されていた。今回の訪問では、開発後のETISをめぐる動向も知りたいことの一つであった。

ミラー氏は次のように話を始めた。

「去年の八月末に貴財団で会って以来、ETISのプロジェクトは、二つの点で動いています。一つがボーディングメンバーの設置、もう一つが、ETISに関心を持つ欧州内の地域への基礎調査です」。

競争優位要因としての指標

ミラー氏によれば、二〇〇八年（平成二十年）のリーマン・ショックによる世界的な経済不況以降、イギリス内の地域観光局の資金源が、政府による一〇〇％出資から、政府一〇％、民間九〇％出資と大きく移り変わっ

写真1　ミラー氏の研究室でのミーティングの様子

た。官から民へ、中心的な利害関係者が代わるのに伴い、指標導入の誘導方法もそれに合わせて変えてきたという。単に持続可能性を訴求するのではなく、地域で指標を導入することによって、他地域との競争優位につながることを強調し、民間事業者の関心に応えたのである。

写真2 左から筆者、寺崎部長、ミラー氏、中島主任研究員

写真3 緑の美しいサリー大学キャンパス

さらには、十人のボーディングメンバーのうち、ミラー氏を含む欧州内の専門家は二名、その他八名は産業界のメンバーからなっており、民間を意識した人員構成としている点も特徴的である。

このボーディングメンバーを通じて、ETISを採用する地域に対して、適宜必要なアドバイスのできる体制を取っているという。

欧州全体を包含する統一基礎調査

我々の往訪時には、EU加盟の二十八カ国のうち、ローマやミラノといった百以上の地域から基礎データを集約している最中とのことであった。基礎データの項目としては、「山間地域」や「海浜地域」など、その地域がどういった地域なのかを把握する「地域プロフィール」と、「責任者やプロジェクトマネージャーなどの実施組織体制及び現在のETISの取り組み状況」を把握する項目からなっている。

これらのデータ収集と分析結果から、広範囲にわたる多様なタイプの地域に対応した指標としての有効性について、検証される予定であるとの説明であった。ミラー氏いわく「これらの基礎調査を通じて、どの地域にどのような人々がいてどのような団体があり、現在の取り組み状況を把握することにより、必要な支援を検討していきます。最も重要なのは、人々がどの分野に取り組み、どの分野に取り組んでいないのかを把握することです。例えば、障がい者のアクセシビリティ、あるいは顧客満足といった、健康と安全性に関する分野については、取り組みは進んでいると思いますが、気候変動分野の取り組みは進んでいないだろうと予想しています。

個人的には、観光地としては新興の地域が『持続可能な観光のための指標』により関心を持つのか、あるいは伝統的な観光地が変わろうとしているのかに興味があります」とのことであった。

欧州という広範囲で多様な地域を対象に、統一指標がどのように活用され、成果を挙げていくのか、今後の調査結果と分析に期待したい。

DIT-ACHIEV Modelの開発過程と現状（アイルランド視察）

次の訪問地、ダブリン工科大学(Dublin Institute of Technology：以下、DIT)では、DIT-ACHIEV Modelの開発プロジェクトに取り組んできた、ケビン・グリフィン氏、セイラ・フラナガン女史、ジェーン・フィッツジェラルド女史が我々を迎え入れてくれた。DIT-ACHIEV Modelの詳細については『観光文化』216号に譲るが、

①行政（Administration）
②コミュニティ（Community）
③遺産（Heritage）
④インフラ（Infrastructure）
⑤企業（Enterprise）
⑥来訪者（Visitor）

の各観点から三十三の指標を設定し、持続可能な観光のための管理・運営を目指すシステムである（**図1**）。大学構内の一室で、我々は同モデルの

開発過程の苦労や課題と、その現状について伺った。

第一期：試行錯誤のモデル指標開発

DIT-ACHIEV Model開発プロジェクトは、現在までのところ大きく三期に分けられるが、その歴史の始まりは二〇〇四年に遡る（表1）。

第一期の取り組み地域は、グリフィン氏が幼少時代を過ごした土地に程近い、シャノン川の流れるティペラリー（Tipperary）という地域であった。

当時を振り返り、グリフィン氏は次のように語る。

「当初はある意味、私たちの中に素朴で未熟な考えがあったのでしょう。地域には問題があるはずであり、それは解決されるべきだ、そんなふうに思っていたのです」。ティペラリーは公共交通が未発達の地域であり、同氏が地域住民に対して「より良い公共交通機関が必要でしょう」と指摘したところ、地域側の反応は同氏の予想とは反するものだった。

地域の住民いわく「この地域を訪れる人々は自家用車で来て、一週間ほどの滞在で乗馬を楽しんだり、レストランや宿泊施設にお金を落としていってくれる。公共交通機関が発達すると来訪者はそんなに長く滞在しなくなるはずだ」と。

「この時の経験を通して、こちら側の論理で、一つの観点から勝手に課題を設定し、資金投資によって課題解決がなされるだろうと推測してはいけないということを学びました」。

指標開発のこの初期段階では、また別の問題も生じていた。最初の三年間で試行錯誤し、良かれと思う指標開発を行ったのだが、あまりにアカデミックな内容に偏ってしまい、グリフィン氏ら開発者しか扱えないものになってしまったのである。その後、EUのプロジェクト・マネジメントに精通する経済学者らからの有益なアドバイスも受けながら、二百以上もあった指標候補から、前述の通り六つの観点による三十三指標に絞り込み、DIT-ACHIEV Modelの原型を開発したのである。

第二期：キラーニーとカーリングフォードにおける指標開発

その後、指標開発研究費用の拠出が、アイルランド環境保護庁（Irish Environmental Protection Agency）からアイルランド観光庁（National Tourism Development Agency, Failte Ireland）に引き継がれた。環境と観光の双方の視点が重なり合い、持続可能な観光のための指標開発の第二期が始まることとなった。二〇〇八年～二〇一一年の四年間にわたる総額三十五万ユーロ規模のプロジェクトであった（表1）。

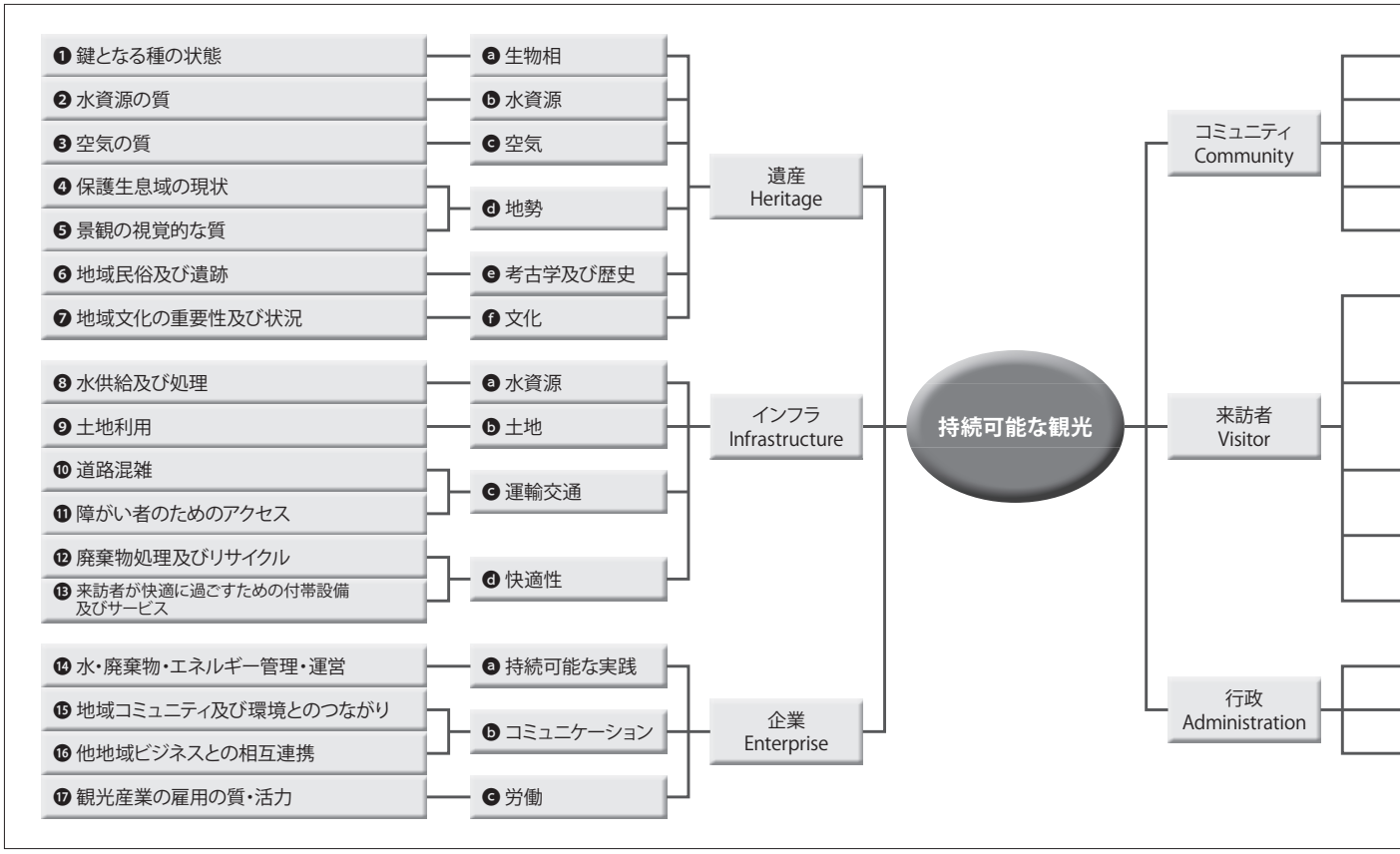
第二期では、アイルランド国内の十五、六の候補地から、ケリー州キラーニー（Killarney）とラウス州カーリングフォード（Carlingford）の二地域が指標導入のモデル地域に選定され、並行して指標開発の取り組

写真4　DITでのミーティングの様子

ⓐ アクセス	⑱ 問題に対する地域住民の態度
ⓑ 関与	⑲ 観光に関する地域住民の意識と態度
ⓒ 生活の質	⑳ 観光の質とそれが地域住民にどのように影響しているかについての地域住人の意識
ⓓ 受益者	㉑ 地域の慣習への観光による影響
ⓔ 人口	㉒ 人口動向
ⓐ 人数	㉓ 来訪者のプロフィール
ⓑ 観光行動	㉔ 来訪者の動機
	㉕ 来訪者の混雑予想
	㉖ リピート客の水準
ⓒ サービス	㉗ 地域管理者への来訪者の理解
ⓓ ホスピタリティ	㉘ 交通手段の来訪者満足度
	㉙ 地域住民への来訪者の理解
ⓔ 旅行消費額	㉚ 旅行消費額
ⓐ 目標	㉛ 行政目標の評価（環境面、経済面、社会面、行政面）
ⓑ 政策	㉜ 明確かつ対応力ある観光の管理・運営
ⓒ 管轄	㉝ 規則のモニタリングと維持

資料：DITケビン・グリフィン氏らの資料を基に作成

図1　DIT-ACHIEV Model（ダブリン工科大学　行政・コミュニティ・遺産インフラ・企業・来訪者モデル）の全体構成



みが進められることとなった。

キラーニーは、アイルランド南西部に位置する古くからの観光地であり、市議会と観光との結び付きが強く、商業組合の影響力が大きい。一方、北アイルランド（イギリス）との国境付近に位置するカーリングフォードでの取り組みはボランティアが中心となっている。これらは運営方法の異なるモデルケースとなった。

第一期で、アカデミックな内容に偏ってしまったことを踏まえて、指標の測定結果の見方にはより柔軟性を持たせるようにした。

さらに、上層部だけではなく、実際に現場を知る人々との関係を築き、情報収集・情報共有に当たることの重要性も分かってきた。「知事に会った後は、例えば野生動物関係のオフィサーを訪ね、何時間もいろいろと話をする。そうすると、環境汚染や気候変動のことなどを全て測定するのではなく、もっとシンプルに、ある種の鳥の数を調べるとよいということが分かってくる。鳥の数を数えて、過去の数と比較すれば、その鳥を取り巻く生態系、環境の状態がどう変化しているかの指標になるのです」。

モデル導入の過程で、グリフィン氏らは、DIT-ACHIEV Model 導入の取り組みをより多くの人々に理解

表1　DIT-ACHIEV Modelの取り組み

取り組み期	地域	導入成否	主な要因
第一期（2004〜06年）	ティペラリー（Tipperary）	△	•指標の開発はできたものの、内容がアカデミックすぎて、地域関係者には扱いにくいものとなってしまった
第二期（2008〜11年）	キラーニー（Killarney）	○	•測定項目や結果について厳密にしすぎないこととした •地域のコミュニティ、現場の実践者などを巻き込んで取り組んだ •地域関係者自らモニタリングできるようにトレーニングプログラムを策定した
	カーリングフォード（Carlingford）	○	
第三期（2012年〜現在）	テンプルバー（Temple Bar）	×	•地区の関係組織に指標導入の意識を持たせることができなかった
	フィンガル（Fingal）	−	（導入検討中）

（注）導入成否：ヒアリング内容から筆者により仮に評価した

してもらうために、試行錯誤を重ねてきた。「取り組みに関する新聞掲載については、キラーニーでは歓迎されたけれども、カーリングフォードではそうではなかった。それぞれの地域の人々の独自の考え方がありますね」。フラナガン女史も続ける。「ラジオにも出演したし、今思えば、随分といろいろなことをして取り組みを広げようとしてきたわね」。

彼らは、地域住民、狩猟団体、観光関係者、研究機関など、さまざまな人々と直接会い、話をし、少しずつ理解者・協力者の範囲を広めてきた。

指標項目の測定については、地域住民はじめ、なるべく地域の関係者が測定できるようにトレーニングプログラムも工夫して作成した。こうして、データを地域関係者が自ら集めることで、当事者意識を高め、現在では、その数値が、地域関係者が地域の問題を議論する際の出発点となっているという。

写真5　テンプルバーの街並み

ちなみに、測定指標の項目の一つである訪問者への調査結果をもとに、キラーニーではサイクリングロード整備資金として五十万ユーロを運輸省から獲得している。

第三期：新たな試み

キラーニーとカーリングフォードという二地域でのモデル導入の後、ダブリンの観光中心地であるテンプルバー（Temple Bar）での指標導入が新たに試みられることとなった（**表1**）。二地域とは異なり、市街地の中心部にある同地は、石畳の両側にホテルやレストラン、アイリッシュパブが軒を連ね、多くの観光客がダブリン観光の拠点として宿泊する地区である。

しかし、結論から言うと「テンプルバーでの指標導入は失敗に終わった」ということであった。学生による観光客への調査はほぼ終了していたが、「地区の事業者や各種組織が動かなかった」という。

「テンプルバーには、ビジネス関連の組織だけでなく、文化活動を担う組織など、複数の多様な組織があり、それぞれに自分たちが地区を運営しているという意識と誇りがある。そのうちの誰一人として指標導入をしようと言い出さなかった。自分たちは十分にやっていけるので問題ないというのです」とグリフィン氏は語っていた。

現在、グリフィン氏らは、DIT-ACHIEV Modelに関心を示したフィンガル（Fingal）という地域での指標導入に取り組んでいる。ダブリンの北に位置する同地では、これまでの知見と経験を活かし、一年の期間で三万ユーロを掛けて、住民調査などを実施、問題点の洗い出しを行っている最中である。その後、実際に問題点を改善する実行段階に移行する予定となっている。

我が国でのさらなる指標導入を目指して

今回の視察を通じ、指標開発過程の一端をうかがい知ることができた。二つの事例からは、研究者のみで取り組むのではなく、指標開発段階から地域コミュニティや民間事業者などを巻き込み、理解を広め、指標開発後も、地域コミュニティなどが主体的に指標を用いたモニタリングをできるようにするための機運と仕組みづくりの重要性を改めて認識した。

今回は紙幅の関係で視察内容の一部の紹介にとどまったが、今後国内での指標導入のさらなる取り組みに向け、今回の視察で得た知見を活かしていきたい。

ご多忙の中、我々を快く受け入れ、長年にわたる指標開発と導入の取り組み経緯を飾ることなく丁寧に語っていただいた、ミラー氏、グリフィン氏、フラナガン女史、フィッツジェラルド女史に、改めて感謝申し上げる。

（しみず　ゆういち）

連載Ⅰ
あの町この町
第58回

スローシティのすすめ——福岡県・香春町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内　紀
（イラスト＝著者）

九州の小都市を訪ねてきた。そのときの写真もあるし地図もある。メモも取った。にもかかわらず、いまもってよくわからない。まるでのぞき眼鏡でのぞいたように、小さな、懐かしい風景が目の前に浮かんでくる。

福岡で仕事をすませ、小倉で一泊。翌朝早めに駅を発った。日田彦山線といって、福岡県の小倉と大分県の日田を結んでいる。駅でもらった時刻表兼沿線情報マップはカラー絵入りで、沿線の店や名物の紹介に加えて「ひたひこ共通クーポン」なるものがついており、日田彦山線活性化推進沿線自治体連絡会の発行。三市三町一村の名が掲げてある。ローカル線維持のための涙ぐましい努力が見てとれる。

はじめて乗る路線なので、熱心にまわりの景色をながめていた。鉱山があるらしく、山並みの一角が切り取られていたりする。国道322号が寄りそうように走っている。おおかたの人は車かバスなのか、乗客の大半は通学の生徒で、制服姿がいなくなると、ガランとした車内に朝の陽ざしがさしこんでいた。

こちらの目的地は香春町といって、四十分たらずで着く。金辺峠という山あいを抜けると、微妙に風景が変化した。白壁の集落、段差のある地形、目のとどくかぎり、のこりくまなく耕され、道と畦とが絵地図のように美しい。駅名が「採銅所」というのは銅山の名ごりだろうか。「次は香春」のアナウンスで降り支度をした。

町のことは歌人土屋文明のエッセイ「豊前鏡山」で知った。戦前のことだが、小倉でアララギ会の歌会があるのに際し、先に香春で泊って、翌日、小倉の会に出るつもりでいたところ、鉄道の時間が合わず中止した。それでもやはり思いがのこったので、歌会のあと世話人の車で峠を越えていった。そんなに執着したのは万葉集に町の郊外の鏡山がうたわれており、万葉学者でもある歌人としては、「是非一見したい」と久しく念じていたからだ。万葉集の歌というのは、次の三首である。

河内王を豊前国鏡山に葬りし時手持女王の作れる歌三首
王の親魂会へや豊国の鏡の山を宮と定むる（巻三、四一七）
豊国の鏡の山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさぬ（四一八）
石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく（四一九）

河内王という貴人が豊前鏡山に葬られ、ゆかりの女性が詠んだ。文明たちが訪ねたころは、もうそんなことは忘れられていて、「香春の町が前方に見えて来たので車を止めて附近の人家で河内王の御墓はと尋ねたがどうも分からない」といったふうに訪問記はつづられていく。鏡山は山ではなく集落の名であることが判明。ようやく探しあてたところ、「河内王御墓参考地」というヘンな標示板が立てられていた。宮内省（当時）

としては、ここを墓所と決定しかねて曖昧な標示にしたらしい。河内王という宮びとは紀元七世紀の持統天皇のころ大宰師に任じられ、赴任して五年後に死去。詠み手の「手持女王」は妃のようだが、身分その他一切不明。あとでわかったことだが、御墓参考地の近くにもう一つ社があって、そちらが本来の鏡山かもしれない。万葉集には、ほかにも鏡山をうたったものがあって、その一つは、次のとおり。

豊国の香春は吾家紐児(わぎへひものこ)い交(つが)り居れば香春は吾家（巻九、一七六七）

もっとも、私は遠い昔の万葉びとよりも、町自体に興味があった。背後に香春嶽という山があり、それが石灰岩の採掘で、「半面を殺ぎ取られ断崖が白々と立って居る」というのだ。麓は勾金(まがりがね)という古い村だという。採銅所―鏡山―勾金―香春。地名をたどるだけで独特の山国のイメージがわいてきて、夢をそそられるではないか。

駅前広場の大きな石に、貝原益軒の『豊国紀行』の一節が刻んである。『養生訓』で有名な益軒先生はもともと福岡の人だが、元禄七年（一六九四）、はじめて当地へ来たらしい。

「香春は豊前田河郡なり。香春は名所也。萬葉九巻に哥あり。又此神の事神社考にあり。香春嶽とて高山あり……」

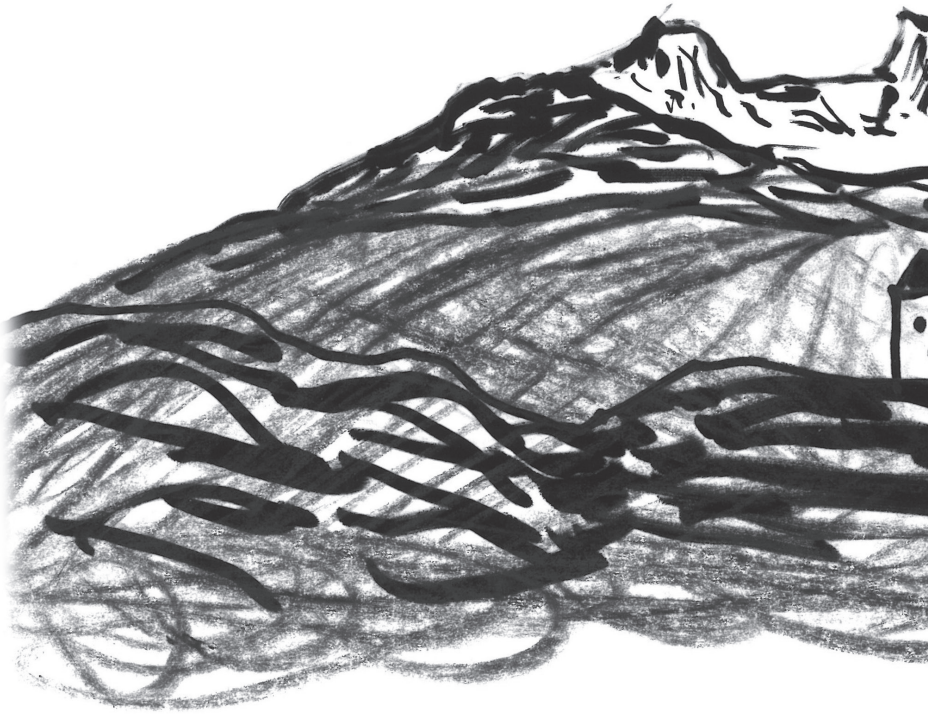
本業が医者だったせいか、紀行文はそっけない。地名を羅列しただけで、立派な黒い大理石がもったいないぐらいのものである。

石碑から目を上げて辺りを見まわしたとたん、おもわず目をみはった。町並みをへだてて、かなたに見えるのが香春嶽だろう。山というよりも、「半面を殺ぎ取られた断崖」そのもので、グランドキャニオンの渓谷の一部を高台にのせたぐあいだ。目を据えたままゆるい坂道を下り、金辺川のほとりに立つと、正面に全景がひろがった。正確にいうと香春嶽は一の岳、二の岳、三の岳のつらなりで、町から見えるのは一の岳の一面にすぎないが、切り取られて露出した岩の壁が、幻のように大空に浮いている。山腹に砕石場があって、砕かれた石が屋根のあるベルトコンベアで川沿いの工場へと運ばれてくる。

町の入口に風格のある店があって、「名菓千鳥饅頭」の千鳥屋。創業寛永七年（一六三〇）というから、益軒先生より、さらに古い。少し先で通りが二手に分かれていて、「従是南豊後日田道」の石標が見える。香春はながらく小倉街道一の宿駅だった。

つづいて大きな寺の大きな甍(いらか)。山門わきの左右の石柱に「國富民安」「丘文来月」と、風雅な字体で刻まれている。古木が枝をのばした下に自然石を敷きつめた石畳が奥につづいている。朽ち葉がきれいにはき寄せてあって、チリ一つない。おもわずたどっていくと、本堂の前に来た。無住とは思えないが、人のけはいがなく、辺りは静けさを煮つめたように静まり返っている。

実はこのあたりから記憶があやしいのだ。個々のことははっきり覚え



香春嶽一の岳と砕石場

ているのに、全体がボンヤリしていて、のぞき眼鏡の風景に似てくる。

またも通りが二手に分かれ、まっすぐは旧日田道で町名が山下町。右に折れこむのは店の並ぶ生活道で、魚町と標示されている。山下町は文字どおり香春嶽一の岳の山裾にあたり、寺が一つ、また一つ。空地の前で大きな「伊能忠敬測量記念碑」と往き合った。文化九年（一八一二）七月、測量隊を率いて彦山より香春に来た。山下町の年寄の屋敷に泊り、翌日、おりからの日食観測のため、先に小倉へ向かった。測量隊メンバーは分宿して実測にあたった。

少し行くと古い町によくあるが、通りが鉤形に九十度、さらにまた九十度折れてつづいていく。「札の辻」と石柱があり、指さした手の形で「呼野　石原町　香春　／大隅　秋月　久留米」と、それぞれ逆方向を差している。

石組みの上に赤レンガを積み、その上に瓦をのせた雄壮な塀の前に「御茶屋香春藩庁跡」の石柱。江戸時代は小倉藩に属し、藩主の領内巡見のための宿泊所としてお茶屋が設けられていた。幕末の混乱期には、小倉藩の藩庁の役目をつとめたことがあって、このような二重の命名になったようだ。

さらに行くと、ひろびろとした更地で、中央の奥まったところの三段式の白い御影石に、「田川郡役所跡／香春町役場跡」と二行分かちで刻まれている。明治末年に田川郡の郡役所が置かれ、郡制廃止ののちは町役場として使われた建物があった。すべて取り払われて、すぐかたわらに大きな不動産広告板が立ててある。

「旧香春町役場跡地　宅地分譲開始！

石柱のある小さな一角だけのこして、全十区画。団地名を「プラチナタウン香春」という。山から吹き下ろす風に「分譲中」の旗がハタハタとはためいていた。

一つ一つ克明に覚えている。にもかかわらず、なぜか現実のことと思えず、夢のなかの風景のようである。一つには、ここにくるまでのあいだ、まるきり人に会わなかったせいだろう。人の姿がなく、軽トラックが一台、走り通っただけだった。無人の町のようで、そこに黒い影を落として古風な家々が並んでいる。音がしない。テレビの声も流れてこない。犬も鳴かない。

町役場跡地の山側は人の背の倍ほどもある高いコンクリート塀がのびていて、何げなく見上げると、十匹ほどのサルが塀の上にズラリと並んですわっていた。一歩近づくと、いっせいに立ち上がり、こちらを見下ろしながら、ゆっくりと塀づたいに裏山へと消えていった。さながら白

日夢のような気がしたのは、そんなこともあずかっていた。

町役場跡地一帯が本町で、かつてはいちばん賑わったエリアなのだろう。ひとけのない家並みの一角に「竹本津大夫誕生の地」とあって、旧家の倅（せがれ）が義大夫になじみ、長じてその道の名人といわれる人になった。

魚町筋にもどる角は広大な空地で、立派な塀と門だけがのこされている。古木が一本、ていていとのび、白い敷石がナゾの通路のように点々とつづいている。

「肉のまつかわ」「仕出し　鉢盛」「長谷川療術院」「鮮魚　刺身」「宝石　時計」……。看板もシャッターもガラス戸も古びているのは、廃業して久しいのだろう。

「お客様各位　御挨拶申し上げます」

もっとも新しいのは二〇一四年三月吉日の日付で、理髪店のお知らせ。三月三十一日をもって店を閉じる。「病気療養のため」とあって、病を押してつづけてきたが、もはや限度と思い定めてのことではあるまいか。

光願寺跡の大樟

どんなシャッター街でも理髪店と美容院だけは営業中の光景を見なれてきたが、最後の砦が落ちたぐあいだ。四十五度にうねった通りにお昼すぎの陽ざしがかかり、建物の黒い影がギザギザ模様の影絵をつくっていた。

本通りにもどって気がついたが、山裾の少し高いところに石仏が立っている。一体だけが、じっとこちらを見つめている。不審に思いながらながめていると、三輪車の孫をつれた年配の人がやってきた。はじめて人に会って、なにやら懐かしくてならず、おもわず挨拶すると、丁寧な挨拶が返ってきた。石の仏は光願寺という由緒ある寺があったところで、山崩れのため廃寺となったなごりだそうだ。

山の斜面に天を覆うように大木がのびている。県文化財指定木の大樟（くす）で、根周り15・6メートル、胸高周り9・2メートル、枝張り東西29メートル、南北20メートル、樹齢約800年。山崩れの際にも、よくもちこたえ、境内の半分がたを救ったという。

「上がってみますか?」

すすめられるままに、半ば草に埋もれた石段をのぼっていった。石仏は等身大で、お地蔵さまのつくりである。仮普請の小さなお堂があって、それも背をこす草につつまれている。樟は幹に大きな空洞があるが、悠然と枝をひろげて、たくましい。植物は、根を張ってしまえば、急斜面でもへっちゃらしいのだ。

遠慮がちに過疎がすすんだことをいうと、その人は無言のままうなずいた。旧道が整備され、小倉がグンと近くなり、とたんに町から若い人がいなくなった。近くに道の駅ができて、商店がつぎつぎに廃業していった。畳屋、薬局、すし屋、洋品店、青果店、スナック、料理屋、カメラ屋、写真館が二軒、自転車屋、文房具店、豆腐屋……。歌うようにしてあげていく。

「醤油の工場もありました」

近くに行くと、モロミの匂いがした。何代もつづいた味噌づくりの店

もあった。すべてなくなって、髪を刈るにも遠出しなくてはならない。

「いい町なんですがねぇ」

ひとりごとのように言うと、グズりだした孫を抱き上げ、三輪車をぶら下げて急坂を下っていく。その背に声を高めて、お礼を言った。

川筋にもどるすがら、イタリアで出くわした「チッタズロー（スローシティ）」の運動を考えていた。何年ぶりかで北イタリアを訪れて、同じ町がこうも変わるものかとびっくりした覚えがある。スローシティは文字どおり「ゆっくり（ズロー）」をモットーにして、忙しない現代を追いかけない。あらためて自分たちの土地と風土を見直そうという運動だった。自然、歴史、文化、生活、その他に「資産」が眠っていないだろうか。あまりに日常的で、住んでいると気づかない。いちど「よそ者」の目で見直すと、ステキな宝物がひそんでいる。掘り起こし、現代的な価値を見つけ、そこを基本にして「ゆっくりした町（チッタズロー）」の地域づくりをする。そんな町々を紹介する本も出ていた。イタリアの小さな町があざやかに、大都市に負けない魅力と底力を提示した。

イタリア以上に日本はスローシティの必要に迫られているだろう。地方都市、農山村の疲弊ぶりがいわれて随分になる。香春町の場合、なぜこうなったのか、どうすればよかったのか、今後どうすればいいのか。「資産」なら、いろいろあるのだ。和製グランドキャニオンのような景観、原型をそっくりのこした旧市のたたずまい、サルと共存できる自然、郊外には万葉ゆかりの遺跡。

「香春『鍋屋騒動』」

横丁の一角に、幕末に起きた事件の経過がしるしてあって、供養塔が建てられていたが、日本の近代化のなかでこの小さな町にも歴史の嵐が吹き抜けた。文化遺産、歴史遺産、生活資産は、ほんの少し手をかすだけで、きっと甦る。朝食つきの安い宿で旧市街が急に明るくなったり、古い建物をリノベーションして、お洒落なカフェをつくった町もある。ちょっとした工夫と知恵、それに夢があると、てきめんに若い人がもどってくる。

川沿いの石灰工場は黒い巨人がうずくまったように大きい。ベルトコンベアが三角の大屋根につづいていて、支柱の赤い鉄塔が二本足のように見える。一方は黒い産業資産、もう一方は白い自然遺産、これほど異質の二つがベルトで結ばれているのは珍しい。

現代芸術にはインスタレーションとよばれる表現の技法がある。自然のなかに現物を配置して、現場そのものをたのしんでもらう。二十世紀が終わり近くなって、必然的に生み出した表現法だろう。額ぶちのチマチマした美ではなく、風と雨と大気のなかに全身で体験してもらう。豊前・香春町は町全体が一つのインスタレーションのようにもとれる。人手ではなく歳月が選別してつくり出した。そんな目で再生の糸口を考えてもいいのである。

黒い工場と川をへだてて向き合うところに小学校がある。六角の小塔をもち、とてもいい建物だ。校門にプラスチックの人形が立っていた。黄色い帽子に赤いランドセル。クリクリした大きな目で、頬をふくらまして右手をスックとのばしている。

「ハイ、名案があります」

ハイ、名案があります

自分たちの町の再生プランを思いついたぐあいなのだ。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り79

「泊食分離」と「ターンダウン・サービス」

旅行作家　山口　由美

旅館のおもてなしをグローバルスタンダードに

日本の旅館が、海外からも注目されるようになって久しい。かつて外国人は、当然のこととしてホテルに泊まり、日本のクラシックホテルの多くはそれを受け入れるために歴史を積み上げてきた。例えば、私の曽祖父が開業した箱根の富士屋ホテルなどは、その典型である。

日本のホテルが海外と比べて特異であったのは、旅館という独自の宿文化が存在したため、旅館ではなくホテルであることに意識的だったことではないかと私は思う。

それはまた、ホテルと旅館を明確に分けるという発想にも結び付いた。旅館業法でもホテル営業は、旅館営業とは別に定義付けされているし、業界団体も別である。

もっとも同じ宿泊業として、お互いの影響がなかったわけではない。例えば、個室に鍵を掛けてプライバシーを保つという発想は、ホテルに特有のものだった。しかし、現在では、ほとんどの旅館で個室に鍵を掛けるスタイルが採用されている。これは、明らかにホテルの影響である。

ホテルにおける旅館の影響といえば、例えば、浴衣が挙げられる。宿泊客用に寝間着を用意するという文化は、そもそもホテルにはなかった。だが、いつの頃からか、日本のホテルでは、旅館と同じくホテル名を染め抜いた浴衣を客室に準備するようになった。今では、外資系ホテルでも浴衣や寝間着があるのが普通のことになっている。

今後、日本の旅館は、ホテルとの対比の中で、どのように変化していくのだろうか。従来通り、それぞれ別の業態として続いていくのだろうか。それとも、もっと本質的な部分で融合していくのだろうか。将来的に日本のホスピタリティー産業が、世界でいかに競争力を持ち得ていくかのポイントは、旅館という日本独自のスタイルをどのようにして、グローバルスタンダードの中に着地させるかにあると私は思う。

その中で、さまざまな革新が生まれている。その一つが「泊食分離」の挑戦だ。

一泊二食という料金体系は、食事を売りとする旅館にとって、長らく必然のことと考えられてきた。そこにメスを入れようという考え方である。

だが、食事が含まれている料金体系は、実は旅館だけに特有なものではない。サファリロッジや孤島リゾートなど、孤立した環境にあるリゾートでは、一泊三食付きのオールインクルーシブが一般的だ。エコツーリズムの広がりを受けて、このタイプのリゾートは、世界的に増加している。

こうした所は、長期滞在が前提だから、毎日、食べきれないほどのごちそうが出るわけではない。夕食であれば、前菜、メイン、デザートの

コースが基本。それでいてメニューは毎日替わる。こういう対応の出来る宿が日本では本当に少ない。

私がいつも疑問に思うのは、旅館が一泊二食付きの料金設定であることではなく、夕食も朝食も、ここぞとばかりの大ごちそうで、それ以外の選択肢がないことなのだ。

「泊食分離」は、確かに大きな革新だ。都市、若しくは軽井沢のような外食の選択肢が多いリゾートでは魅力も大きい。だが、孤立した立地のリゾートなど、外食の選択肢が少ない所では、宿の食事をパスしてしまうと、今度は夕食難民になりかねない。日本の旅館の問題点は一泊二食付きの料金体系ではなく、食のプランが一泊を前提に組み立てられていることにあるのだと思う。

そして、もう一つ、旅館にベッドの導入が進み、部屋食ではなく食事処での食事になり、個室のプライバシーをより重視するようになった中で、リゾートホテルと比較してサービスが手薄になっていると実感するのが、寝る前に部屋を整えるサービスである。

ラグジュアリーホテルにおいては、夜のいわゆるターンダウン・サービスが不可欠なものになっている。これは、ベッドのシーツや毛布の端を折って、寝る準備を整えるサービスのこと。二度目のハウスキーピングの意味も含まれていて、バスルームなどは清掃して、タオルを補充してくれる。仕上げには「グッドナイト・チョコレート」など、ちょっとしたものを枕元に置く。これをチョコレートではなく、地元の民芸品にして評判を得たのがアマンリゾーツだった。小さなテディベアが置かれるのはコンラッド。それらを目当てに泊まる客もいるという。サービスの一環として工夫を凝らすホテルが多い。

近年、特に海外のリゾートでは、このターンダウン・サービスが進化している。天蓋付きのベッドであれば、蚊帳を広げて、部屋の明かりを落として、昼間とは全く違う雰囲気に整えてくれる。

そういう時にふと旅館を思い出す。夜、布団を敷いて、枕元に水差しやスタンドを置き、寝る準備を整える。昼と夜とで全く違う部屋に変えるマジックは、そもそも旅館のもてなしだったはずなのにと。だが、ベッドの導入された旅館で、ターンダウン・サービスがあるところは少ない。旅館がもっと魅力的になっていく伸びしろはまだあるに違いない。

（やまぐち　ゆみ）

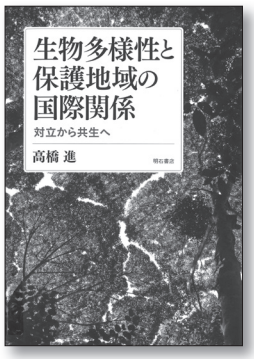
ある高級旅館の洋朝食。
旅館の食事も日々進化している。

アマンダリのターンダウン・サービス。
枕の上の民芸品が愛らしい。

旅の図書館 掲示板

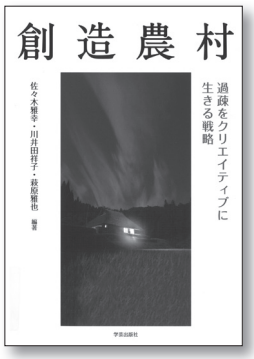
新着図書紹介

「生物の多様性」という言葉が我が国の法律に記載されたのは、「環境基本法」（一九九三年（平成五年）十一月施行）第十四条で「生物の多様性の確保」として規定されたのが最初である。**『生物多様性と保護地域の国際関係　対立から共生へ』（高橋進著、明石書店）**では、「私たちの日常生活が、知らないうちにはるか離れた熱帯林破壊の原因にもつながっている。私たちは生物多様性の喪失による被害者であると同時に、知らないうちに加害者になる可能性がある。対立の根源ともなっている経済格差や資源などの不公平な配分なども含めた解消が必要になる」と著者は指摘する。世界各国が対立を超えて、地球規模の視点から「地域を超えた共生」「種類を超えた共生」「時間を超えた共生」の三つの共生が、生物多様性保全を進める上で根幹になると強調する。対立と共生の対極から、生物多様性の保全の在り方を論じている。



A5判　244ページ
定価　2,800円
明石書店

「創造農村」とは、「住民の自治と創意に基づいて、豊かな自然生態系を保全する中で固有の文化を育み、新たな芸術・科学・技術を導入し、職人的ものづくりと農林業の結合による自立的循環的な地域経済を備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ農村である」と定義する。**『創造農村　過疎をクリエイティブに生きる戦略』（佐々木雅幸、川井田祥子、萩原雅也編著、学芸出版社）**では、「景観を保全し、美しさを取り戻すことが重要になり、雄大な自然景観と向き合った時に、何を新たに付け加えられるのかが、創造的な活動者に問われることになる」として、推進するリーダーの存在が期待されている。創造農村の先進事例や推進するリーダーの発言がまとめられ、今後、創造的な地域づくりを進める関係者に、その戦略と実践法を教えてくれる。（挑全）



A5判　272ページ
定価　3,000円
学芸出版社

利用状況

ベストリーダー（2014年2月～4月）

当図書館への来館者によく閲覧されている本を紹介。

【旅行ガイドブック部門】

海外旅行では、

- **『るるぶフランス2014-2015』（JTBパブリッシング）**
- **『るるぶパリ2014』（JTBパブリッシング）**
- **『地球の歩き方フランス2014-2015』（ダイヤモンド・ビッグ社）**

国内旅行では、

- **『TRAVELSTYLE 北海道 2014』（成美堂出版）**

【その他一般部門】

- **『時刻表でたどる特急・急行史』（原口隆行著、JTBパブリッシング）**
- **『旅行者動向2013 国内旅行マーケットの実態と旅行者の志向』（公益財団法人日本交通公社）**
- **『数字が語る旅行業2013』（一般社団法人日本旅行業協会）**

副館長のつぶやき

最近当館にやってきた新刊図書の一つに、『世界の夢の図書館』という本がある。「古今東西の美しき知の遺産が、ここにある」というメッセージとともに、世界最高峰と言われる37館の特色や魅力が、それぞれの国の歴史・文化的な背景を交えて紹介されている。蔵書数や建築的な価値においては当館とそれらを比べるべくもないのだが、「旅・観光」に関する図書館としては、世界の中でも稀有な存在であると自負したい。

本を閲覧できる場としてだけでなく、旅・観光に関する図書の魅力（＝価値）が伝えられる“小さくても光る”図書館に一歩でも近付けていけたらと思います。4月に着任しました。（大隅）

特別展示のご案内

観光資源と地域の魅力

2014年7月1日（火）～2014年8月29日（金）

旅人をその地へ誘う魅力としては、美しい風景もあれば、珍しい風俗やおいしい食などもあり、一様ではありません。地域の魅力は、時代とともに、どのようなものがどのように紹介されてきたのでしょうか。

例えば、1894年（明治27年）に発行された志賀重昂『日本風景論』では、独自の基準（瀟洒、美、跌宕*等）を用い、日本の風景美を地理学的に分類・紹介しており、日本人の風景観に大きな影響を与えました。また、観光地の魅力は「観光資源」という言葉で表現・説明されますが、戦前から日本では「観光資源」の評価と研究が進められており、観光地を魅力的にするためのさまざまな取り組みにも活用されてきました。（*のびのびとして大きいさま）

今回は、「観光資源」と「地域の魅力」をキーワードに、国内外の見どころを紹介する各種旅行案内（ミシュランガイド等）、観光地の評価やランキングなど、関連図書、専門書、古書・稀覯書（抜粋コピー）等を集めてみました。当財団が「日本における観光資源の評価に関する研究」の成果を基に監修した写真集『美しき日本　旅の風光』も併せて展示いたします。

ぜひ多くの方に当館を訪れていただければと思います。

＊詳細は、ホームページhttp://www.jtb.or.jp/へ。旅の図書館特別展示で検索

公益財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■旅行者動向2013　最新刊
最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自のさまざまな切り口で分析。グラフや図表を多用して分かりやすく解説。政策立案や事業展開などに幅広く活用できるマーケティングデータ集。二〇一三年十一月発行。

■観光地経営の視点と実践　最新刊
観光地の持続的発展にとって、今や「観光地を経営する」という地域マネジメントの考え方が重要。本テキストは、既存観光地の現場で日々努力し、活躍されている方々が主な対象。「観光地経営」を「一定の方針（ビジョン）に基づいて、観光地を構成するさまざまな経営資源、推進主体をマネジメントするための一連の組織的活動」と定義し、八つの視点と十の実践例について、その考え方と展開手法を解説。当財団調査研究専門機関化五〇周年記念事業の一環として発刊。二〇一三年十二月発行（丸善出版）。

■機関誌『観光文化』221号　最新刊
当財団が実施してきた自主研究の成果等を交えながら、国際的な視野から経済、地域計画、交通運輸、マーケティング、造園学といった学問領域と観光との関わりを紹介。海外における観光研究の知見の日本への移入や適用、日本からの発信手法や今後の観光研究の方向性についての提言を試みた一冊。二〇一四年四月発行。（季刊　一、四、七、十月）。

■美しき日本　旅の風光　最新刊
調査研究専門機関として五〇周年を迎えたことを期に、当財団が長年取り組んできた「日本における観光資源の評価に関する研究」の成果を基に監修。北海道から沖縄までをエリアごとにまとめ、風景だけではなく、伝統文化、神社仏閣、温泉、街、食、祭り、芸能など、いつまでも残しておきたい日本の大切な資源として紹介。完全英語訳付きで海外の方にも広く日本の観光資源の魅力をお伝えできる一冊。二〇一四年五月発行（JTBパブリッシング）。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：公益財団法人日本交通公社　観光研究情報室
電話　03・5255・6073　http://www.jtb.or.jp

次号予告

●「温泉」は日本人の行きたい旅行の上位に挙げられます。しかし、温泉地の多くは消費者ニーズや旅行形態の変化に対応できず低迷を続けています。消費者の旅行に求める価値が時代とともに変化していく中で、温泉地が持続的に発展していくためには、常に時代の変化に感覚を研ぎ澄ませ、時代を超えて変わらない価値のあるものを踏まえつつ、温泉地づくりを実践していくことが大切です。そこで次号では、温泉地における不易流行について考えます。温泉地づくりに熱心に取り組む地域のリーダーが語る地域の現状認識と将来展望、温泉地研究の第一人者からの提言に加えて、「温泉まちづくり研究会」（当財団自主研究）の研究成果等を踏まえて、温泉地、温泉旅館の課題と展望を考察していきます。

当財団からのおしらせ

「2014年度シンポジウム・セミナーのご案内」

当財団主催の今年度シンポジウム・セミナー既開催・予定についてご案内します。

●平成二十六年度　観光地経営講座　既開催
「観光地経営の〝八つの視点〟と実践～組織を見直して実力を高める！」
二〇一四年六月二十六日（木）～二十七日（金）
会場：当財団大会議室（朝日生命大手町ビル17階）
二〇一三年十二月発刊の『観光地経営の視点と実践』をテキストに、今回の講座は、特に「組織・人材」に焦点を当てて開催しました。当財団研究員の他、八ヶ岳観光圏、富士河口湖町で観光地経営に携わる実践者が講師を務め、各地の取り組みを解説。総括ディスカッションでは、受講者も交えた意見交換を行い、参考にすべき点などを整理しました。同講座は来年度も開催する予定です。

●旅行動向シンポジウム（仮称）　下期開催予定
当財団独自の旅行市場調査および観光政策に関する調査の研究成果発信の場として、財団研究員とゲストスピーカーが発表を行う予定です。現在準備を進めています。最新情報・詳細については、準備ができ次第、ホームページのインフォメーションでご案内します。
当財団ホームページ URL：http://www.jtb.or.jp　トップページ

「研究員コラムの紹介」（二〇一四年三月～五月）
行く先々で見て触れて、そして地元の人たちと語り、感じたこと。世相のなかに見た観光の未来像など、各研究員が独自の経験と視点を基にして、ホットな雑感を綴ります。当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した三カ月分をご紹介します。　**研究員コラム一覧　で検索できます。**

209　映画は観光地のイメージをどう変えるのか？――――（外山昌樹）
210　環境と共生するリゾート～カナダ・ウィスラーを訪れて――（中島泰）
211　文化財保護に観光客の力を借りよう――――（西川亮）
212　「遊び心」が高める地域の魅力――――（福永香織）
213　「地味な珍しさ」にも注目して地域の魅力発見を――――（堀木美告）
214　「聖地」における観光のあり方について――――（牧野博明）

編集後記

◆私たちが海外での見聞を広めることができるようになって、観光対象としての資源は実に多様になっています。外国人にも紹介したくなるような我が国が有する素晴らしい観光資源がどういうものか、いわゆる「日本らしさ」とは一体なんでしょうか。

◆風景を眺めると、日本人なら「ああ、日本らしい風景だなあ」と直感的に認識することがあります。自然資源ではそう言えることが多いかもしれません。人文資源ではどうでしょうか。人は、自身の目、耳などの五感そして心のフィルターを通してモノを捉えています。価値を見いだすために評価軸あるいは視点を設定して、今日的価値基準で客観的に観光資源を評価・選定した研究プロセスと成果を紹介しました。

◆観光資源の「場」に行くこと、居ることに価値を見いだせるか、決定する根拠になる評価基準を示しました。皆さまの一つの判断材料になることを期待しています。
（片桐）

観光文化編集室メールアドレス：
kankoubunka@jtb.or.jp

【観光文化220号　お詫びと訂正】
・6ページ　特集1　1段目6行目
二十一の学問分野（正）二十の学問分野（誤）
著者溝尾良隆氏から、後日オリジナルのJ・ジャファリ氏の論文にあたったところ、二十分野ではなくて二十一分野が正しいことが判明したと連絡がありました。

【観光文化221号　お詫びと訂正】
・36ページ　特集テーマからの視座
3段目5行目　二カ所
「他者依存型」（正）「他社依存型」（誤）
以上、ここに訂正してお詫び申し上げます。
（観光文化編集室）

観光文化222号やバックナンバーをPDFで閲覧できます。**観光文化最新号**　で検索

Cover Story

富士山麓を撮り続けて30年余。四季折々、富士の表情は千変万化の美しさを醸し出す。今回は山中湖村の花畑と富士である。群青の空へ龍の形の白雲が立ちのぼる光景もすがすがしい。

（Photo and Words by 樋口健二）

機関誌

観光文化　第222号

第38巻3号通巻第222号

発行日：2014年7月10日

●

発行所：公益財団法人　日本交通公社
東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F
〒100-0004　☎03-5255-6071
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F　観光研究情報室内
〒100-0004　☎03-5255-6090
http://www.jtb.or.jp/publishing/
kankoubunka@jtb.or.jp

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人

●

制作・印刷：株式会社REGION

禁無断転載

ISSN　0385-5554